

四ツ廻Ⅱ遺跡
林廻り遺跡
受馬遺跡

一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ

1996. 3

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

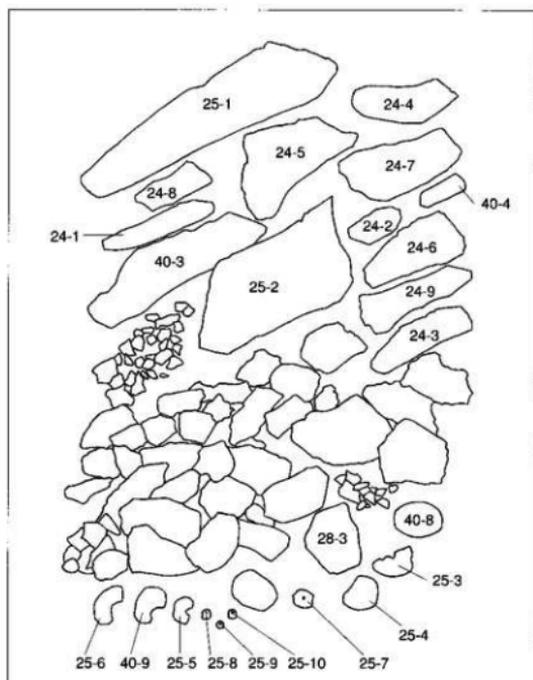
四 ツ 廻 II 遺 跡
林 廻 り 遺 跡
受 馬 遺 跡

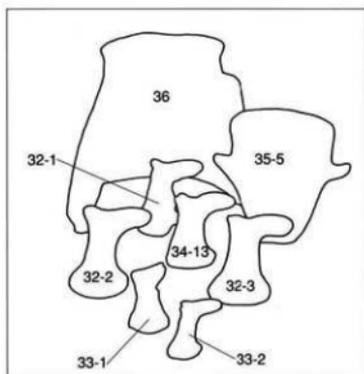
一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ

1996. 3

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会







序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても、道路予定地内の文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成5年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解をいただきたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成8年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 水 上 幹 之

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局からの委託を受けて、一般国道9号（安来道路）建設予定地内の遺跡の発掘調査を行っています。安来道路の西端部分、東出雲町地内の調査については、平成4年度から実施しています。本書は、このうち平成5年度に東出雲町内において実施した調査の結果をまとめたものです。

東出雲町は、古代国庁が置かれ出雲地方の中心地として栄えた意宇平野を西に控え、北に中海を望むという立地を活かし、文化が育まれており、古代の遺跡も多数発見されています。今回調査を実施しました四ツ廻Ⅱ遺跡では古墳時代の玉作工房跡が、林廻り遺跡では奈良時代の集落跡が、受馬遺跡では何百年も続く信仰の跡がそれぞれ発見され、この地域の歴史を考える上で貴重な資料が新たに加わりました。

本報告が東出雲町周辺の歴史を解明する契機となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役に立てば幸いです。

本書の刊行にあたり、調査にご協力をいただきました地域住民の皆様や建設省松江国道工事事務所をはじめ関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成8年3月

島根県教育委員会

教育長 清原茂治

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局から委託を受けて、鳥根県教育委員会が1993（平成5）年度に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 本書で扱う遺跡は、鳥根県八束郡東山雲町に所在する四ツ廻Ⅱ遺跡、林廻り遺跡、受馬遺跡である。
3. 現地調査組織は次の通りである。

平成5年度

調査主体 鳥根県教育委員会

事務局 文化課 広沢卓嗣（課長）、山根成（同課長補佐）、中島 哲（文化係長）、伊藤宏（同文化係主事） 埋蔵文化財調査センター 勝部 昭（センター長）、久家儀夫（同課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、田部利夫（鳥根県教育文化財団嘱託）、有田 實（同嘱託）

調査員 埋蔵文化財調査センター調査第一係 宮澤明久（主幹）、北尾浩之（教諭兼主事）、山尾一郎（同教諭兼主事）、原田敏照（同主事）、勝瀬利栄（同主事）、田中強志（同臨時職員）、林 嘉彦（同臨時職員）

調査指導 勝部 衛（玉湯町立出雲玉作資料館副館長）

遺物整理 安達裕子、荒川あかね、菅井国江、高木由佳、多久和登紀子、上山根美和子、杉原あいこ、仲佐美鈴

4. 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、②中国建設弘済会、鳥根県教育委員会の三者協定に基づき、鳥根県教育委員会から②中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会鳥根支部 布村幹夫（現場事務所長）、木村昌義（技術員）、原 博明（技術員）、与倉明子（事務員）

5. 報告書作成は1995（平成7）年度に行った。本書に掲載した遺構・遺物の実測・浄書は調査員のほか、加藤住子、門脇卓子、米海順子、熊谷妙子、守屋かおるが行った。
6. 本書に掲載した表紙および巻頭カラー写真と遺物写真図版の一部は、奈良国立文化財研究所の牛島茂氏に撮影をお願いし写真を提供いただいた。他の遺物写真撮影は、錦田剛志（鳥根県埋蔵文化財調査センター主事）の協力を得て、勝瀬が行った。遺構写真は現地調査員が撮影を行った。
7. 本書に掲載した「周辺の遺跡図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用し、「遺跡位置図」は建設省松江国道工事事務所の作図を浄書した。
8. 挿図中の方位は国上座標法による第Ⅲ系の軸方位である。
9. 挿図の縮尺は図中に明示した。
10. 本書で使用した遺構略記号は次のとおりである。
SI—竪穴住居跡、SB—掘立柱建物跡、SD—溝、SK—土坑、SA—溝欄、SX—その他の遺構、P—ピット
11. 本書の執筆・編集は、指導・助言を元に、勝瀬が行った。

12. 所載遺跡の出土遺物及び実測図、写真等の資料は、島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	2
第3章 四ツ廻Ⅱ遺跡	5
第1節 調査の経過と概要	5
第2節 遺構について	10
第3節 遺物について	28
第4節 小 結	50
第4章 林廻り遺跡	57
第1節 調査の経過と概要	57
第2節 遺構について	61
第3節 遺物について	70
第4節 小 結	82
第5章 受馬遺跡	88
第1節 調査の経過と概要	88
第2節 遺構について	91
第3節 遺物について	95
第4節 ま と め	107

挿 図 目 次

第1図	調査地の位置	2
第2図	四ツ廻Ⅱ遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25000)	4
第3図	四ツ廻Ⅱ遺跡調査区上層図(1)(B-B'ライン)(1/80)	5
第4図	四ツ廻Ⅱ遺跡調査区位置図(1/2000)	6
第5図	四ツ廻Ⅱ遺跡調査区全体図(1/200)	7~8
第6図	四ツ廻Ⅱ遺跡調査区上層図(2)(A-A'ライン)(1/60)	9
第7図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01実測図(1/60)	11~12
第8図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01遺物出土状況(1/60)	13~14
第9図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB01実測図・遺物出土状況(1/60)	16
第10図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB02実測図(1/60)	17
第11図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB03・04実測図(1/80)	18
第12図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB03・04遺物出土状況(1/80)	19
第13図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB05実測図・遺物出土状況(1/60)	20
第14図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB06~10実測図(1/80)	21
第15図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB06~10遺物出土状況(1/80)	22
第16図	四ツ廻Ⅱ遺跡SD01実測図(1/60)	23
第17図	四ツ廻Ⅱ遺跡SD02実測図(1/60)	23
第18図	四ツ廻Ⅱ遺跡SK01~04・06・SX01実測図(1/40)	25
第19図	四ツ廻Ⅱ遺跡SK07・08実測図(1/40)	26
第20図	四ツ廻Ⅱ遺跡SK05実測図(1/20)・出土遺物実測図(1/4)	27
第21図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01出土遺物実測図(1)(1/3)	29
第22図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01出土遺物実測図(2)(1/3)	30
第23図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01出土遺物実測図(3)(1/3)	31
第24図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01出土遺物実測図(4)(1/3)	33
第25図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01出土遺物実測図(5)(2/3)	34
第26図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01出土遺物実測図(6)(1/3)	35
第27図	四ツ廻Ⅱ遺跡SI01出土遺物実測図(7)(1/3)	36
第28図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB01出土遺物実測図(2/3)	37
第29図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB02出土遺物実測図(1/3)	38
第30図	四ツ廻Ⅱ遺跡SB05出土遺物実測図(1/3)	39
第31図	四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りA出土遺物実測図(1)(1/3)	41
第32図	四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りA出土遺物実測図(2)(1/3)	42
第33図	四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りA出土遺物実測図(3)(1/3)	43
第34図	四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りB出土遺物実測図(1/3)	44

第35図	四ツ廻Ⅱ遺跡上器溜りC出土遺物実測図(1)(1/3)	45
第36図	四ツ廻Ⅱ遺跡上器溜りC出土遺物実測図(2)(1/4)	46
第37図	四ツ廻Ⅱ遺跡SD01出土遺物実測図(1/3)	47
第38図	四ツ廻Ⅱ遺跡その他の包含層出土遺物実測図(1)(1/3)	47
第39図	四ツ廻Ⅱ遺跡その他の包含層出土遺物実測図(2)(1/3)	48
第40図	四ツ廻Ⅱ遺跡その他の包含層出土遺物実測図(3)(1/3, 2/3)	49
第41図	出雲地方の玉作遺跡分布図	51
第42図	林廻り遺跡調査区位置図(1/2000)	57
第43図	林廻り遺跡調査区上層図(1/80)	58
第44図	林廻り遺跡調査区全体図(1/200)	59~60
第45図	林廻り遺跡SB01遺物出土状況(1/80)	62
第46図	林廻り遺跡SB01実測図(1/60)	63~64
第47図	林廻り遺跡SB02実測図・遺物出土状況(1/60)	65
第48図	林廻り遺跡SB03実測図(1/60)	66
第49図	林廻り遺跡SD02実測図(1/60)	68
第50図	林廻り遺跡SK01・02・SD03実測図(1/60)	68
第51図	林廻り遺跡SD01実測図(1/80)	69
第52図	林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(1)(1/3)	72
第53図	林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(2)(1/3)	73
第54図	林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(3)(1/3)	74
第55図	林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(4)(1/3)	75
第56図	林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(5)(1/3)	76
第57図	林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(6)(1/3)	78
第58図	林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(7)(1/3)	79
第59図	林廻り遺跡SB02出土遺物実測図(1/3)	80
第60図	林廻り遺跡出土鉄製品・勾玉実測図(1/2)	81
第61図	受馬遺跡調査区位置図(1/2000)	88
第62図	受馬遺跡調査区上層図(1/80)	89
第63図	受馬遺跡調査区全体図(1/200)	90
第64図	受馬遺跡上層遺構面SX03付近土層堆積状況(1/80)	91
第65図	受馬遺跡S A01・SX01・02実測図(1/60)	92
第66図	受馬遺跡SK01~03実測図(1/40)	93
第67図	受馬遺跡SD01実測図(1/60)	93
第68図	受馬遺跡出土石器実測図(1/2)	95

第69図	受馬遺跡上層遺構面土器群出土上器遺物図 (1/3)	96
第70図	受馬遺跡黒褐色土層出土遺物実測図 (1) (1/3)	97
第71図	受馬遺跡黒褐色層出土遺物実測図 (2) (1/3)	98
第72図	受馬遺跡黒褐色層出土遺物実測図 (3) (1/3)	100
第73図	受馬遺跡黒褐色層出土遺物実測図 (4) (1/3)	101
第74図	受馬遺跡黒褐色層出土遺物実測図 (5) (1/3)	102
第75図	受馬遺跡その他の包含層出土遺物実測図 (2) (1/3)	102
第76図	受馬遺跡その他の包含層出土遺物実測図 (1) (1/3)	103
第77図	受馬遺跡出土中近世土師器法量比	104
第78図	受馬遺跡出土古銭拓影 (1) (1/2)	105
第79図	受馬遺跡出土古銭拓影 (2) (1/2)	106

図 版 目 次

(巻頭カラー)

- P L 1 四ツ廻Ⅱ遺跡出土玉関係遺物
- P L 2 四ツ廻Ⅱ遺跡出土煮沸具(移動式かまど、甌、土製支脚)
(巻末白黒)
- P L 3 四ツ廻Ⅱ遺跡調査後近景(空中撮影)
四ツ廻Ⅱ遺跡調査後(空中撮影)
- P L 4 四ツ廻Ⅱ遺跡SI01完掘状況(1)
四ツ廻Ⅱ遺跡SI01完掘状況(2)
- P L 5 四ツ廻Ⅱ遺跡SI01土器出土状況(1)
四ツ廻Ⅱ遺跡SI01土器出土状況(2)
- P L 6 四ツ廻Ⅱ遺跡SI01ピット内土器出土状況(1)
四ツ廻Ⅱ遺跡SI01ピット内土器出土状況(2)
- P L 7 四ツ廻Ⅱ遺跡SI01土器出土状況(3)
四ツ廻Ⅱ遺跡SI01土器出土状況(4)
四ツ廻Ⅱ遺跡SI01外側加工段土器溜り出土状況
- P L 8 四ツ廻Ⅱ遺跡SB01完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SB01遺物出土状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SB02遺物出土状況
- P L 9 四ツ廻Ⅱ遺跡SB03~SB10完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SB03完掘状況
- P L 10 四ツ廻Ⅱ遺跡SB05完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SB05土器出土状況(1)
四ツ廻Ⅱ遺跡SB05土器出土状況(2)
- P L 11 四ツ廻Ⅱ遺跡SB06~SB10完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SB06完掘状況
- P L 12 四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りA土器出土状況
四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りB土器出土状況
- P L 13 四ツ廻Ⅱ遺跡SK05土器出土状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SK05完掘状況
- P L 14 四ツ廻Ⅱ遺跡SK01完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SK02完掘状況
- P L 15 四ツ廻Ⅱ遺跡SK04完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SX01完掘状況

- P L 16 四ツ廻Ⅱ遺跡SK07完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SK08完掘状況
- P L 17 四ツ廻Ⅱ遺跡SD01完掘状況
四ツ廻Ⅱ遺跡SD02完掘状況
- P L 18～28 四ツ廻Ⅱ遺跡出土遺物
- P L 29 林廻り遺跡調査前近景
林廻り遺跡調査後近景
- P L 30 林廻り遺跡SB01完掘状況
林廻り遺跡SB01土器出土状況
- P L 31 林廻り遺跡SB01土層観察
林廻り遺跡SB01土器出土状況
林廻り遺跡SB01鉄鏝出土状況
- P L 32 林廻り遺跡SB02
林廻り遺跡SB02土器出土状況
- P L 33 林廻り遺跡SB03完掘状況
林廻り遺跡SB04土層観察
- P L 34 林廻り遺跡SD02完掘状況
林廻り遺跡SK01
- P L 35～40 林廻り遺跡出土遺物
- P L 41 受馬遺跡遠景
受馬遺跡調査前近景
- P L 42 受馬遺跡完掘状況
受馬遺跡SX01完掘状況
- P L 43 受馬遺跡SK01・02・03完掘状況
受馬遺跡SD01完掘状況
- P L 44 受馬遺跡SA01完掘状況
受馬遺跡SX02
受馬遺跡土器群1出土状況
- P L 44 受馬遺跡土器出土状況
受馬遺跡SX01土層
受馬遺跡A-A'ライン土層
- P L 45～53 受馬遺跡出土遺物

第1章 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けで、建設省松江国道工事事務所から県教育委員会あてに、国道9号線バイパス建設の基本設計資料作成のため、安来市吉佐町から松江市乃白町に至る30.3km区間における埋蔵文化財の有無についての照会があった。

これを受けて県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て昭和47年・48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果をふまえ、建設省からのルート案提示・遺跡の取扱い協議を経て、昭和50年7月には発掘調査の契約を取り交わし、同年には松江市オノ峠遺跡、同平所遺跡、安来市大坪古墳群、翌51年度には平所遺跡、東出雲町布敷遺跡の発掘調査を実施した。平所遺跡では、埴輪窯跡から馬、鹿、家、人物などの形象埴輪が出土し、昭和52年6月には国の重要文化財に指定された。

昭和55・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき国体」の主要幹線道路となる「松江東バイパス」の開通を急ぎ、東出雲町出雲郷から松江市吉志原町に至る5.4km間の7遺跡（春日遺跡・夫敷遺跡・布田遺跡・中竹屋遺跡・オノ峠遺跡・勝負遺跡・石台遺跡）の2車線分を緊急に調査した。

その後、「松江バイパス」は高規格道路に設計変更され、「松江道路」となり、前回調査した7遺跡の残り4車線分を、昭和61年度から平成3年度まで順次調査を実施した。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る「安来バイパス」が事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に設計変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷～安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で予定ルートにも変更が生じたため、昭和62・63年度に再度分布調査を実施した。

「安来道路」の発掘調査は、平成元年度より平成4年度まで安来市西赤江町から同島田町に至る6.9kmの区間で7遺跡（宮内遺跡・大原遺跡・白コクリ遺跡・岩屋口遺跡・オノ神遺跡・島田南遺跡）の調査を実施し、平成4年度からは安来市荒島町～東出雲町出雲郷を「安来道路西地区」として、さらに安来市島田町～吉佐町を「安来道路東地区」として実施中である。

第2章 位置と環境

鳥根県八東郡東出雲町は、鳥根県の東部に位置し、西は県庁所在地である松江市と、東は安来市に接する。北は中海に面して平野を形成し、南は標高473.0mの京羅木山をはじめとする山地を境に、能義郡広瀬町と接している。中海沿岸に広がる平野は、江戸時代と昭和30年代以降に行われた干拓事業により埋め立てられており、干拓地の大部分は農地として利用されている。平野には国道9号線やJR山陰線が東西に貫いており、この周辺に市街地が形成されている。こうした地の利を活かし、農業以外にも各種の産業が発達している。

町内の遺跡は、平野部やこれに面した低丘陵上に多く確認されており、縄文時代以来、海と山の双方の恩恵を受けた人々の豊かな活動の跡がうかがえる。

縄文時代の遺跡では、町の西方を流れる意字川の両岸に広がる意字平野の縁辺や中海に面した平野から低丘陵上において土器片を出土する遺跡が数例確認されている（鶴貫遺跡・竹の花遺跡・春日遺跡・大木権現山古墳群）。これらの遺跡では明瞭な遺構は確認されていないものの、生活が営まれていたことが想定できる。

弥生時代前・中期には、平野を中心に水田耕作が行われていたようで、意字平野の布田遺跡では、水田跡が発掘調査により明らかにされている。また意字平野内には、前述の布田遺跡の他に、春日遺跡、布敷遺跡、分銅形土製品が出土した鶴貫遺跡といった多量に弥生土器を出土する遺跡が点在しており、集落が形成されていたことが考えられる。意字平野から離れた中海沿岸部でも、磯近遺跡や寺床遺跡では中期の土器や前・中期の竪穴住居跡が確認されており、平野部と同様、活動の舞台であったと思われる。こうした弥生時代の遺跡からは、しばしば土鍾が出土することから、水田耕作のみではなく眼前に広がる中海で漁労も行われる豊かな生産活動の一端がうかがえる。なおこれらの遺跡からは弥生時代後期の遺物が減少する傾向にあり、こうした時期に集落立地に変化があった可能性がある。

墳墓では、弥生時代後期後半に出雲地方で首長墓として特異に発達する四隅突出形と呼ばれる特異な形態の墳墓が採用され造られるが、東出雲町においても、大木権現山1号墳がこの形態の最終段階の墳墓である可能性が高い。また古墳時代前期前半に位置付けられている東出雲町寺床1号墳と安来市塩津山1号墳との主体部に共通性が認められ、古墳時代前期には出雲最大規模の前期古墳群を形成していた安来平野西端の首長勢力と何らかの関係があったことが考えられる。

これらを含め、古墳時代には丘陵上・丘陵斜面に多数の古墳が造られる。前期古墳には、寺床1号墳、船載の内行花紋鏡が出土した古城山古墳群が、中期古墳には岩



第1図 調査地の位置

をくりぬいて造った舟形石棺の残る春日岩船古墳や形象埴輪・円筒埴輪等が出土した大木権現山2号墳といった墳丘規模の小さい古墳が点在している。古墳時代後期になると古墳数はより数を増し、特に横穴墓は、数基から規模なものでは30基を越えて群を成すものが、平野に面した斜面において確認されている。また栗坪古墳群では石棺式石室が確認されている。古墳時代後期以降、西に接する意字平野は、出雲を代表する巨大古墳が次々と造られ、後の奈良～平安時代には国庁が置かれ、出雲の中心地として発展する地域である。東出雲町内の後期古墳の動向も、意字平野と深い関係が考えられよう。

古墳時代以降の集落の動向については、古墳時代前期と後期の住居跡が四ツ廻遺跡で、焼田遺跡では古墳時代後期から奈良時代の土製支脚などの土器が出土したといった報告がある。その他中海沿岸部から南へ離れた丘陵地においても土器が採集されている。今回調査を行った四ツ廻遺跡・林廻り遺跡でも、古墳時代以降の住居跡が確認されており、今後こうした資料の増加が予想される。

中世には、北端の標高400mを越える京羅木山頂には毛利氏が山城が築き、山頂から南方に望む広瀬町富田城に対した尼子氏と出雲国の覇権を巡る攻防の舞台となる。この他にも春日城跡、古城山城跡、福良城跡といった城跡が残されている。

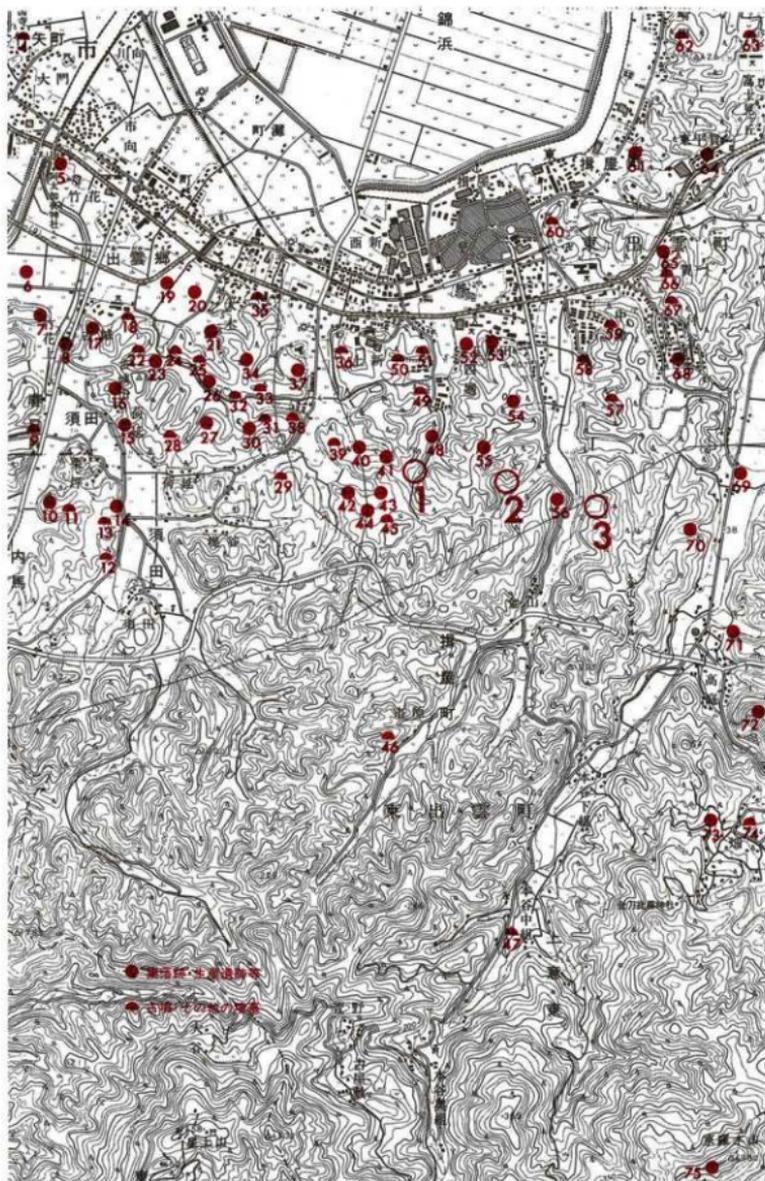
発掘調査では明らかにされていないが、国庁へ向かう幹線道である古代山陰道が町内を東西に貫いていたと推定されており、古代以来交通の要衝であったことがうかがえる。

参考文献

- 東森市良 『八東郡東出雲町磯近弥生遺跡』『季刊文化財』11 1970
 東出雲町 『東出雲町誌』1978
 東出雲町教育委員会 『大木権現山古墳群』1979
 東出雲町教育委員会 『春日遺跡』1981
 東出雲町教育委員会 『大敷遺跡』1982
 東出雲町教育委員会 『寺庄遺跡調査概報』1983
 東出雲町教育委員会 『東出雲町の遺跡』1988
 東出雲町教育委員会 『磯近遺跡』1989
 東出雲町土地開発公社・同教育委員会 『(仮)四ツ廻住宅団地造成事業予定地内埋蔵文化財発掘調査概報 一四ツ廻遺跡』1994
 建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会 『(仮)高第9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区I』1993
 建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会 『中山遺跡・巻林遺跡』1994

第1表 周辺の遺跡一覧表 (番号は第2図に対応)

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	四ツ廻遺跡	20	駒貝遺跡	39	赤山南古墳群	58	高平横穴群
2	林廻り遺跡	21	岸尾遺跡	40	赤山南遺跡	59	中津橋穴群
3	受馬遺跡	22	古城山古墳群	41	原ノ前遺跡	60	栢原神社古墳
4	安国寺古墳群	23	古城山遺跡	42	赤山南C遺跡	61	駒田遺跡
5	阿太加夜神社境内遺跡	24	後谷古墳	43	赤山南B遺跡	62	藤谷古墳
6	春日遺跡	25	後谷横穴群	44	赤山南A遺跡	63	横田上の古墳
7	鳥籠古墳	26	山田尾遺跡	45	赤山南南古墳群	64	神子谷遺跡
8	竹ノ花上遺跡	27	後谷空跡	46	時子谷古墳	65	平塚遺跡
9	以上古墳	28	向城古墳群	47	木谷跡塚	66	谷水古墳
10	城山城跡	29	安坪古墳群	48	四ツ廻遺跡	67	廣泉谷古墳
11	内馬橋横穴群	30	大畑遺跡	49	ヤシ山横穴群	68	所谷遺跡
12	戸田巨敷横穴群	31	長崎横穴群	50	四ツ廻横穴群	69	曾木遺跡
13	才ノ峠古墳	32	後谷池東横穴群	51	原石原横穴群	70	毛塚遺跡
14	安坪遺跡	33	鳥田横穴群	52	東出雲中学校校庭遺跡	71	古塚遺跡
15	須田神社境内遺跡	34	鳥田遺跡	53	東出雲中学校校庭遺跡	72	福良城跡
16	赤坂遺跡	35	大木権現山古墳群	54	五反田遺跡	73	野呂城跡
17	古城山城跡	36	後谷古墳群	55	大鳥才ノ峠遺跡	74	横谷古墳
18	古城山横穴群	37	寺庄遺跡	56	勝兵遺跡	75	京羅木山城跡
19	鹿比須遺跡	38	長瀬古墳	57	五反田1号墳		



第2図 四ツ廻II遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

第3章 四ツ廻Ⅱ遺跡

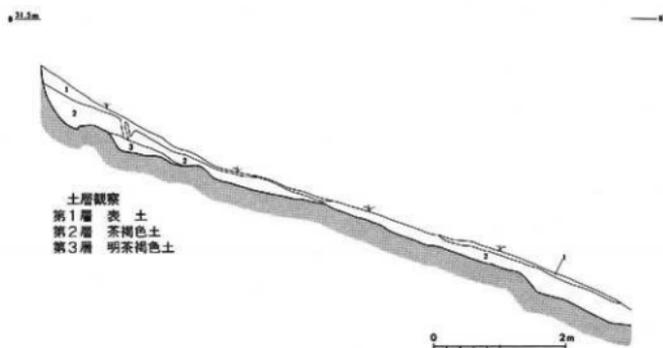
第1節 調査の経過と概要

四ツ廻Ⅱ遺跡は、島根県八束郡東出雲町揖屋字四ツ廻に所在する。

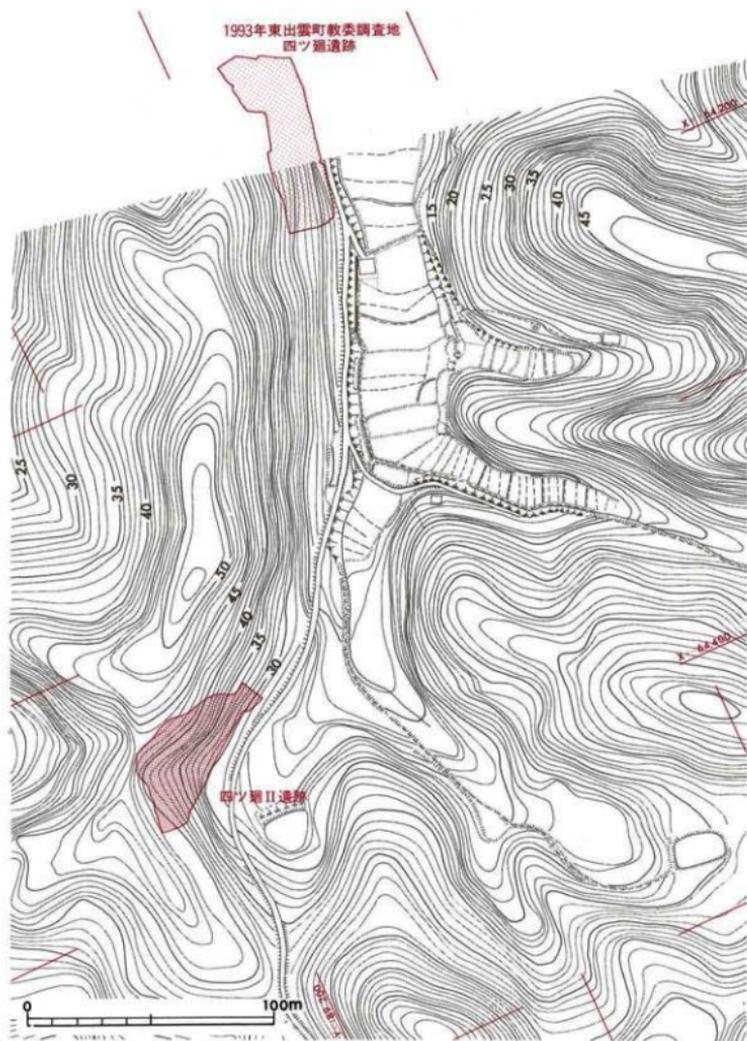
遺跡は、現在の中海岸より約1km南へ入り込んだ低丘陵地にある。南北に細長く延びる丘陵の東側斜面に立地し、中海岸に広く開けた平野から隔たった谷を入り込んだ場所である。眼前には隣接する丘陵が真近に迫っている。調査地の標高は約29～40mの斜面で、かなり急な斜面である。周辺には、同一斜面の約200m北側で、また尾根を越えた西側の斜面では発掘調査により主に古墳時代から平安時代の遺跡が発見されている。

発掘調査は、平成4年度に実施した試掘調査の結果をもとに調査区を設定し、平成5年4月5日重機による表土掘削から開始し、8月4日まで実施した。この間には例年以上に雨天の多かった梅雨空の合間をぬい、現地説明会を開催し、町内外より多くの見学者が訪れた。

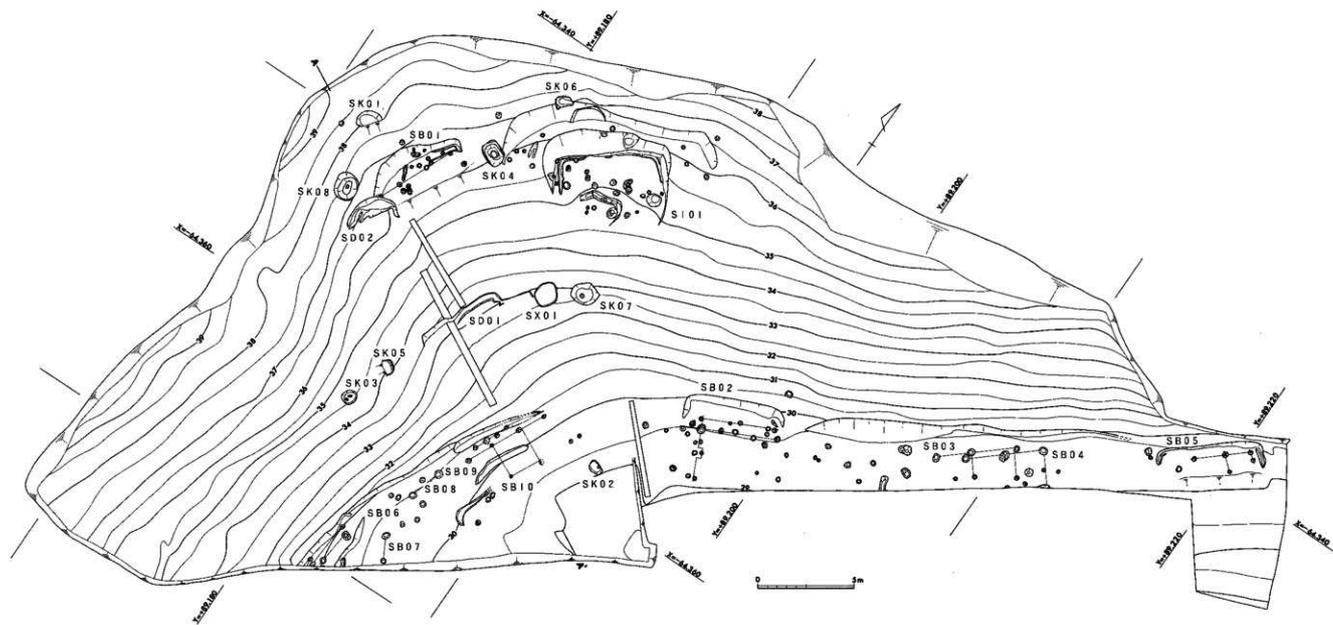
検出した主な遺構には、碧玉やめのこの未製品や砥石が出土し玉作工房跡である古墳時代の竪穴住居跡(SI01)や、掘立柱建物跡(SB01～10)、これらに関連する柱穴などの古墳時代の生活の跡がある。他にも土器を埋納した土壌(SK05)、落とし穴状土壌2基、用途不明土壌や溝状遺構を検出した。



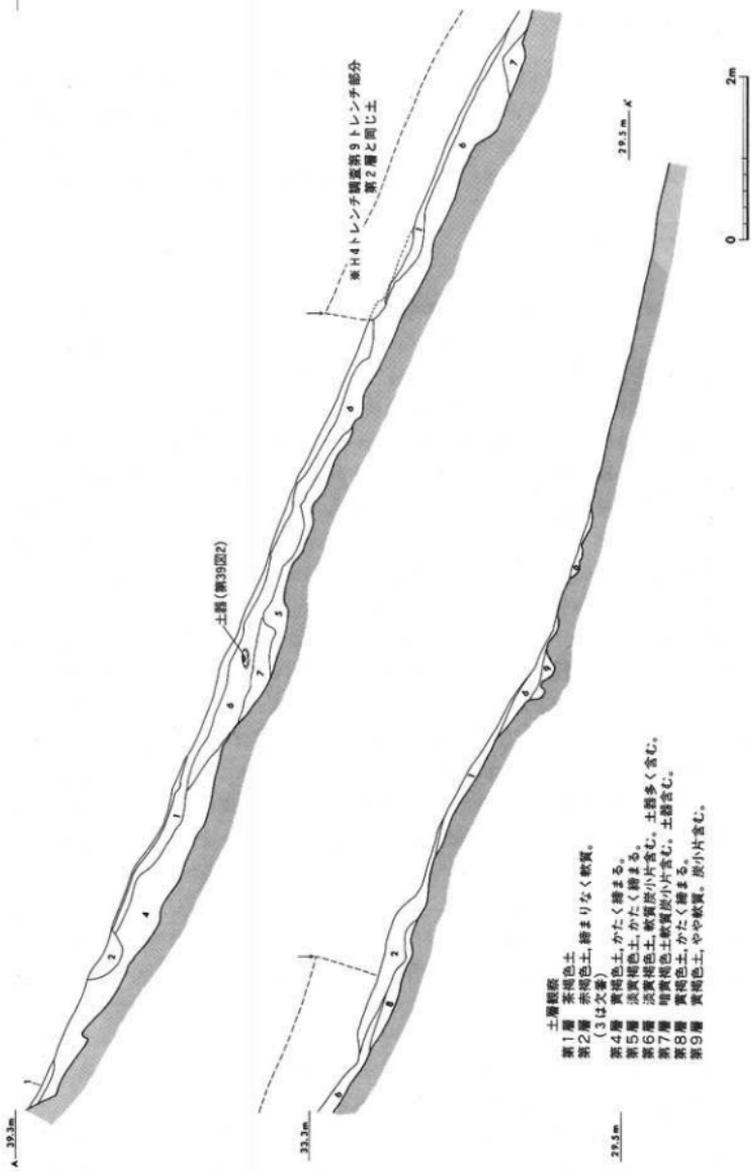
第3図 四ツ廻Ⅱ遺跡調査区土層図(1)(B-B'ライン) (1/80)



第4図 四ツ廻II遺跡調査区位置図(1/2000)



第5図 四ツ廻II遺跡調査区全体図 (1/200)



- 土層観察
- 第1層 赤褐色土、粘りなく軟質。
 - 第2層 赤褐色土、粘りなく軟質。
 - (3は欠番)
 - 第4層 黄褐色土、かたく締まる。
 - 第5層 淡黄褐色土、かたく締まる。
 - 第6層 淡黄褐色土、軟質、炭小片含む。土器多く含む。
 - 第7層 暗黄褐色土、軟質、炭小片含む。土器含む。
 - 第8層 黄褐色土、かたく締まる。
 - 第9層 黄褐色土、やや軟質。炭小片含む。

第6図 四ツ廻II遺跡調査区土層図(2)(A-A'ライン) (1/60)

第2節 遺構について

調査区は、狭い谷に面した丘陵東側斜面であり、かなり急な斜面である。検出した遺構は、堅穴住居跡1棟(SI01)、掘立柱建物跡10棟(SB01~10)、溝状遺構2(SD01~02)、土壇8基(SK01~08)などがある。また、掘立柱建物跡は急な斜面を掘り込んで作った平坦面に作られており、こうした平坦面はSB01のある標高37m付近と、SB02~10のある標高30m付近の大きく2カ所で検出している。

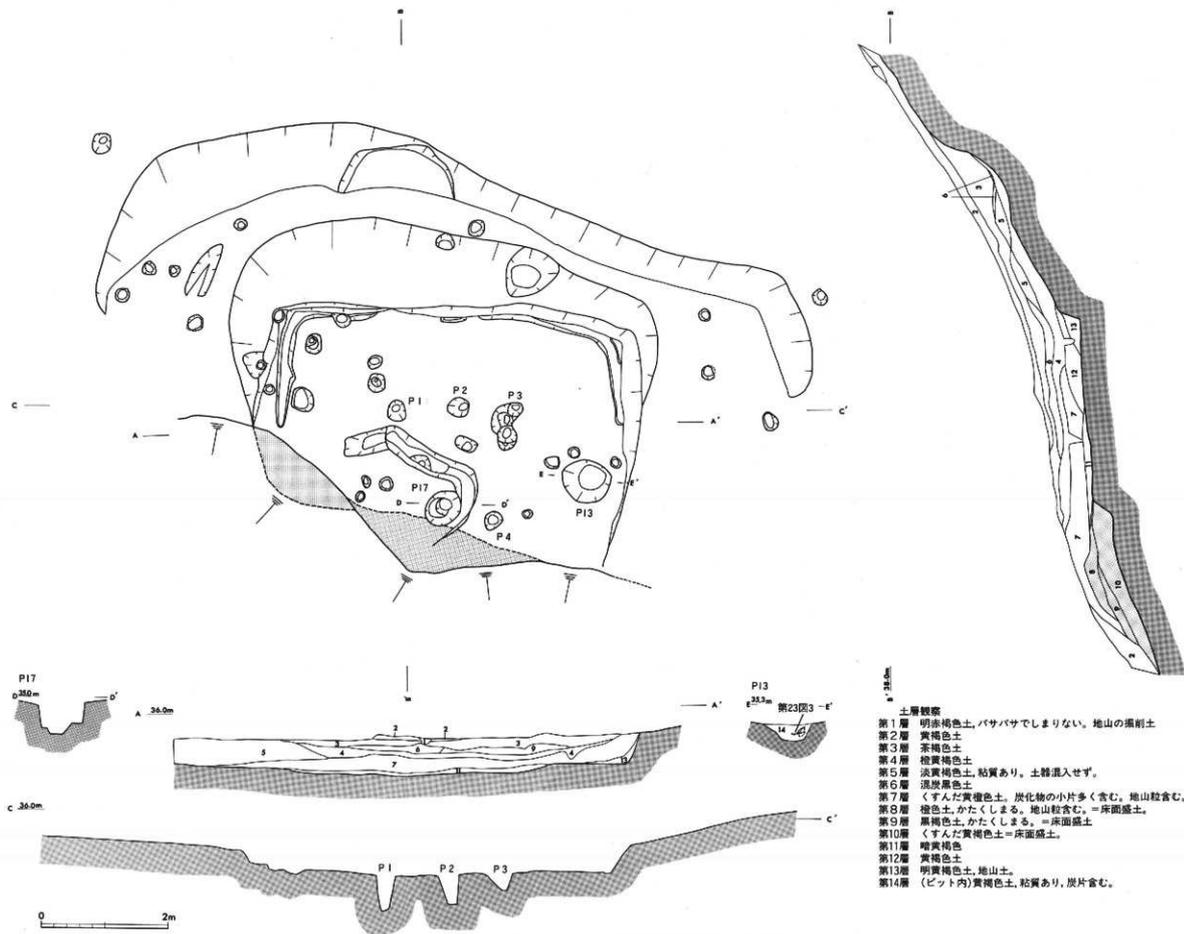
以下、それぞれについて述べる。

SI01(第7図,第8図) 南北に延びた標高約40mの丘陵頂部から、東側斜面へと下がった標高35mの位置にあり、頂部から東側斜面への変換点付近で検出した堅穴住居跡である。急傾斜地を掘り込み、水平な床面を削り出している。床面は一部盛土によって谷側へ拡張されており、盛土層と、堅く締まった貼り床面が検出された。規模は、床面は現存5.2m×4.0m、壁の立ち上りは最大で0.4mである。床面の中央付近には、直径約30cm深さ20~50cmの柱穴(P1~4)を検出した。床面にはこれとは異なる直径10~30cm深さ20cm以下の浅いピットが多数検出されているが、これらは深さがP1~4と大きく異なり性格を異にするものであると思われる。また壁際に寄った位置では、直径20cm深さ25~30cmの楕円状のピット(P13, P17)が2カ所確認されている。溝は、壁際を巡る幅20cm深さ10cmの浅い溝が確認できたが、部分的に深さが異なり、一部で途切れている。他にP1~4の間を縫うように蛇行した性格不明の溝状遺構を検出している。

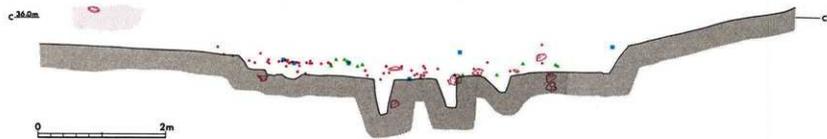
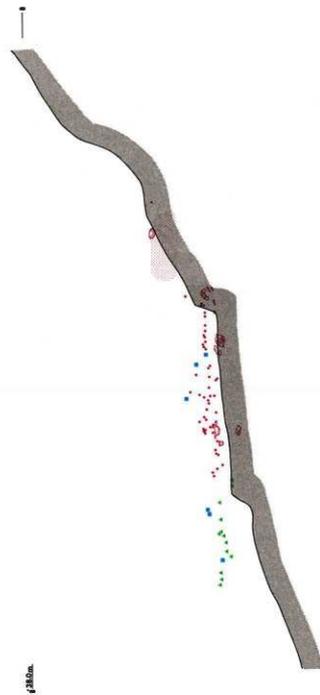
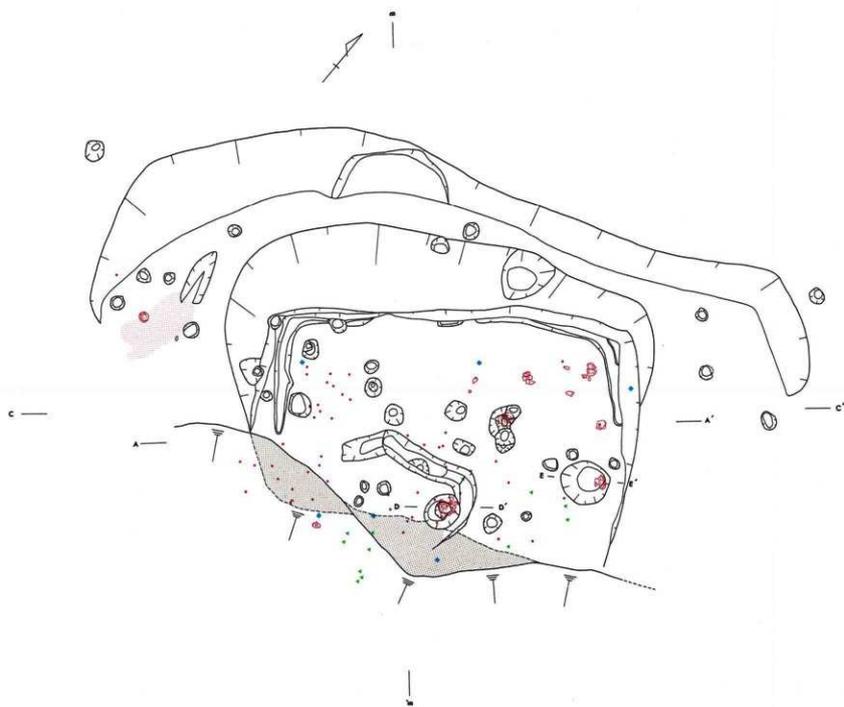
遺物は床面に貼り付いた状態や、ピット内部に落ちこんだ状態で土器が出土した他、玉作に関連する遺物が出土していることから、この堅穴住居跡は玉作工房跡であると考えられる。玉作関連の遺物は、碧玉・めのうの剥片、玉砥石などが見られる。

また、SI01の周囲を囲むように、緩やかな弧状を呈して平坦面が掘り込まれているが、SI01と同様に谷側は不明である。平坦面の規模は、現存では長軸11m短軸0.5mである。この平坦面とSI01との関係については、土層の観察から、SI01の埋土上面を覆っている橙黄褐色土層(第4層)が平坦面直上に堆積しており、SI01が茶褐色土層(第3層)の流入により埋没した後、平坦面が作られたのと考えられる。平坦面上には直径20cm深さ10cmのピットが9個見られ、何らかの施設が存在していたものと思われる。

SI01と平坦面に関連しては、流れ込みと見られる数点の土器片を除いて、古墳時代前期後半から中期の土器群と、古墳時代中期末~後期の土器群の二時期のものが認められる。SI01の床面に貼り付いて出土した遺物には、両者がほぼ同様な状態でそれぞれに出土している。また玉類の製作に関連があると思われるP13・P17からは、古墳時代前期後半~中期の土器器斐や高坏が出土している。SI01の床面上に堆積した茶褐色土層中からは、古墳時代前期後半~中期の土器と、同中期末~後期の土器と共に玉作関連の剥片・砥石・有孔円盤などの玉作り関係・祭祀関連遺物が出土している。上面の平坦面上からは、平坦面を検出した面より約10cm浮いた位置で土器溜りがあり、これらの土器は古墳時代中期末~後期の年代が考えられる。このような遺物の出土状況より、平坦面の時期は古墳時代後期と考えられ、SI01については古墳時代前期後半から中期に玉作工房として使用され、その後一定期間使用



第7図 四ツ廻II遺跡S101実測図 (1/ 60)



(朱…土器、青…磁石、緑…玉未製品)

第8図 四ツ廻II遺跡S101遺物出土状況 (1/60)

が廃絶された後に再度古墳時代後期ごろに何らかの形で使用されたものと思われる。平坦面の時期の玉作りについては、土器瀝り中から玉作遺物が出土していることもあり考えられるが、磁石の出土が無く、不明である。

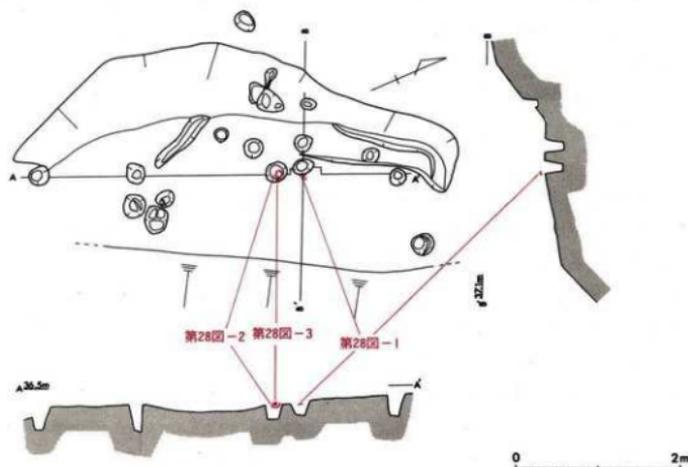
SB01（第9図） 前述のSI01を取り囲むように掘られた平坦面の西側に接して位置し、ほぼ同じ標高に作られた建物跡である。SI01と同様に、かなり急な斜面を掘り込んで作られたためか、平坦面の遺存状況は非常に悪く、谷側のほとんどが流失し不明であった。検出した遺構は、緩い弧状を呈する平坦面の掘り込みと、壁際に比較的近い位置の柱穴・浅い溝を確認したのみで、建物跡の構造については不明である。しかし、壁際に並ぶ柱穴や掘り込みの形態から、掘立柱建物が想定できる。現存する平坦面は、長軸のおよそ4.8mが確認できる。西端部分はSD02によって切られているものの、SI01上面にある平坦面の規模よりの1/2以下という小規模なものである。柱穴は、直径約20cm深さ20～30cmのものを14個確認している。柱間は一定せず、位置も重複しているものも見られ、建物は1度以上の建て替えが行われたと思われる。

遺物は、柱穴を検出した面で、須恵器坏身1点（第28図1）、ほぼ完形の土師器小型の壺形土器を1点（第28図2）と共に、めのうの勾玉未製品1点（第28図3）が出土している。この他に、埋土中には、須恵器・土師器小片が多数出土している。これら土器の時期は、概ね古墳時代ころと思われ、建物跡の時期もこのころのものであると見られる。埋土中からは、少量の碧玉・めのうの割片が出土しているが、SI01の床面や直上土層等と比べて非常に少なく、ごく少量である。その他の玉作に関する磁石などの遺物は出土していない。

SB02（第10図） SI01・SB01の位置から約6m下方、標高約30mのコンターラインに沿うように、斜面が掘り込まれ、緩やかなカーブを描いて細長い規模の大きな平坦面が作り出されている。平坦面の南側は、後世道路等によって削平されているが、調査区南西端では遺構が調査区外へ広がっており、山林である現状の表面観察からも平坦面が確認できる。この平坦面では、多数の柱穴が確認でき、少なくとも9棟以上の掘立柱建物跡（SB02～09）があったことが確認できた。建物跡の方向は概ね平坦面の弧の方向に沿った方向であり、方位の規格性は見られず、自然地形を利用して作られた平坦面に沿って建物の方向が決定されたと思われる。

SB02は平坦面の中央寄りで検出している。地山を大きく掘り込んだ斜面側では、建物を区画したと見られるコの字状の掘り込みが確認できた。建物の規模は、長軸が長さ5.2mであり、コンターラインに沿った自然地形を活かして作られている。柱穴は地山面に掘り込まれた直径20～40cm、深さ20～45cmのものを検出しており、全体に直径が小さく深さが深い傾向にある。地山面は谷側に向かって若干傾斜しており、谷側の一部で柱穴が検出されていないことより、柱穴の配置を完全に復元することはできなかった。柱穴配置は、コの字状の溝の方向と同じ方向にA-A'、B-B'の2列、これと直交する方向にC-C'という並びが考えられる。柱間は不揃いであり、切り合っていることもあるが、柱穴の深さや規模から、桁行き・梁行きとも2～3間程度の掘立柱建物跡であると考えられる。柱穴の他に明瞭な遺構は見られず、焼土も確認されていない。

遺物は、遺構検出面である地山上に貼り付いた状態では出土しておらず、この上に堆積した黒色土層中と柱穴の埋土中より須恵器・土師器の小片が出土している。しかしこれらはいずれも小片であり、かなり浮いた状態のものもあり、遺存状況は悪い。遺物の時期は、古墳時代後期後半に属するもので



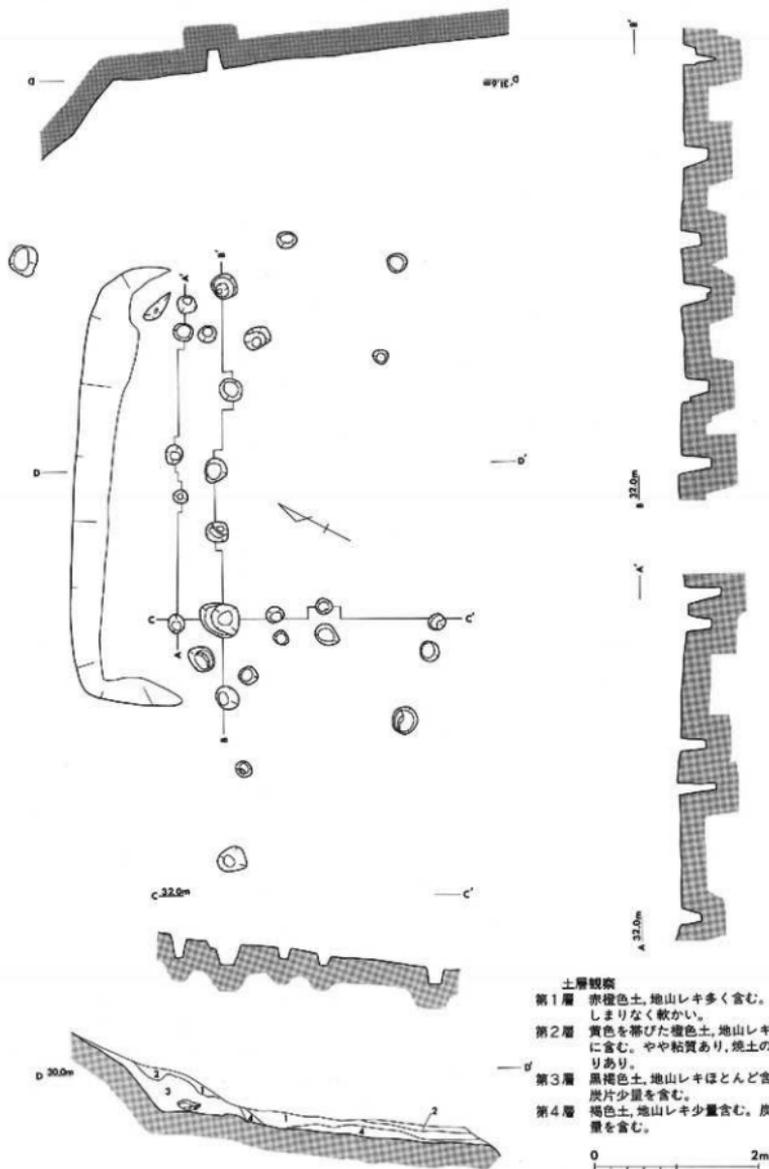
第9図 四ツ通II遺跡SB01実測図・遺物出土状況 (1/60)

ある。

SB03・04 (第11図) SB02の東側、標高30m付近に広がる平坦面上に位置している。SB02において見られた溝によるコの字状の区画は認められず、柱穴の規模も直径40cm深さ40cmとやや大きいものである。SB03と04は柱穴の規模・方向・柱間などがほぼ共通し、重なり合うことより、建て替えによるものと考えられる。SB02と同様に柱配置は部分的にのみしか明らかにできなかった。確認できた部分では、柱間は約1.8~2.1mである。SB02とこれらSB03・04の間には直径20cm以下深さ30~40cmの小型の柱穴が多数認められ、これらの他にも建物跡が存在する可能性が高い。対照的にSB03・04の西側、SB05との間には、柱穴や溝が全く確認されておらず、平坦面が空地として存在する部分が見られる。このような空地はこの平坦面上ではSB02とSB09の間にも見られる。

遺物は、SB03・04の上面に土器溜りA・土器溜りBを検出している。これは地山直上に約2.8~3.4m×1.0~1.5mの範囲に土器が集中していたもので、坏身・坏蓋・高坏・平瓶・短径壺といった須恵器と、土器器瓶・甕・土製支脚・壺といったものが出土している。土器溜りAには焼土面や人頭大の焼石が含まれていたことより、炉跡である可能性が大きい。SB02と03・04の間では、土器溜り状に集中していないものの、須恵器・土器器といった土器片が多く出土している。対してSB03・04の西側の空地ではほとんど遺物は認められない。これらの土器は流入によると見られるものを除き、古墳時代後期後半のものである。

SB05 (第13図) SB03・04の東側に位置する。長軸5.2mのコの字状の掘り込みと、柱穴を9個検出した。コの字状の掘り込みの壁際には、幅20cm深さ10cmの浅い溝が部分的に2か所で認められた。柱穴はコの字状に区画された平坦面の内側と、区画外でも2個見られるが、他の掘立柱建物跡に比べ

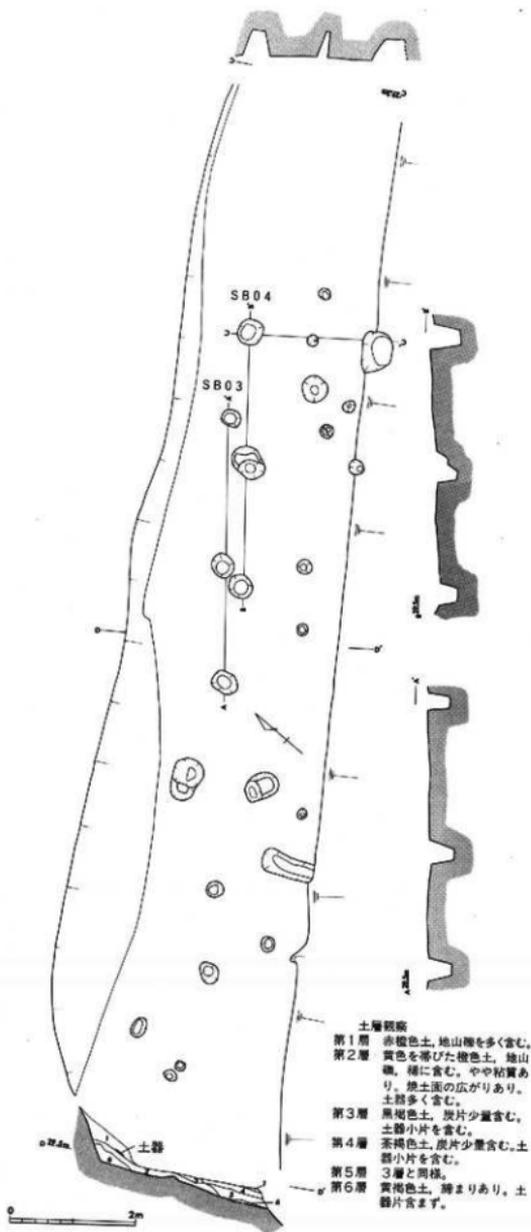


第10図 四ツ廻II遺跡SB02実測図(1/60)

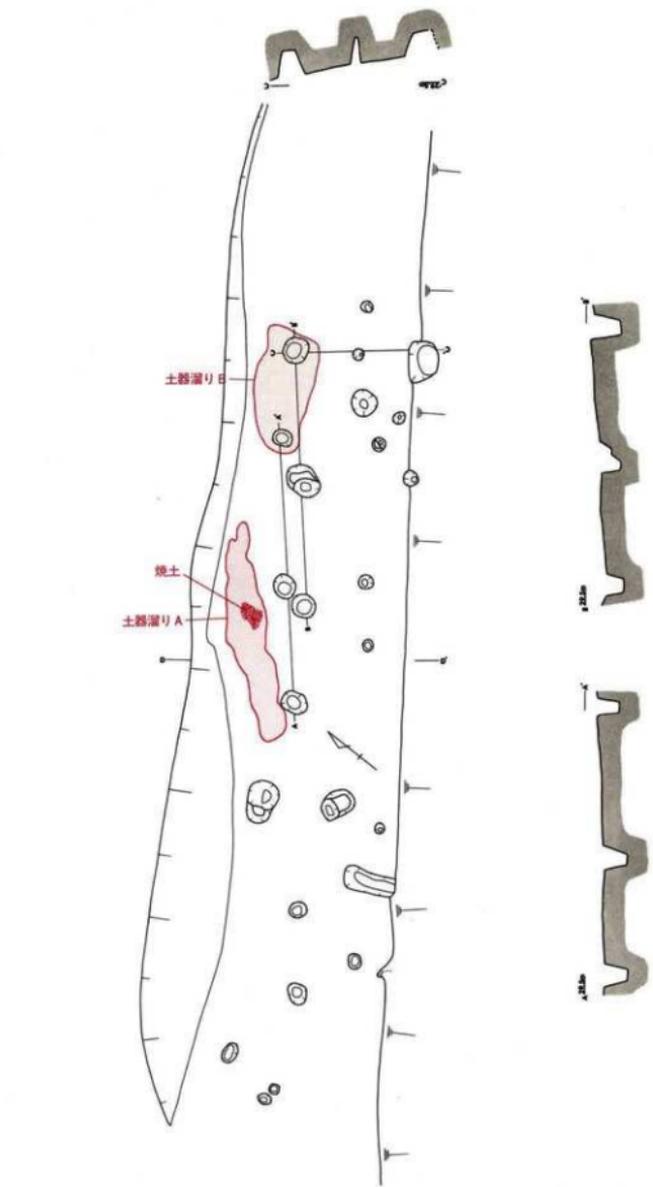
土層観察

- 第1層 赤褐色土、地山レキ多く含む。しまりなく軟かい。
- 第2層 黄色を帯びた褐色土、地山レキまれに含む。やや粘質あり、焼土の広がりあり。
- 第3層 黒褐色土、地山レキほとんど含まず。炭片少量を含む。
- 第4層 褐色土、地山レキ少量含む。炭片少量を含む。

0 2m



第11図 四ツ廻II遺跡SB03・04 実測図 (1/80)



第12図 四ツ廻II遺跡SB03・04 遺物出土状況 (1/80)

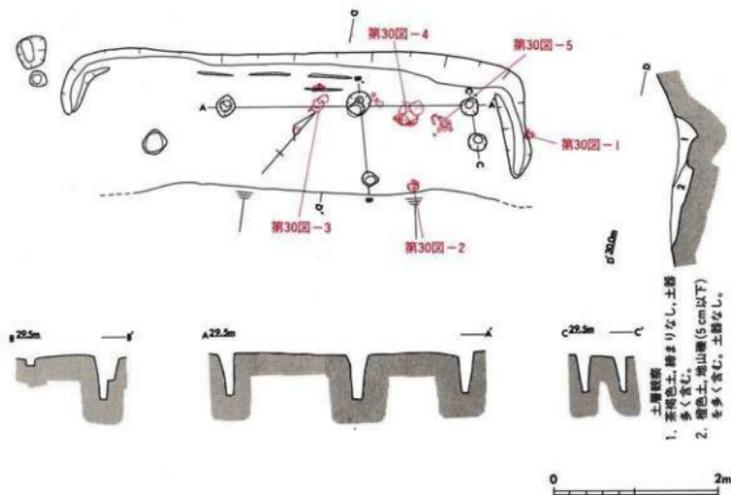
て柱穴が少なく、切り合っているものも無く、建物跡が重複しておらず、比較的良好な検出状況である。想定される建物跡は、コの字状の掘り込みと平行に作られた掘立柱建物跡である。谷側の構造は不明であるが、柱間が2間程度のものでコの字の区画の東側に寄って作られている。柱間は約1.6～1.8mで、柱穴の直径20～30cm深さ50cmと細く深い傾向にある。コの字状の区画と、おもに深く細い柱穴で建物を支えるという構造は、SB02と類似している。建物跡の主軸はSB02とは異なり、SB03・04と揃っている。

遺物は須恵器・土師器が地山直上に堆積した茶褐色土層中より出土している。土師器壺は完形に近い良好な出土状況であり、流入によるものではなく、建物の廃棄に伴って残されたものであろう。これらの年代は概ね古墳時代後期のものである。

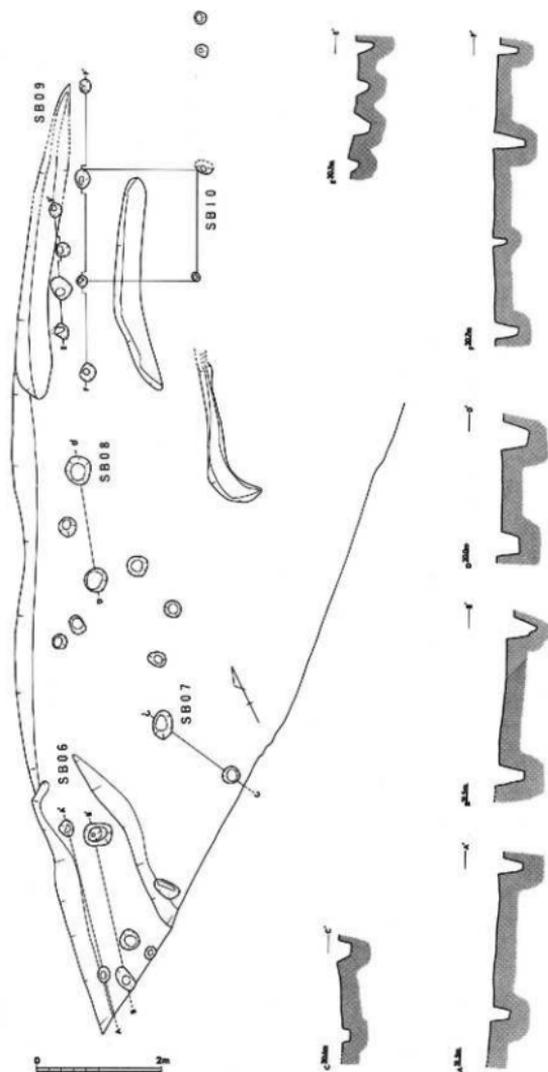
SB06 (第14図) 標高30m付近に広がる平坦面で検出したもので、調査区南端で検出している。一方は調査区外へ続いている。コの字状の溝による区画の一部が見られるが、平坦面の掘り込みを部分的に深くしたものを利用している。柱穴は直径20cm前後と細いものと50cmと太いものと二列が想定でき、建て替えを行ったものと見られる。SB06と平行して1m離れた位置で段状の掘り込みが確認された。これらの建物跡の前後関係については不明である。

遺物は柱穴の埋土中から須恵器坏身・坏蓋や土師器の小片が出土している。他に地山面より10cm浮いた位置で小片の集中する土器溜りDを検出した。時期は概ね他の建物跡と同じ時期のものと思われる。

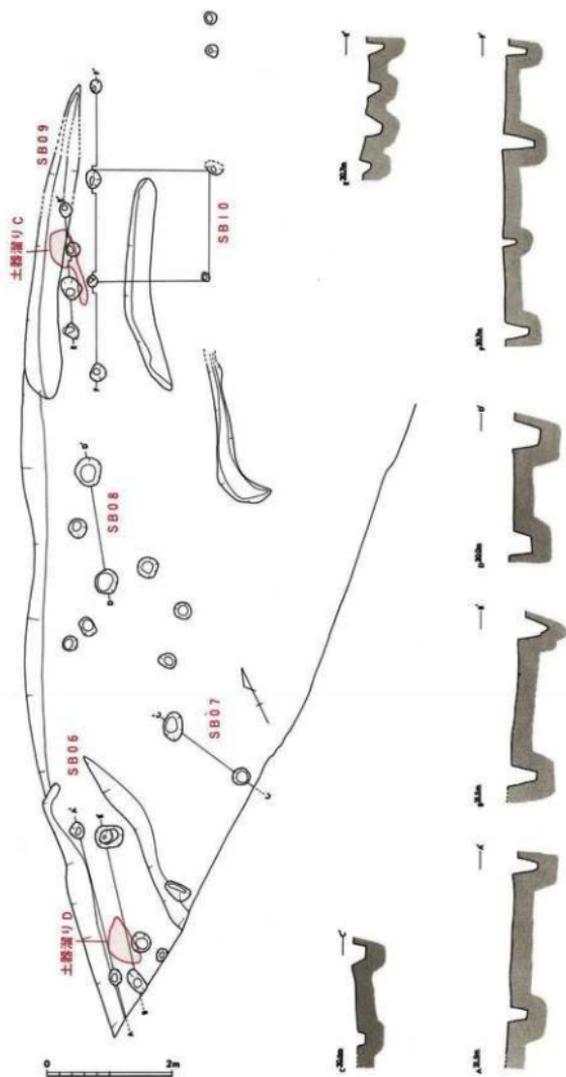
SB07 (第14図) SB06の東側に位置する。谷に向かって遺構を検出した地山面が緩く傾いているため、SB06より1m低い場所にあたる。調査区南端に接するため、全体を伺うことはできない。直



第13図 四ツ廻II遺跡SB05実測図・遺物出土状況 (1/60)



第14図 四ツ廻II遺跡SB06~10実測図(1/80)



第15図 四ツ廻II遺跡SB06~10遺物出土状況(1/80)

径40～50cmの太い柱穴で、底は平底である。遺物は小片のみ少数出土している。

SB08 (第14図) SB07の隣で検出している。柱穴の配置を完全につなぐことはできなかったが、規模の共通性が認められる。直径40～50cm深さ約40cmであり、コの字状の区画は伴っていない。焼上面や溝などの遺構も確認されなかったが、これに関連すると考えられる土器溜りCが検出されている。土器溜りCは、ほぼ完形の移動式竈(第36図)が押しつぶされた状態で地山面に貼り付いて出土し、ほぼ完形の甕(第35図5～6)が出土した。その他、須恵器坏身、坏蓋や土師器壺、甕などが出土している。良好な状態で煮炊き具が出土しているが、焼土の痕跡は確認されていない。

SB09・10 (第14図) SB08との並びにあり、SB02とも空地を隔てて並びの位置に当たる。コの字状の区画は見られないものの、対応する斜面側の掘り込みは確認でき、本来区画があった可能性もある。SB09と10はやや軸を異にするものの、それぞれに関連が深いと考えられるが土層の観察では新旧関係を明らかにし得なかった。建物の柱配置はSB10では、柱間を約1.8mに揃えた1間1間と考えられる。

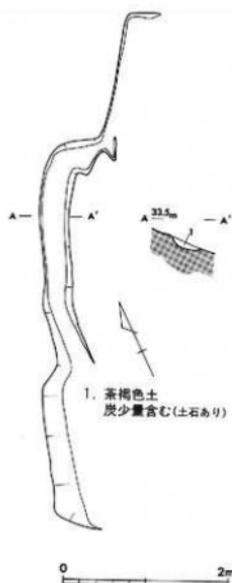
遺物は須恵器・土師器の小片が、上面に堆積した茶褐色土層中より出土している。またSB09・10のいずれに伴うか不明であるが土器溜りCが検出されている。これらより、他の掘立柱建物跡と同時期であると見られる。

SD01 (第16図) SB01とSB2～10のある平坦面のほぼ中間位置する。標高33mコンターラインに沿って長さ約6m幅40cm以下の浅い溝状を呈する掘り込みを検出した。平面形は不整であり、性格は不明である。かなり急な斜面であるため谷側が流失している可能性も考えられる。

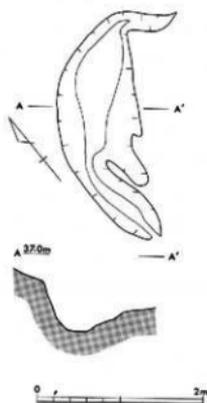
遺物は埋土中より土師器類が出土している。かなり復元できるものもあるが、多くは小片である。

SD02 (第17図) SB01の掘り込みの一部を切って作られている不整形の溝状遺構である。平面形は緩く弧状を呈し、幅は0.4～1.2mと中央で膨らんでいる。地山をV字状に掘り込んでおり、内部には強く締まった黄褐色土の単一土により埋まっていた。遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。

SK01 (第18図) 標高38mと検出遺構中では最も最高位に位置する。谷側の一片を欠いているが、長軸1.4m短軸0.7mの小



第16図 四ツ廻II遺跡SD01実測図 (1/60)



第17図 四ツ廻II遺跡SD02実測図 (1/60)

判形の土坑である。深さ30cmの素掘りの上坑で、底は50×70cmの小判形の平底である。内部には淡黄褐色の単一土層で、遺物は出土していない。

SK02 (第18図) 標高30m付近に広がる平坦面上に位置する。長軸80cm短軸40cmの小判形の土坑で、深さは40cmである。底部は平底である。内部に堆積している埋土は、平坦面上にある掘立柱建物の柱穴等とは異なるっており、これらとは性格・時期を異にしていると見られるが、遺物は出土しておらず、時期、性格は不明である。

SK03 (第18図) 標高35mに位置する、直径75cmの平面形がほぼ正円を呈する深さ30cmの地山を掘り凹めた土坑である。平底には直径20cm深さ10cmのビット状の掘り込みが見られる。埋土は2層に分けられ、下層は黒色の混炭層である。底や壁は赤く焼けており、赤褐色を呈する。遺物は出土していない。

SK04 (第18図) SI01とSB01の間に位置する地山に掘り込まれた土坑である。掘り形の平面は長軸1.4m短軸1.0mの楕円形を呈し深さ70cmで、黄褐色の単一土層により埋まっている。底は緩い傾斜を持っており、底から1/2の位置で掘り込みの傾斜が変化している。遺物は伴わず時期、性格は不明である。

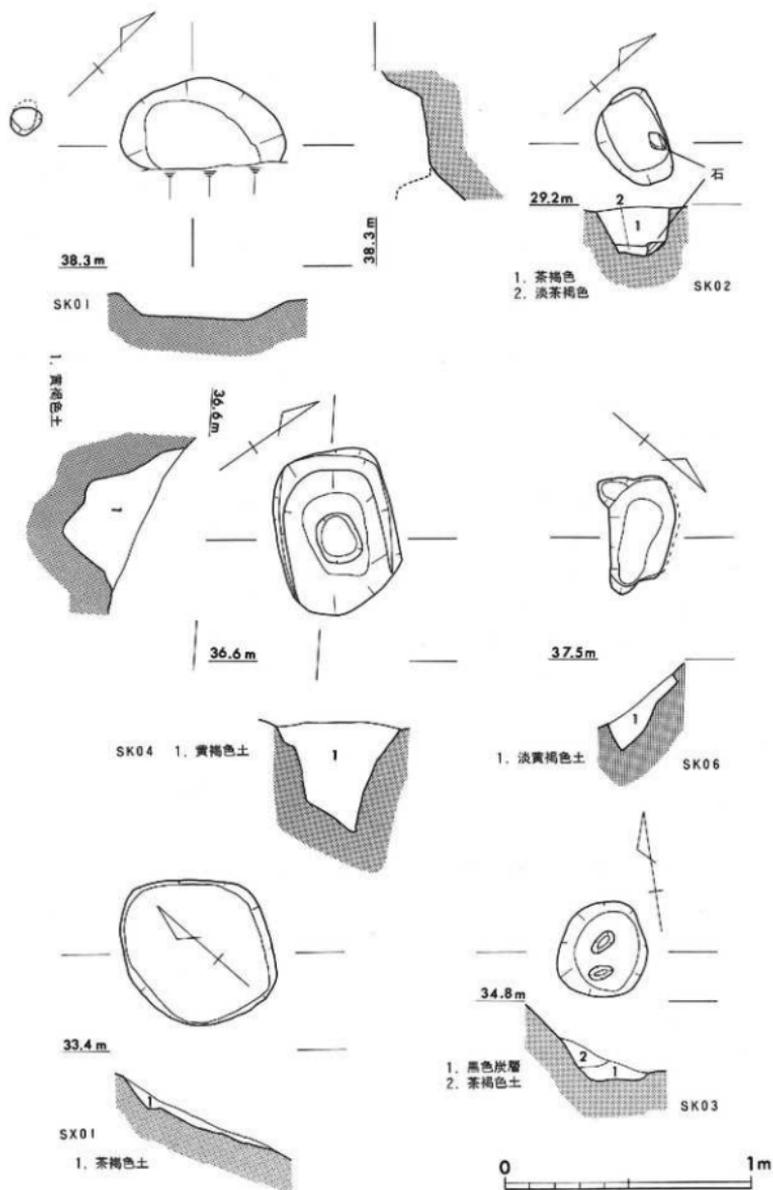
SK05 (第20図) SK05に隣接する位置で検出している。長軸80cm短軸50cmの楕円形の掘り形を持つ地山に掘り込まれた土坑で、一部後世の擾乱により不明である。底は平らに整っており、底に接して土師器壺形土器が1個体寝かせて置かれていた。この土器は接合によりほぼ1個体が崩っており、本来完成形で置かれたものが土圧により破損した状態で出土したものと見られる。この土器は古墳時代前期後半～中期前半に属すものと見られる。その他の出土遺物は検出されていない。

SK06 (第18図) SI01に近接して検出している。SI01などにより一部切られていることもあり、不整形である。内部には黄褐色土が固く締まって堆積し、遺物は出土していない。性格や時期は不明である。

SK07 (第19図) 斜面上、標高33mで検出している。平らな底の中央にビットがある二段掘りの形態より、落とし穴として利用されたものと考えられる。平面形はほぼ正円を呈し、直径1m深さ約1mの円形に地山を深く掘り込んで作られている。直径80cmの円形の平底の中央には、直径18cm深さ34cmの杭穴が穿たれている。また壁を横方向に小さく掘り込んだ性格不明の「棚」状の掘り込みが検出された。埋土中より土器小片が出土している。小片のため詳細は不明であるが、鉢や甕などの体部と見られる。文様は無く、特徴が不明瞭なため時期を確定するのは困難であるが、この遺跡で出土している古墳時代の土師器類の胎土とは大きく異なり、大粒の砂粒を多量に含み、暗褐色を呈している。落とし穴状土坑の多くは縄文時代に遡るものが多く、この土坑も古く遡る可能性が高い。

SK08 (第19図) SB01の上で検出した。大きさは直径1.4m深さ1.3mでやや小判形を呈する。径90cm×120cmの楕円形の掘り込みの平底に穿たれたビットは、直径18cm深さ25cmである。遺物は出土しておらず、3層の水平な土層が堆積している。SK07と同様に落とし穴としての用途が考えられよう。遺構の時期は不明である。

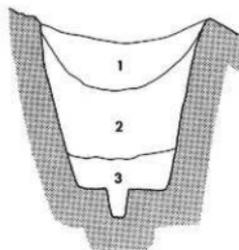
SX01 (第18図) 直径約1m深さ10cmと浅い円形の掘り込みである。非常に細かく割れた土器片と碧玉の割片が出土している。土器は小片で時期を特定することは困難である。遺構の性格は不明である。



第18図 四ツ廻II遺跡SK01, 02, 03, 04, 06, SX01実測図 (1/40)

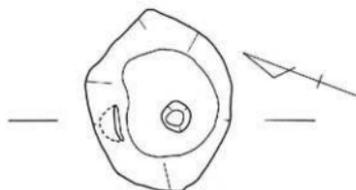


37.6m

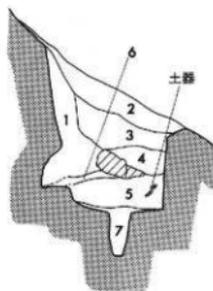


- 土層観察
 第1層 暗褐色(焼山土も含む)
 第2層 淡茶褐色(燻含まず褐色のまだらな土含む)
 第3層 黄灰色(1cm内外のジャリ石含む粘土質)

SK08



33.4m

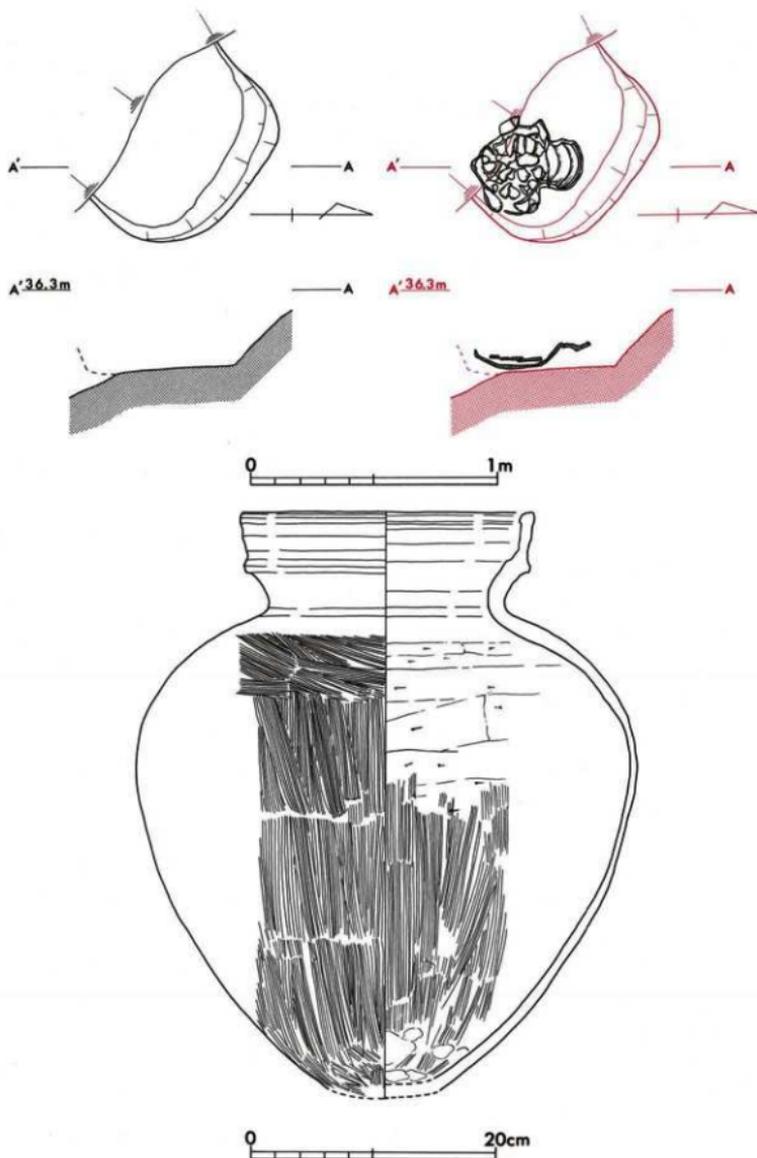


- 土層観察
 第1層 褐色土(燻大の地山燻含む)
 第2層 淡茶褐色土
 第3層 暗茶褐色土
 第4層 淡茶青灰色土
 第5層 青灰色土(粘質強土層含む)
 第6層 橙色(粘質土)
 第7層 淡黄褐色(粘質強)

SK07



第19図 四ツ廻II遺跡SK07, SK08実測図 (1/40)



第20図 四ツ廻II遺跡SK05実測図(1/20), 出土遺物実測図(1/4)

第3節 遺物について

四ツ廻Ⅱ遺跡では、遺構に伴い遺物が出土している。また、遺構の上部に堆積した土層中からも出土している。須恵器・土師器などの土器類が中心を占めるが、玉作に関連した木製品や剥片、砥石などの遺物が遺構に伴い出土している。他に玉作と関連のない石製品も出土している。以下、それぞれの遺構・包含層ごとに特徴を述べる。

SI01出土遺物（第21～27図）

土器（第21図～23図） SI01を検出した場所では、竪穴住居跡と平坦面が上下に重なっていると見られ、時期の異なる土器が出土している。土器に限らず遺物の出土状況には大きく分けて次の①～④の状況に分けられる。

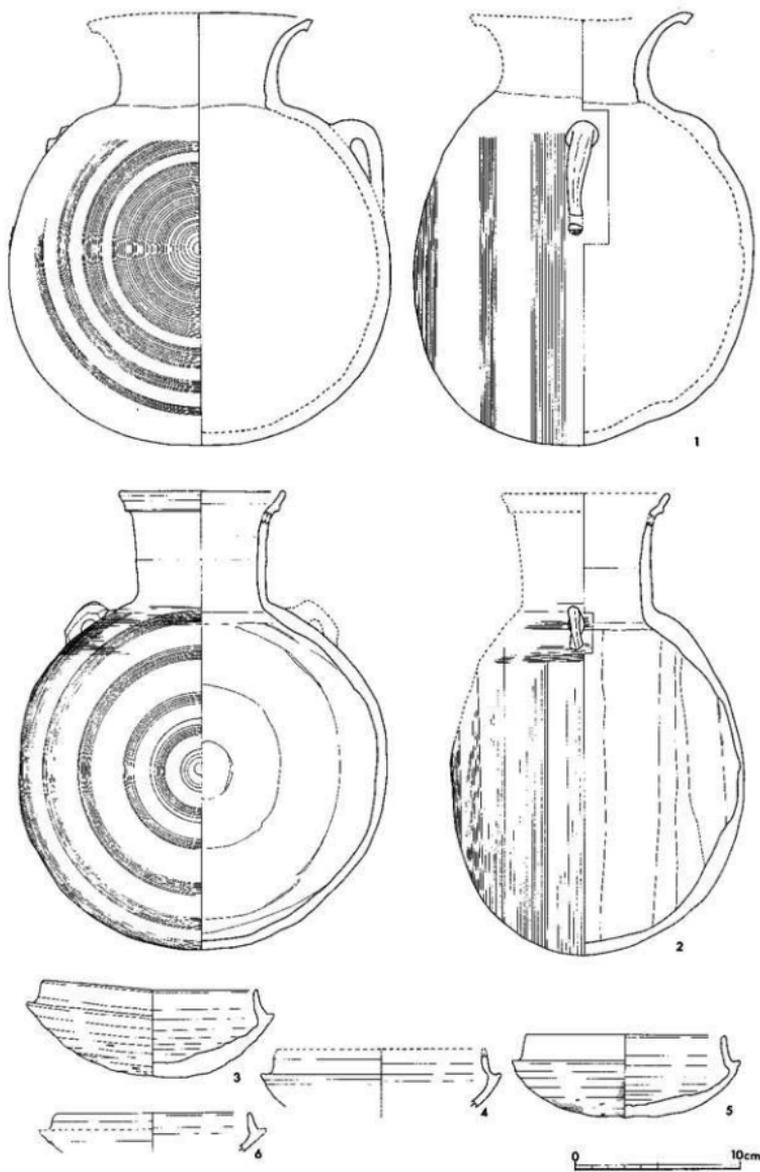
- ① 竪穴住居跡の柱穴等のピット内の埋土中に完全に埋没した状態で出土したもの（第22図10、第23図3）
- ② 床面より出土したもの（第21図1、第22図8～9、第23図7～9）
- ③ 床面の上部に堆積した、竪穴住居跡の埋土中より出土したもの（第21図2、第22図5～6、11～14、第23図4～6）
- ④ 竪穴住居跡が埋没したのち作られた平坦面上および直上の土層中から出土したもの（第21図3～6、第22図1～4、第23図1～2）がある。

①で出土したものは、土師器二個体のみである。ピット13中より出土した甕（第23図3）は、頸部から内傾して立ち上がる単純口縁の口唇部が肥厚する。体部外面の下半は縦方向、上半は横方向のハケメが施されるもので、古墳時代前半期の布留式甕の特徴を残すものである。小片ながらピット17中より出土した高坏（第22図10）は、坏部のみ出土であるが、坏部外面に段を持つ形態のものである。これらは古墳時代前期後半～中期の特徴を備えており、松山編年のⅡ期当たる考えられる。

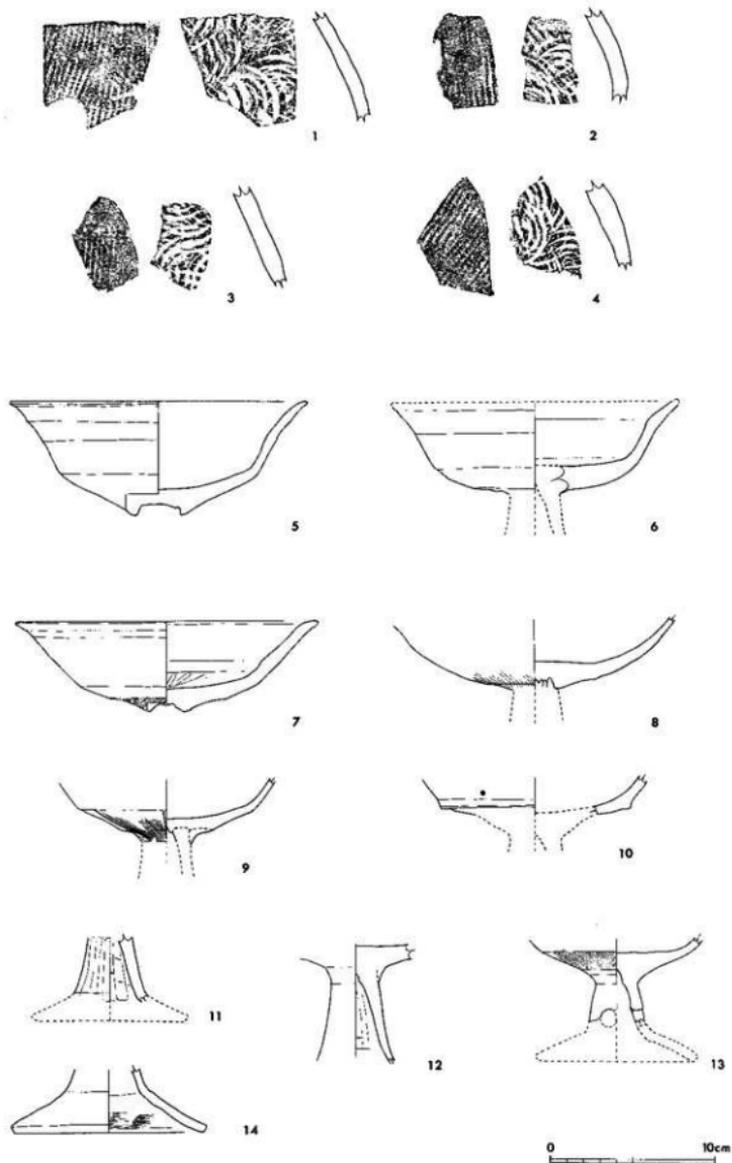
②では須恵器、土師器が出土している。須恵器はピット3に埋没し、ほぼ完形で出土した提瓶（第21図1）がある。口縁端部が薄手の二重口縁を呈し、肩部は環状の把手が付くもので、体部は丸くよく張っている。大谷氏の編年による3期に当たるものと思われる。土師器には高坏、壺、甕がある。高坏は坏部が外反して立ち上り、中央の外面に刺突痕を持つ（第22図7、8）。壺は、器壁が厚く体部に小さく立ち上がる頸部を持つ短頸壺（第23図7）と、胴部最大径が約10cmと小型の壺（第23図8）がある。高坏については、古墳時代前期後半～中期の特徴を備えているが、壺については不明である。

③では須恵器提瓶（第21図2）と、高坏や壺等の土師器がある。第21図2の提瓶は、頸部が直線的で長く、口縁端部は薄い二重口縁を呈す。外面は同心円状のカキメと肩部の環状の把手の部分には横方向のカキメも見られる。内面は叩きタタキの痕跡を荒くナデ消している。土師器は小片のもので、高坏や甕片が見られる。第22図13の高坏片は脚に円孔が三方に穿たれており、一部赤彩が施されている。甕片は外反する単純な口縁のもので、古墳時代後期のものと思われる。

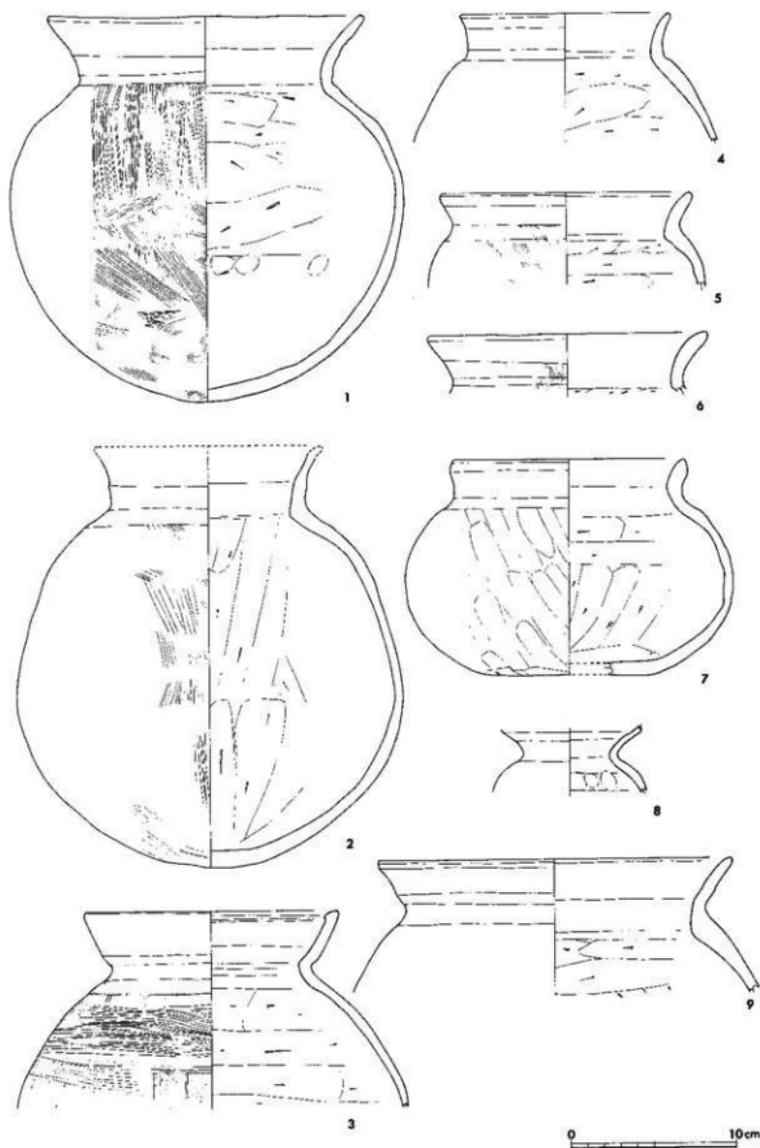
④では、須恵器蓋坏・甕片や土師器が出土した。特に平坦面の東端において検出した土器溜りは、完形に復元可能な土器を含んでおり、平坦面に伴うものと考えられる。第21図3と5、第23図1、2はこの土器溜りから出土したもので、遺存状況も比較的良好である。第21図3と5は須恵器坏身で、



第21図 四ツ廻II遺跡S101出土遺物実測図(1) (1/3)



第22図 四ツ廻II遺跡S101遺物実測図(2) (1/3)



第23図 四ツ廻II遺跡S101出土遺物実測図(3) (1/3)

両者とも外面の1/2から1/3の範囲にヘラケズリが見られる。立上りがやや高く口径も13cm前後とやや大きめである。十師器甕では、単純口縁で胴部が丸く張りのあるもの(第23図1,2)が見られる。須恵器は大谷編年3期に当たるものと思われる。

これを踏まえ遺構の時期について整理すると、①の遺物からSI01の時期は古墳時代前期末～中期、松山編年3期と考えられ、SI01の上位に重なった平坦面は④の遺物より古墳時代後期後半の大谷編年3期と思われる。

玉作関連遺物(第24～27図) 玉作関連の遺物は、①②③④において出土しているが、③④では細かい剥片のみであり、混入したものと思われる。以下、床面及びピット中からの出土品(①②)について述べたい。

玉砥石(第24図,第25図1～2) 玉砥石は、前述の①～③の状況で出土しているが、②での出土が多くを占めており、また出土位置も各側のピット17周辺の一隅に集中している。石材は結晶片岩製のみで、色調が緑や青味がかったものや、赤紫色のものがある。形態は個々に異なっており、扁平で大きめのもの(第25図1,2)、扁平で5cm未満と小型のもの(第24図1～10)とがあり、用途に応じて使い分けされていたものと思われる。いずれも非常によく使い込まれており、使用面は、結晶片岩特有のがさがさとした自然面をほとんど残していない。第24図1～3は厚さ0.5～1.5cmと薄く、長さ10cm前後の小さい砥石である。広い扁平な面は使用により滑らかな面となっている。細長い側面にも使用痕が認められる。2は一端は破損しているが一端はよく使用され、三角形に尖っている。4,5は一部欠損しているが、欠損部を除いたほとんどに使用痕が見られる。広い扁平な面には幅1.2cm深さ1～3mmの浅い筋状の窪みが認められ、筋砥石として使用されたものと思われる。6,7は破損せず本来の形態を保っているもので、長さ8～10cmで手に収まりの良い大きさである。扁平な面は非常に滑らかで、よく使用されているがその他は自然面を残している。第25図1,2は、破損しておらず、使用時の大きさを残しているものと見られる。1は台形状のもので、短辺である両端は砥石として使用されていなかったようであるが、長辺および扁平な広い面は非常に滑らかである。広い扁平な面には浅い凹みが認められる。2は菱形状で広い面がよく使用されている。

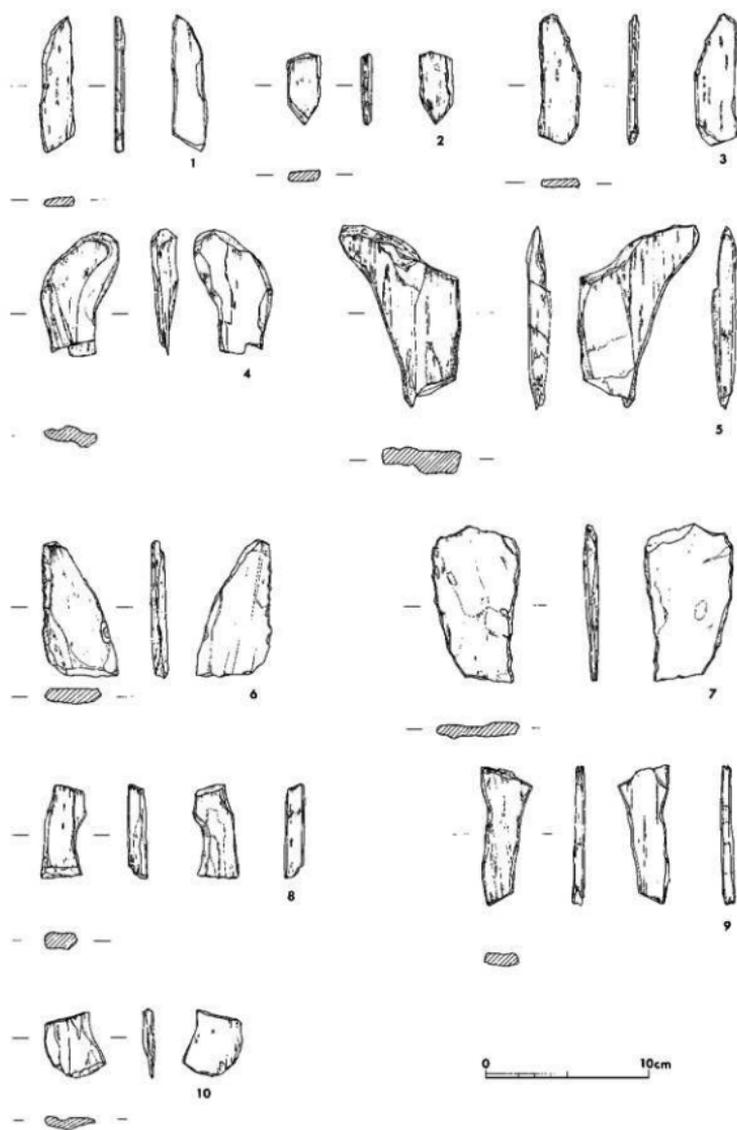
このように本遺跡から出土した玉砥石は結晶片岩製のもののみである。他の玉作遺跡で見られる砂岩などを用いたいわゆる「筋砥石」状のものは認められていない。

玉未製品・剥片(第26・27図)

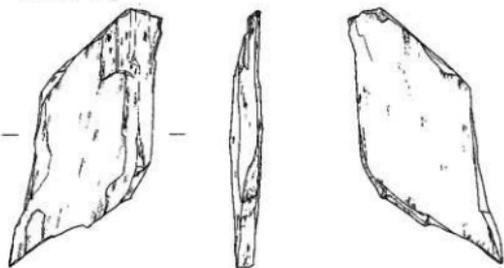
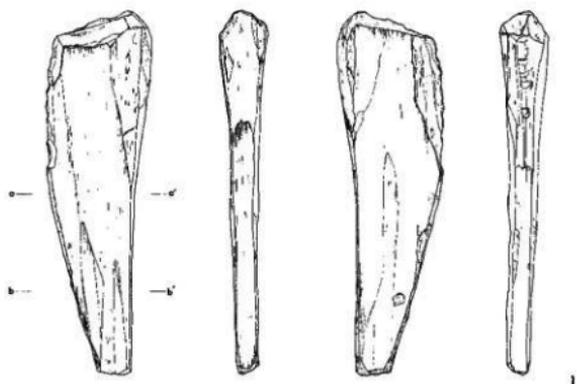
めのう、碧玉製の未製品と、剥片が出土している。これらの石材の完成品は他の遺構や包含層を合わせても出土していない。玉の未成品や剥片のおおよその出土量の約2/3がめのう製であり、質の悪いものも含めて残りの1/3が碧玉といった割合である。その他の石材には、不純物を含む質の悪い水晶の剥片が1点出土している。

めのうを用いては、勾玉の製作が行われていたことが分かる。完成品に最も近いものでは、成形のための細かな剝離の凹凸が研磨により消され、ほぼ勾玉の形態にまで荒磨きがなされて、穿孔されているもの(第40図9)が遺構外からではあるが、SI01に近接した位置で出土している。これは、復元長が約2.5cmと小さいものである。

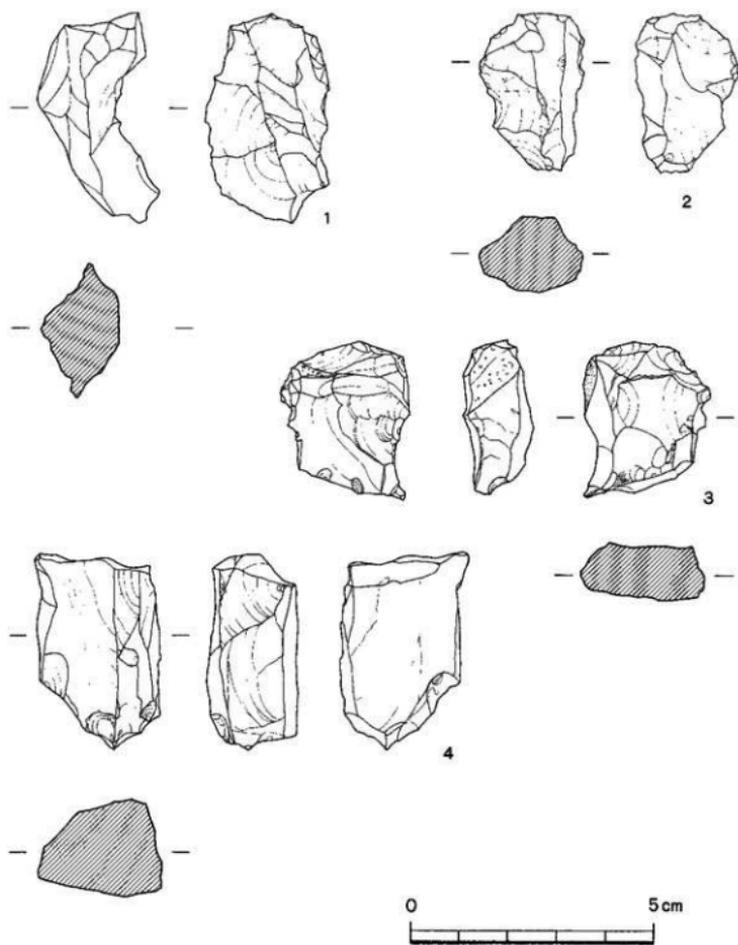
第27図5・6は原石から勾玉のおおまかな大きさを荒削りにより作り出したもので、長さ3.2cm厚



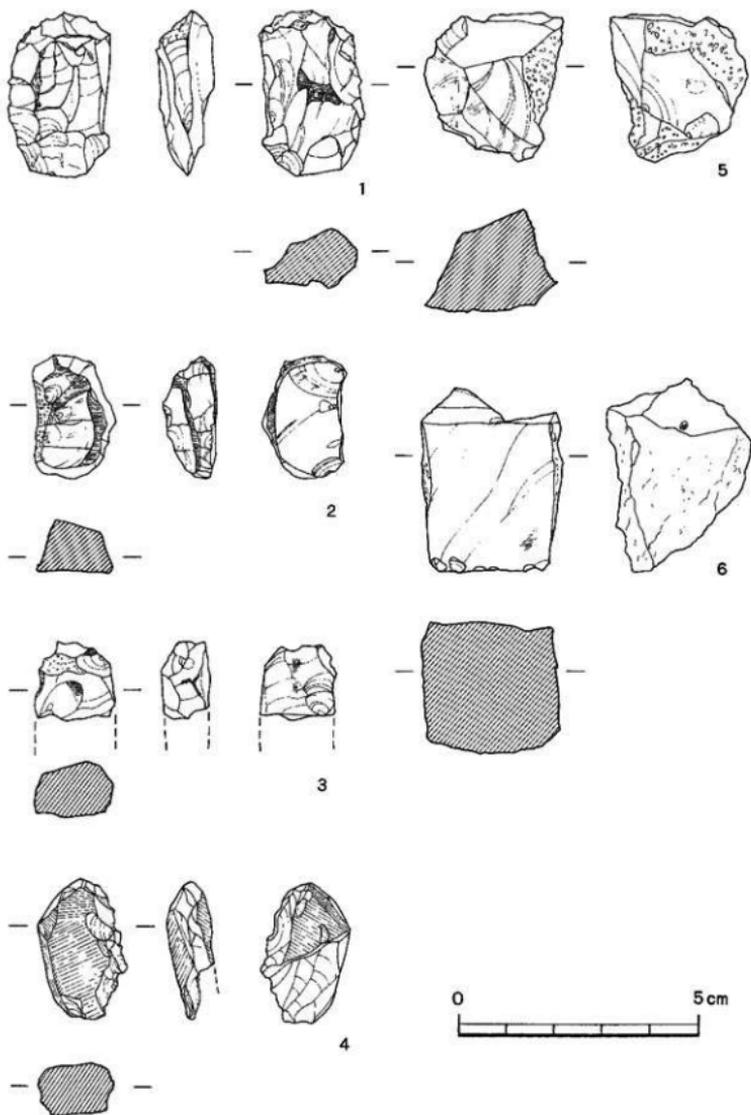
第24図 四ツ瀧II遺跡S101出土遺物実測図(4) (1/3)



第25図 四ツ廻II遺跡S101出土遺物実測図(5) (1/3)(2/3)



第26図 四ツ廻II遺跡SI01出土遺物実測図(6)



第27図 四ツ廻II遺跡S101出土遺物実測図(7)

さ2cmを測る。第27図1～4はさらに細かな打割を加え半月状に整形したものに研磨が両面及び背面に施されたもので、長さ3～2.4cm厚さ1～0.7cmを測る。腹面は未成形で、第一次荒割り時の剥離面を残し、抉りも認められない。

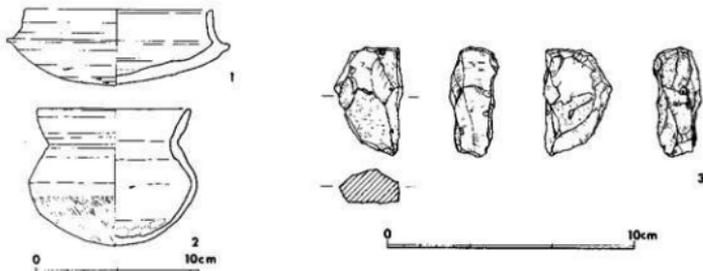
碧玉は、めのうに比べて出土量が少なく、製品に近い形態のものや研磨が施されているものは出土していない。第26図1～4は第一次荒割りによりおおまかに成形されたものである。1は長さ3.6cm厚さ1.5cmのやや不整形な未成品で、小さな剥離面で構成されている。2は長さ2.7cm厚さ1.3cmである。3は長さ2.7cm0.9cmを測り、背面は剥離を施し半月状に整えられている。このことより、勾玉を意図している未成品と思われる。4は縦長の剥離面を多く残す長さ3.5cm厚さ1.3cmの角柱状の未成品である。管玉の荒割り段階の未成品か勾玉の未成品と思われる。四ツ廻Ⅱ遺跡からは管玉の完成品に近い遺物や製作過程を復元できる未成品や剥片が出土していないが、製作を行っていたとすると、荒割りなどの製作の早い段階から管玉の長さに合わせて石材を加工していたことが考えられる。

その他の遺物 (第25図3～10)

SI01では玉類が出土している。床面に接して出土した勾玉(第25図6)は尾部を欠いているが灰色を呈しており滑石製と思われる。その他の滑石製の有孔円盤(第25図3,4)や泥岩製勾玉(第25図5),小玉(同7～10)は床面直上の土層中より出土している。これらは製品であり、こうした石材の剥片や原石などの製作に因る遺物が出土していないことより製品として持ち込まれたものであろう。

SB01出土遺物 (第28図)

遺構の遺存状況が悪く、出土した遺物も少なかった。床面直上から出土した第25図1は須恵器坏身で、口径が13.9cmとやや大きく、高い立上りを持つもので、外面は1/2以下をへら削り調整を施している。2は土師器の小形丸底壺で、体部外面の下半には細かい単位のハケメ調整が見られ、以上はヨコ撫である。これらの土器からはほぼSI01の上部の平坦面と近いに当たると思われる。2の丸底壺の内部からは、3のめのう製の勾玉未製品が出土している。研磨がなされていない半月状のもので、長さ3.5cmと本遺跡の未製品の中では大型のものである。他に玉作関連の遺物は出土しておらず、直



第28図 四ツ廻Ⅱ遺跡SB01出土遺物実測図(1/3,2/3)

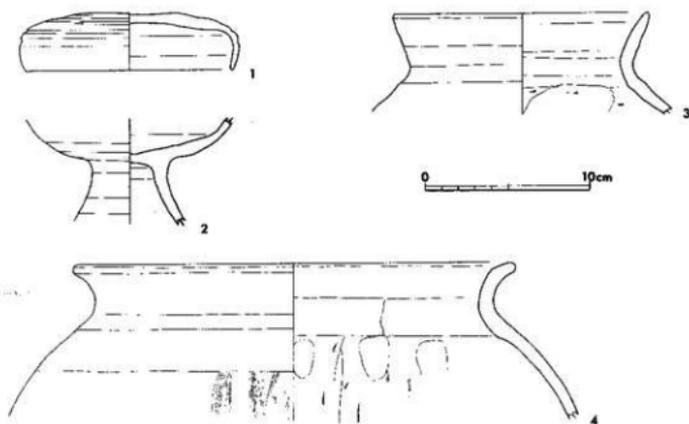
上に堆積した土層中より極少量の碧玉・めのうのチップが確認されたのみである。

出土遺物より、古墳時代中期の遺構と思われる。

SB02出土遺物（第29図）

地山直上と上部において須恵器・土師器が出土している。上部に堆積した土層からは斜面で真上の位置関係に当たるSI01付近より流れ込んだと思われる碧玉・めのうのチップが認められた。

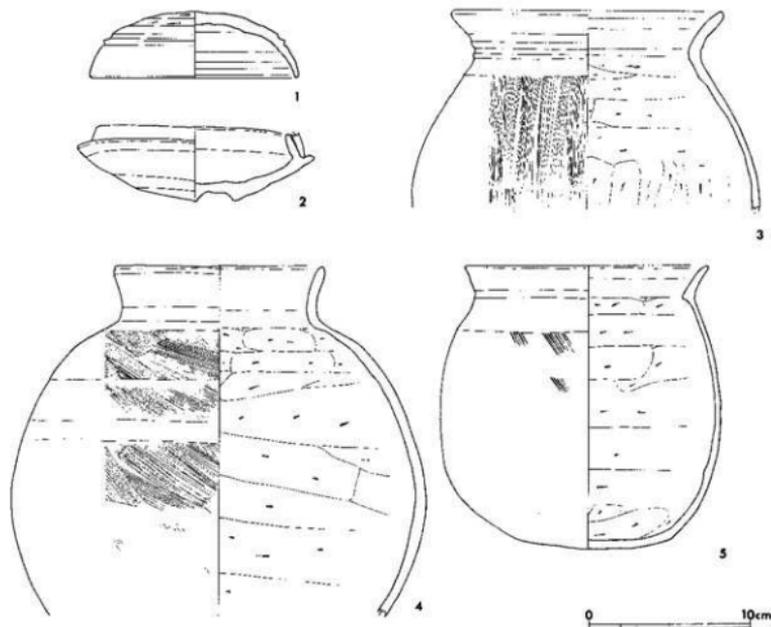
第29図1は須恵器坏蓋で、内外面とも回転撫で調整である。2は須恵器高坏である。現存部分からは脚部に透しは認められない。3は土師器壺の口縁部、4は胎土が非常に粗く壺型土器の一部であろう。これらの須恵器は大谷編年4～5期に当たると見られ、土師器からも古墳時代後期後半のものと考えられよう。



第29図 四ツ廻Ⅱ遺跡SB02出土遺物実測図（1/3）

SB05出土遺物（第30図）

柱穴の重複が少なく、保存状況が良好であったこの遺構では、他の掘立柱建物跡に比べて遺物も完形に近い良好な土師器が出土するなど良好な状態で出土している。第30図1は須恵器の坏蓋片で、天井部にへら削りが見られる。2は坏身で、器形は大きく企み、焼成時に接着した坏蓋の一部が貼り付いている。3～5は土師器壺および甕である。3・5は甕で、外面に煤の付着がある。4は球状の丸い胴部にやや外傾気味に開く口縁部をもつ甕である。これらの土器は遺構検出面に貼り付いた状態で出土しており遺構の時期を表しており、大谷編年4～5期にあたり、古墳時代後期後半のものである。



第30図 四ツ廻II遺跡SB05遺物実測図(1/3)

土器溜りA出土遺物(第31～33図)

SB02と05の間では、SB03・04付近で土器が多数集中して出土する場所が大きく2か所認められた。ここはSB03・04が重なっているため何れに伴うものかは判断し難かったため、土器溜りA、土器溜りBと分けて述べる。

土器溜りAでは、蓋坏(第31図1～6)、有蓋高坏(同7,8)、無蓋高坏(同9)、短径甕(同10～12)といった須恵器と土師器が出土している。坏蓋では、第31図1が天井部にヘラ削りを施すなどやや古い様相を呈しているものの、2～6は回転撫で調整によるもので7の坏身と共に大谷編年5期に当たると見られる。有蓋高坏では透しの有無、脚部形態に差違がみられる。土師器は混入と思われる高坏片1点(第32図5)を除いて甕(第32図4)、甌(第31図13)、土製支脚(第32図1～3、第33図)といった煮炊き具で占められる。特に土製支脚は、図示しなかったものも含めて、大小6個体がまとまって出土している。大型の支脚は直径約8cm高さ15cmの円柱状に3か所指示部がつくもので小型のものは直径3cm高さ8cmに同様に3本の指示部が付くものである。またここでは移動式竈の底部と見られる小片が出土し、併わせて焼石や炭化物を多く含んだ上、焼土面が検出されていることから、これらの煮炊き具を使用する場所であったと思われる。これらの時期は混入と思われる古墳時代前半期の高坏片を除き、やや時期幅があるものの古墳時代後期後半、須恵器では大谷編年4～5期と思われる。

土器溜りB出土遺物（第34図）

土器溜りAの隣で検出した土器溜りで、一部がSB04のピット上にかかって出土している。土器溜りAに比べると個体数は少なく、遺存状況も悪く、小片が多く含まれている。焼土面などの痕跡は確認していない。第34図1～3は坏蓋である。1は小片であるが、外面の大部分を回転撫で調整によるもので、口唇に凹線状の段がつくものである。2,3は内外面とも回転ナデによるもので、3には天井部に×印ノヘラ記号が刻まれている。6は無蓋高坏で、坏部は直線的で、脚部には透しが認められる。須恵器ではその他に甕などの体部の小片が若干認められる（7～11）。土師器は、小片がほとんどであった。12は移動式甕の口縁部である。胎上に砂粒を多く含む。他に図示不可能だったが甕口縁片、体部片なども認められた。土製支脚（13,14）は大型のものが2個体出土している。これらの時期も土器溜りAとほぼ同く古墳時代後期後半、大谷編年4～5期にあたると思われる。

土器溜りC出土遺物（第35, 36図）

この土器溜りは、SB08～10付近のピット等の掘り込まれていない空き地において検出されたもので、地山に貼り付くようにして移動式甕（第36図）と甕形土器（第35図6）が、完形のまま土圧により押し潰されたような状態で出土し、その上面や周辺にその他の土器が出土したものである。移動式甕の直下や周辺の地山面では焼土面などは確認されていない。本遺跡からは掘立柱建物に伴うと見られる土製の移動式甕が、小片を含めるとかなり多く認められるが、このように完形に復元が可能なのはこの個体のみであった。須恵器は蓋坏が4個体出土している（第35図）。1,2は天井部が大きく回転ヘラケズリによる調整で、丸い形態である。口唇部内面には凹線状のアクセントが見られる（同図2）。3は大きく歪んだ坏蓋で、外面天井部は回転ヘラケズリによる調整で肩部には凹線により強調されている。土師器は、図示した甕、移動式甕の他に、甕の小片が出土している。第35図5は、移動式甕と直接接していないが、近接して地山に貼り付いた状態で出土した。二方向に器高の約1/2の位置に把手が付き、下部には四方向に直径1cm未満の小孔が穿たれている。6は、5より口縁径は大きく開いた形態であるが、器高、下方端の直径は大きく異なるものと見られる。これは甕の上部に重なるように出土したものである。移動式甕（第36図）は、炊き口部分を一部欠くが、ほぼ完形の良好な資料である。器高約35cm、受け口部径28cmで、砂粒を多く含んだ胎土である。内面に薄く黒斑が見られるが、煤などの付着物は認められない。

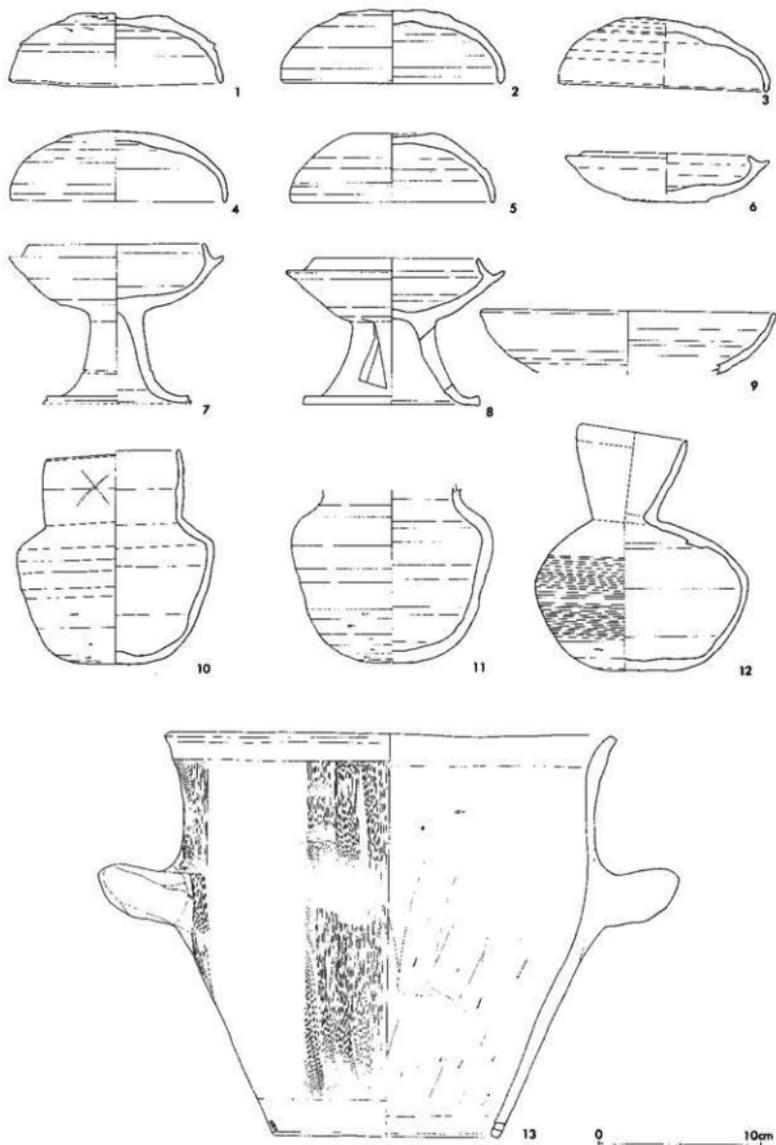
これらの時期は古墳時代後期後半、須恵器より大谷編年4～5期に当たるとと思われる。

SD01出土遺物（第37図）

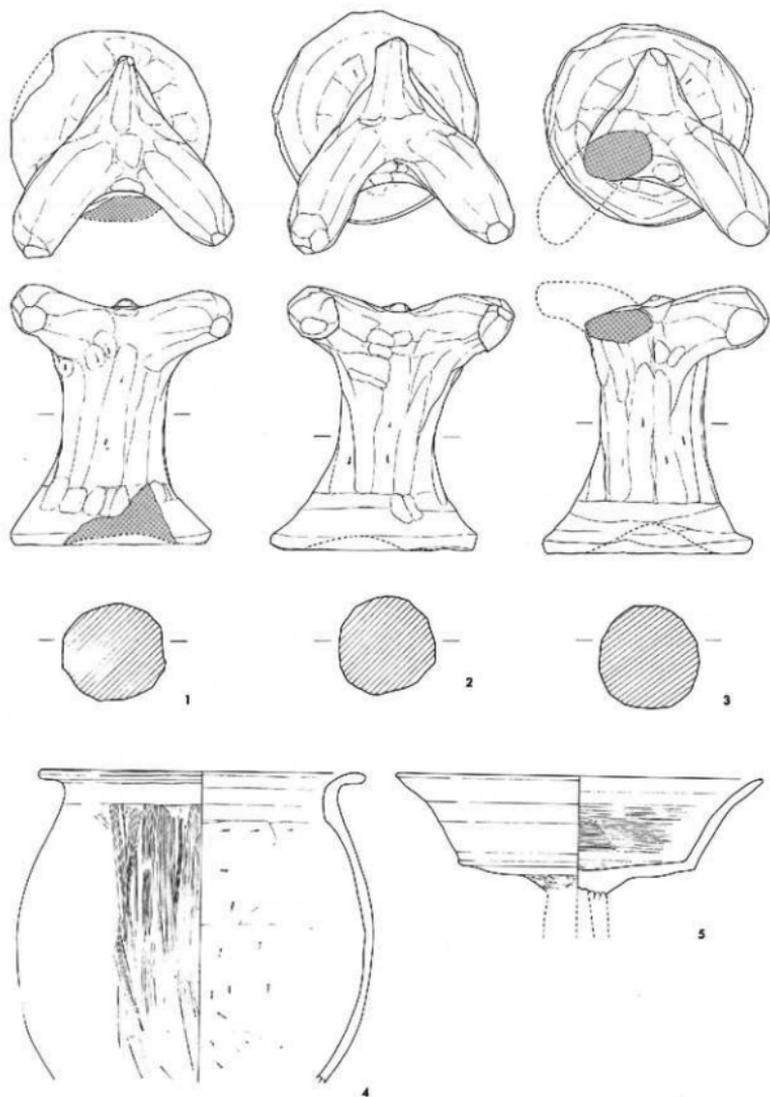
不明瞭な溝状を呈するこの遺構では、内部に堆積した土層より土師器が出土している。1～3は甕である。1は内傾する口縁の立上りの端部が肥厚するもので、外面にはハケ目が確認できる。2,3は端部肥厚しない甕である。4は土師器高坏の脚部である。これらの時期は1については古墳時代前半期の様相を色濃くのこしているものの、その他については古墳時代後期の甕に共通している。

SK05出土土器（第20図）

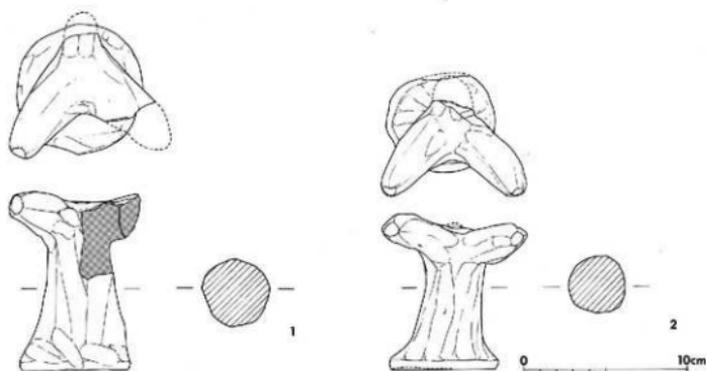
複合口縁のやや退化した甕形土器である。口縁の立上りは直線的で約1cmの厚みがあり、内外面と



第31図 四ツ廻II遺跡土器溜りA出土遺物実測図(1) (1/3)



第32図 四ツ廻II遺跡土器溜りA出土遺物実測図(2) (1/3)



第33図 四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りA出土遺物実測図(3) (1/3)

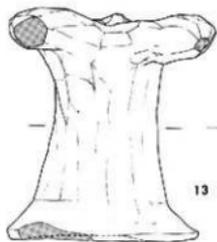
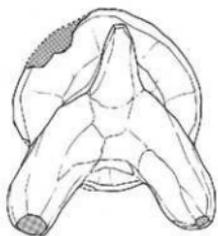
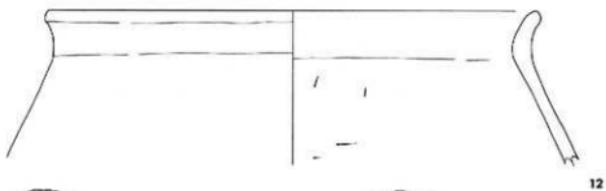
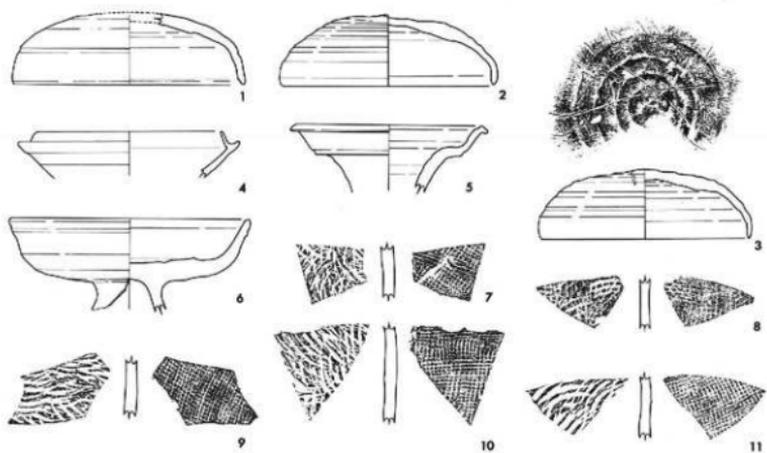
もヨコナデである。外面は、肩部以上が斜め方向のハケメで、以下は縦方向のハケメ調整を施す。内面は上半が横方向のケズリで下半は縦方向ハケメである。ハケメは一条の幅が太く荒いものである。底部は欠損しており不明だが、直径10cm前後の平底であると思われる。時期は口縁の複合部が退化してきていることから古墳時代前期後半、松山編年3期にあたると思われる。

その他の包含層出土遺物 (第38・39・40図)

遺構の上面を覆う土層(第6図第6層)中を中心に土器類を中心とする遺物が出土している。遺構がかなり急な斜面に作られていることもあり、多くは遺構から流出したのものであると考えられる。

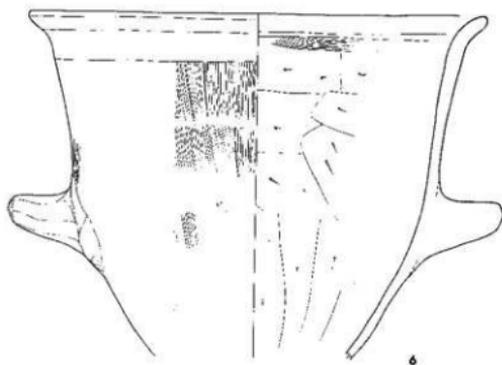
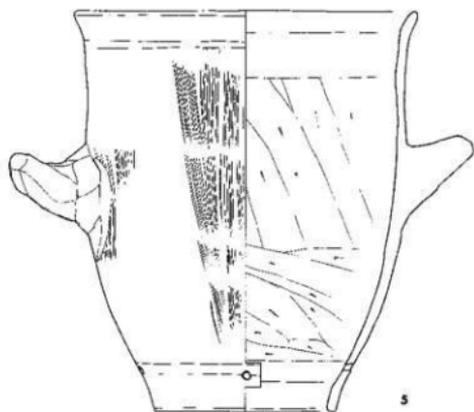
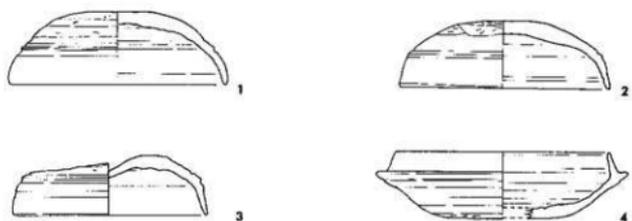
土器(第38~39図, 40図1, 2) 遺構とからの流れ込みと思われるもの他に、今回の調査では確認されなかった時期のものが若干見られた。第39図5は小片であるが、高台付き坏である。底部は回転糸切りで、直線的な坏部と連続するような底部の最も外側寄った位置に高台がついている。9世紀代のものとみられ、これ1点のみの出土である。土師器ではSI01やSK05などで認められた古墳時代前半期の土器が出土している。第39図10は鼓形器台の一部である。14は器高約30cmの壺形土器で、胴部がやや扁平な球形で、口縁部は二重口縁の退化した形態である。

石製品(第40図3~7) 3, 4はSI01で多く出土した玉砥石である。結晶片岩を用いており、何れもよく使用されている。3は扁平なもので、類似したものがSI01で出土しているが、4は半円錐状の砥石で、平坦な面は砥石として使用されておらず、自然面が見られる。5は安山岩製の石匙状の石器であり、細かな刻痕によって刃部が作り出されている。6, 7は安山岩製の無茎石鎌である。8は有孔円盤で、縁周が研磨され台形にされている。9はめのう製勾玉の半製品であり、隅を丸く、光沢が出る仕上げの研磨を行う前の段階の未製品である。

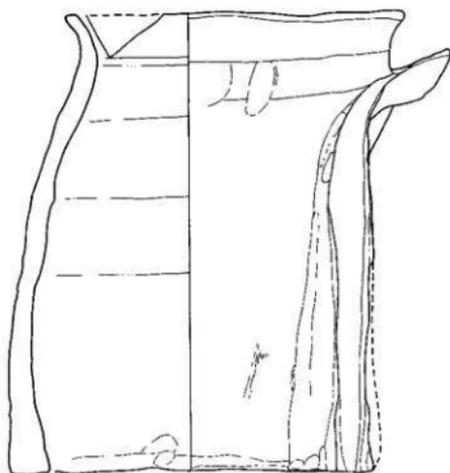


0 10cm

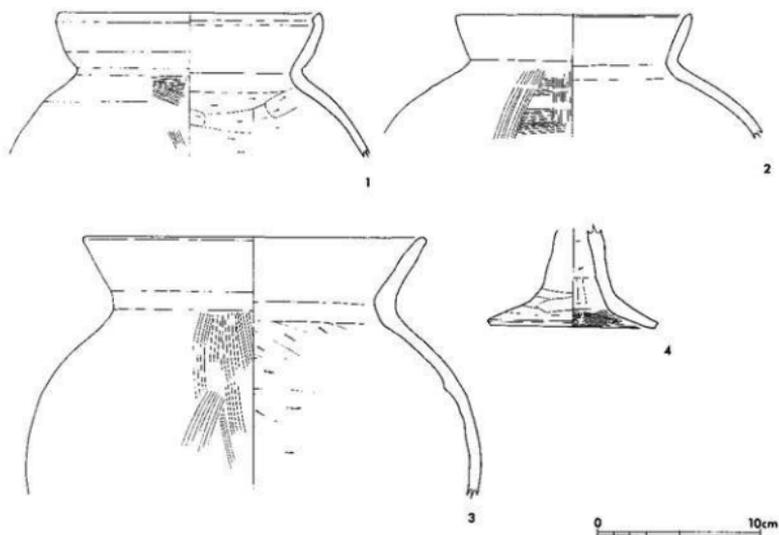
第34図 四ツ廻II遺跡土器溜り日出土遺物実測図 (1/3)



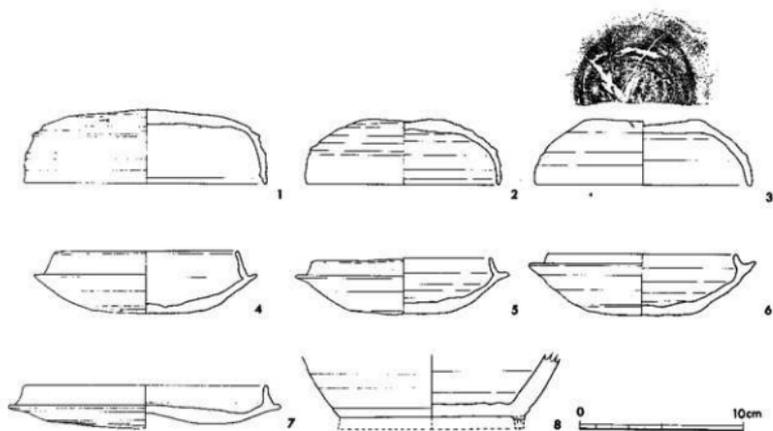
第35図 四ツ廻Ⅱ遺跡土器溜りC出土遺物実測図(1) (1/3)



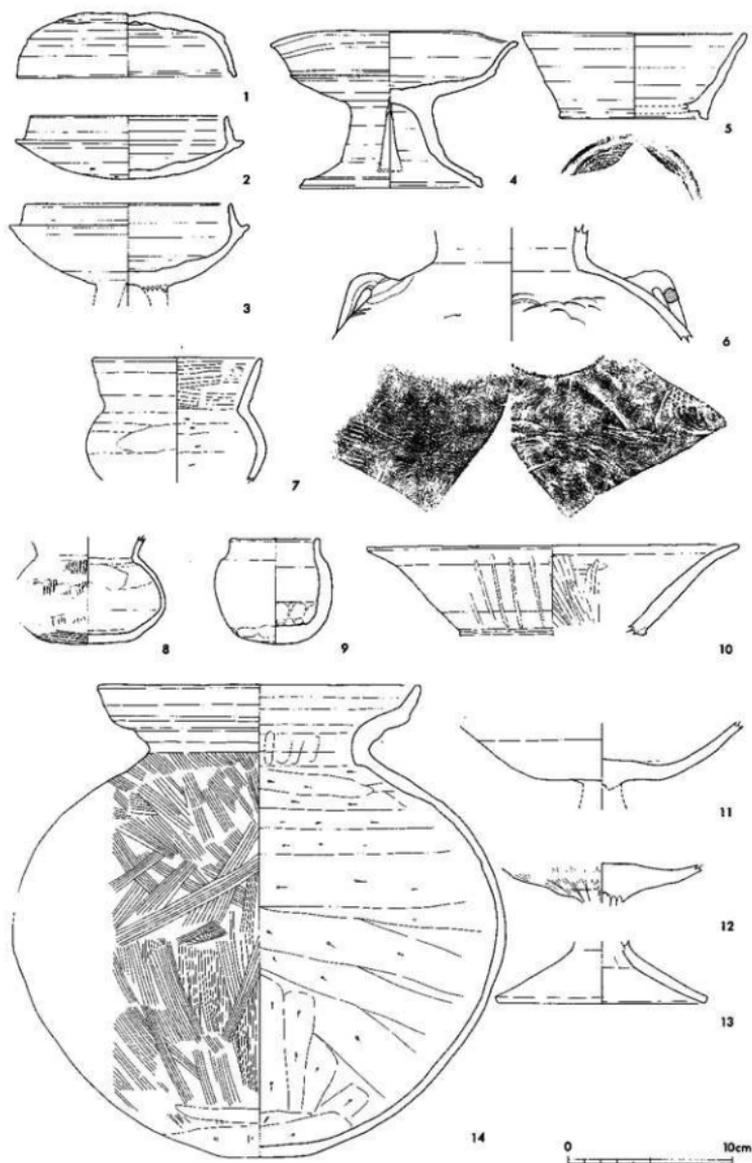
第36図 四ツ廻II遺跡土器溜りC出土遺物実測図(2) (1/4)



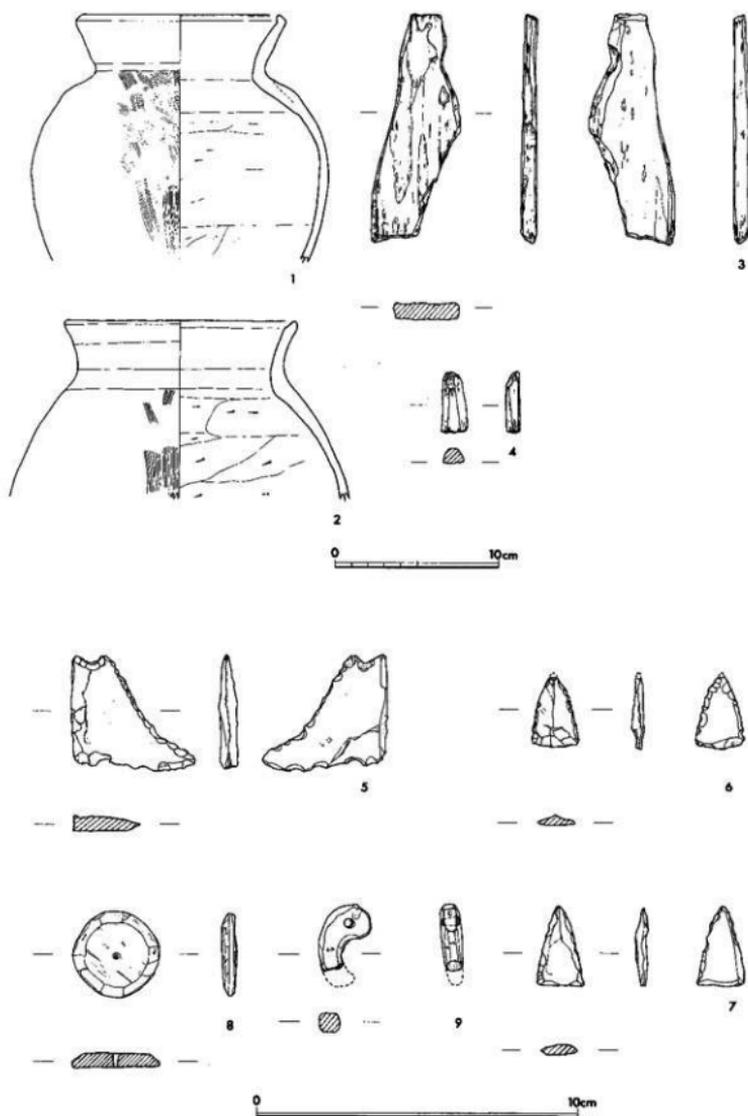
第37図 四ツ廻II遺跡SD01出土遺物実測図(1/3)



第38図 四ツ廻II遺跡その他の包含層出土遺物実測図(1) (1/3)



第39図 四ツ廻II遺跡その他の包含層出土遺物実測図(2) (1/3)



第40図 四ツ廻II遺跡その他の包含層出土遺物実測図(3) (1/3, 2/3)

第4節 小 結

四ツ廻Ⅱ遺跡では、古墳時代前期後半～中期前半の玉作工房跡1棟、古墳時代後期の玉類を用いた祭祀関連遺物、古墳時代後期の掘立柱建物跡9棟、古墳時代前期土師器埋納土坑1基、時期不明の落し穴状土坑2基等を検出した。

今回の調査では、古墳時代前期の遺構は、土師器埋納土坑1基のみであったが、同一丘陵の先端では古墳時代前期の小谷式の竪穴住居跡が確認されており、周辺には古墳時代前期の遺構が存在するものと考えられる。

祭祀関連遺物については遺構は明瞭ではなかったが、斜面を小さく削りだした平坦面において行われたものと見られる。

検出された主な遺構は古墳時代前期後半～中期の玉作工房跡と、古墳時代後期後半の掘立柱建物跡群であり、以下それぞれについて述べ、まとめたい。

玉作りについて

出雲地方における玉作遺跡は、弥生時代前期以降の遺跡で確認されており、弥生時代中期ごろまでは地点的な大規模な集落において生産が行われていたことが明らかとなっている。弥生時代後期後半には、それまでの軟質の緑色凝灰岩を用いた擦り切り技法による玉類の生産から、より硬質の碧玉や水晶を用いた打割と研磨による製作技法に変わると言われている。古墳時代前～中期には、良質の原石の産地である玉湯町花仙山周辺で玉作が行われるとともに、出雲地方の広い範囲で遺跡が確認されている。安来市大原遺跡、平ラⅡ遺跡、大東町大東高校グラウンド遺跡、松江市大角山遺跡などが確認されている。これらのうち工房跡が明らかなものでは方形の竪穴住居に「特殊ピット」などと呼ばれる工作用ピットを持つものが多い。四ツ廻Ⅱ遺跡でもS101から検出され、この周辺から集中して剥片や砥石が出土し、玉作に関連する作業土坑と考えられる。また、弥生時代前期～中期の玉作遺跡が、平野部の大規模集落内であるのに対し、花仙山周辺以外の地域で発見された弥生時代後期～前半期の玉作遺跡には、遺跡の立地が丘陵部に多く、集落の規模が小規模なものが多い。これは、弥生時代後期～古墳時代前半期の集落遺跡の立地自体が変化した結果、玉作遺跡が丘陵地に発見されるということも考えられるが、この時期の集落の様相が明らかでない現状からは詳細な検討はできない。しかし、丘陵部の急傾斜地や低丘陵の頂上部など日常生活にはやや不向きな場所が選択されている可能性がある。これが何に由来するものかは明らかにはできないが、あるいは「玉作り」という技術・作業の特殊性や道具・設備の保有に関わっているのかもしれない。

また四ツ廻Ⅱ遺跡での玉の製作技法については、およそその手順を想定することが可能である。

勾玉は、碧玉・めのうの両方で製作されている。まず第一次の荒割りでは、半月状に作り出す。この際背面には細かな斜線を繰り返しながらなめらかな曲線を作り出すように意識されているが、腹面の凹みは見られず、大きな斜断面や自然面を残し、直線的なままである。次に腹面以外に研磨が行われ、斜断面の凹凸を研磨により滑らかにしている。その後まず穿孔を行った後、腹面の凹部を研磨によって作り出し、最終的に仕上げの研磨を行う、という手順である。管玉は成形の早い段階から管玉の最終的な製品の長さに合わせて打割されていると思われるが、良好な資料が見られず、不明である。時期的

	花仙山周辺	松江市北部	松江市南部	安来平野	出雲平野
弥生時代		西川津遺跡			
			布田遺跡 春日遺跡？ 石台遺跡？		田畑遺跡？ 占本郷遺跡？
	宮の上地区	大日遺跡？	平所遺跡		矢野遺跡？
古墳時代	宮垣地区				
	忌部後原遺跡？ 大角山遺跡 忌部中島遺跡		原の前遺跡 勝負遺跡	大原遺跡 柳遺跡	大東高校校庭遺跡
	宮の上地区 狐廻遺跡		四ツ廻Ⅱ遺跡	平ラⅠ遺跡 高広遺跡	
奈良・平安	蛇喰遺跡 六反田遺跡 大田遺跡		出雲同庁跡		
不明	平床遺跡他多数	タテチョウ遺跡		玉造遺跡他	大倉Ⅳ遺跡他

第41図 出雲における玉作遺跡

に近い松江市大角山遺跡や安来市大原遺跡では、勾玉は研磨を施す前の初期の成形において既に細かな斜離により挟り込まれており、四ツ廻Ⅱ遺跡の手順とは異なっていると思われる。このような差が時期差によるものか、工人の違いによるものか、今後より技法を検討し明らかにする必要がある。

掘立柱建物跡について

今回の調査では、古墳時代後期後半の掘立柱建物跡群を検出した。これは、丘陵裾部の傾斜の緩やかな場所を利用し、広い平坦面を削り出して建てられた建物跡で、この時期の一般的な小集落の様子を窺い知ることができる。建物は、丘陵斜面を背に、並ぶように配されており、地形に即して方位・規格の制約は受けていないと思われる。建物跡は平地式の建物で、柱間1.8～2mの二間程度のものであったと思われる。出土した須恵器より、大谷編年3期～4期という時期が考えられる。また遺物には、移動式竈が出土している。出雲地方平野部では、山間部や特殊な施設の建物を除き、古墳時代後期後半以降の住居跡では、造り付け竈を設けず、炉跡が明確で無い場合が多い。また造り付け竈の変わりに土製の移動式竈が出土することが多く、これを用いて炉としていたことが分かる。四ツ廻Ⅱ遺跡では、移動式竈と共に、土製支脚、甕形土器、甕といった煮沸具が揃って出土しており、その後奈良時代に至る土師器煮沸具の主要な器種が、この時期にはセットとして成立していたことになろう。

以上今回の調査についてまとめたが、周辺にはほぼ同時期と見られる玉作等の遺構も見つかっており、これらを含めた整理が今後必要であろう。

註

- (1) 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会
- (2) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域性」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 1994年
- (3) 『四ツ瀬団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査調査概報 四ツ瀬遺跡』東出雲町教育委員会 1994年
- (4) 出雲地方の玉作については註で取り上げた報告書・論文の他に以下の論考を参考にした。
 - a. 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館 1980年
 - b. 勝部 菊「出雲における玉作り」『古代上檜と玉の謎』新人物往来社 1991年
 - c. 河村好光「攻玉技術の革新と出雲玉つくり」『島根考古学会誌』第9集 島根考古学会 1992年
 - d. 『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅴ玉作関係遺跡』島根県教育委員会 1987年
- (5) 松江市西川津遺跡では弥生時代前期～中期の包含層中より玉未成品が出土。松江市～東出雲町に広がる意宇平野では、布田遺跡や鶴貝遺跡で中期の包含層中より未成品と石筥が出土している。出雲平野では、出雲市矢野遺跡・山畑遺跡・古志本郷遺跡・斐川町大倉Ⅱ遺跡から剥片が出土しており、製作されていた可能性が大きい。
 - a. 『西川津遺跡発掘調査報告書 朝顔川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』島根県教育委員会 1989年
 - b. 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会 1983年
 - c. 『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 布田遺跡Ⅳ』1991年
 - d. 『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅰ』島根県教育委員会 1993年
 - e. 田中義昭他「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『古代文化の展開に関する総合的研究』1989年
 - f. 『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』出雲市教育委員会 1989年
 - g. 『出雲市埋蔵文化財調査報告書』出雲市教育委員会 1994年
- (6) 「平所遺跡」『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財調査報告書ⅠⅡ』島根県教育委員会 1977年
- (7) 山本 清・寺村光晴『史跡出雲玉作跡 一発掘調査概報一』玉湯町教育委員会 1972年
『史跡出雲玉作跡 一宮の上地区一 第1次発掘調査概報』玉湯町教育委員会 1984年
『史跡出雲玉作跡 一宮の上地区一 第2次発掘調査概報』玉湯町教育委員会 1985年
- (8) 『白コクリ遺跡・大原遺跡』島根県教育委員会 1994年
- (9) 『平ラⅡ遺跡・古佐山根1号墳・穴神横穴墓群』1995年
- (10) 東森市良「大東高校グラウンド遺跡」『日本考古学年報』26 1975年
- (11) 『大角山遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会 1988年
- (12) 註(4)の各遺跡

四ツ淵Ⅱ遺跡出土遺物観察表

押収番号	器種	法 量			胎 土	装 成	色 調	手法の特徴	出土地点	備 考
		口径	底径	器高						
第20図	土師器 壺	23.2			石英、長石など1mm以上の砂粒含む	良好	褐色	外面ヨコナデ、縦方向のハケ	SK05	
第21図1	須恵器 提 瓶	14.0	36.5		2mm以下の砂粒含む	良好	淡黒灰色	外面カキメ回転ナデ 内面回転ナデナデ	SK01	
第21図2	須恵器 提 瓶	9.8	28.2		白色砂粒含む	良好	青灰色	外面カキメ回転ナデ 内面回転ナデナデ	SK01	
第21図3	須恵器 杯 身	13.2	5.25		緻密 白色砂粒含む	良好	灰色	底面回転ヘラケズリ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SK01	
第21図4	須恵器 杯 身				普通 白色砂粒含む	良好	灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデ	SK01	
第21図5	須恵器 杯 身	12.1	5.1		緻密 砂粒含む	良好	淡灰色	底面回転ヘラケズリ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SK01	
第21図6	須恵器 杯 身	12.0			砂粒含む	良好	暗灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデ	SK01	
第22図1	須恵器 壺				普通 白色砂粒含む	やや不良	暗黒灰色 褐色	内外面タタキ	SK01	
第22図2	須恵器 壺				普通 白色砂粒含む	やや不良	紫褐色 褐色	内外面タタキ	SK01	
第22図3	須恵器 壺				普通 白色砂粒含む	やや不良	内紫褐色 外緑褐色	内外面タタキ	SK01	
第22図4	須恵器 壺				普通 白色砂粒含む	やや不良	紫褐色 断面灰色	内外面タタキ	SK01	
第22図5	土師器 高 杯	18.0			やや密 白色砂粒含む	良好	明褐色	外面ヨコナデ	SK01	外面に黒底
第22図6	土師器 高 杯	17.4			普通 白色砂粒含む	良好	黄褐色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデ	SK01	
第22図7	土師器 高 杯	18.6			やや密 白色砂粒含む	良好	明褐色	外面ヨコナデ ハケメ 内面ヨコナデヘラミギキ?	SK01	外面に黒底
第22図8	土師器 高 杯				石英、長石粒含む 茶褐色粘土粒含む	良好	明褐色	外面ハケメ	SK01	
第22図9	土師器 高 杯				砂粒含む	良好	明褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデ	SK01	
第22図10	土師器 高 杯				砂粒含む	良好	明褐色	外面ヨコナデ 内面ナデ?ミギキ?	SK01	
第22図11	土師器 高 杯				密 砂粒含む	良好	明黄褐色		SK01	
第22図12	土師器 高 杯	11.6			やや密 砂粒含む 茶褐色粘土粒含む	良好	明黄褐色	外面ヨコナデ? 内面ハケメヨコナデ	SK01	
第22図13	土師器 高 杯				やや密 砂粒含む	良好	明黄褐色 脚内黒色	外面ヨコナデ? 内面ヘラケズリ後ヨコナデ	SK01	
第22図14	土師器 高 杯				やや密 白色砂粒含む	良好	淡黄色	外面ヨコナデハケメ 内面ヘラナデ	SK01	
第23図1	土師器 壺	19.2	23.7		普通 白色、石英 長石粒含む	良好	緑褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデヘラケズリ	SK01	外面にスス付着
第23図2	土師器 壺				砂粒多く含む	良好	明褐色 黄褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデヘラケズリ	SK01	外面に黒底
第23図3	土師器 壺	15.4			普通 白色、石英 長石粒含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデヘラケズリ	SK01	外面にスス付着
第23図4	土師器 壺	12.6			白色、半透明砂粒含む	良好	褐色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデヘラケズリ	SK01	
第23図5	土師器 壺	15.0			普通 白色、半透明 砂粒含む	良好	褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデヘラケズリ	SK01	外面にスス付着
第23図6	土師器 壺	17.1			3mm程度の石英長 石粒含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデヘラケズリ	SK01	
第23図7	土師器 壺	16.0	11.0	13.3	白色砂粒含む	良好	褐色	外面ヨコナデヘラナデ 内面ヨコナデヘラケズリ	SK01	

採掘番号	号 種	法 量			土 質	成 成	色 調	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
		口 径	底 径	層 高						
第23回8	土層器 壺				やや密 細かな白 色、石英粒含む	良好	明褐色	外蓋ヨコナデ 内蓋ヨコナデヨビオサエ	SB01	
第23回9	土層器 壺	23.5			石英、長石粒多く 含む	良好	明褐色	外蓋ヨコナデ 内蓋ヨコナデヘラケズリ	SB01	
第28回1	須恵器 坏 身	11.3	4.7		白、黒色砂粒含む	良好	青灰色	底部回転ヘラケズリ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	SB01	
第28回2	土層器 小形壺	9.0	8.4		5mm以下の砂粒含 む	良好	淡黄褐色	外蓋ヨコナデハケメ 内蓋ヨコナデケズリ	SB01	
第29回1	須恵器 坏 壺	12.6	3.5		普通 白、黒色砂 粒含む	良好	暗青灰色	天井部ヘラケズリ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	SB02	
第29回2	須恵器 高 坏				1mm以下の砂粒含 む	良好	淡青灰色	外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	SB02	
第29回3	土層器 壺	15.0			やや粗 白、黒色 砂粒含む	良好	明褐色	外蓋ヨコナデ 内蓋ヨコナデケズリ	SB02	
第29回4	土層器 壺	26.5			粗 石英粒など多く 含む	やや不良	淡黄褐色	外蓋ヨコナデハケメ 内蓋ヨコナデケズリ	SB02	
第30回1	須恵器 坏 壺	12.6	4.1		白、黒色砂粒含む	良好	黄褐色	天井部ヘラケズリ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	SB02	
第30回2	須恵器 坏 身	11.6	4.7		密 黒色砂粒含む	良好	青灰色	天井部ヘラケズリ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	SB02	
第30回3	土層器 壺	16.4			3mm以下の砂粒含 む	良好	明褐色	外蓋ヨコナデハケメ 内蓋ヨコナデケズリ	SB02	外蓋にスス付着
第30回4	土層器 壺	12.7			普通 5mm以下の 白色砂粒含む	良好	棕色	外蓋ヨコナデハケメ 内蓋ヨコナデケズリ	SB02	
第30回5	土層器 壺	14.6	17.5		やや粗 石英、長 石を多く含む	良好	黄褐色	外蓋ヨコナデハケメ 内蓋ヨコナデケズリ	SB02	
第31回1	須恵器 坏 壺	12.8	4.8		白色砂粒多く含む	良好	灰色	天井部ヘラケズリ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回2	須恵器 坏 壺	13.2	4.5		2mm以下の砂粒含 む	良好	淡青灰色	天井部ヘラケ切り後ナデ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回3	須恵器 坏 壺	12.6	4.3		緻密 白色砂粒含 む	良好	青灰色	天井部ヘラケ切り後ナデ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回4	須恵器 坏 壺	13.0	4.3					天井部ヘラケ切り後ナデ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回5	須恵器 坏 壺	12.4	4.2		白色砂粒多く含む	良好	淡青灰色	天井部ヘラケ切り後ナデ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回6	須恵器 坏 身	10.0	3.0		1~2mmの砂粒含 む	良好	灰色	底部ヘラケ切り後ナデ 外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回7	須恵器 高 坏	10.6	9.8		2mm以下の砂粒含 む	良好	淡青灰色	外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回8	須恵器 高 坏	9.8	9.0		2mm以上の砂粒多 く含む	良好	褐色	外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回9	須恵器 高 坏	18.0			緻密 砂粒少量含 む	良好	暗青灰色	外蓋回転ナデ 内蓋回転ナデナデ	土器崩りA	
第31回10	須恵器 壺	7.9	13.1		普通 3mm以下の 白色砂粒含む	良好	青灰色	外蓋ヘラケズリ回転ナデ 内蓋回転ナデ	土器崩りA	
第31回11	須恵器 壺				密 白色砂粒含む	良好	灰色	外蓋ヘラケズリ回転ナデ 内蓋回転ナデ	土器崩りA	
第31回12	須恵器 平 壺	6.5	15.2		1mm以下の砂粒含 む	良好	青灰色	外蓋ヘラケズリ回転ナデ カキメ 内蓋回転ナデ	土器崩りA	
第31回13	土層器 壺	26.9	13.6	24.8	石英、長石粒含む	良好	淡黄褐色	外蓋ヨコナデハケメ 内蓋ヨコナデヘラケズリ	土器崩りA	
第32回1	土 支 脚				粗 砂粒多く含む	良好	黄褐色		土器崩りA	黒炭あり

詳細番号	器種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
		口径	底径	器高						
第32図2	土支 製脚				粗 白色砂粒多く含む	良好	淡黄色		土器溜りA	
第32図3	土支 製脚				粗 白色砂粒多く含む	良好	黄褐色	ヘラケズリ長部分的にナデ	土器溜りA	
第32図4	土師器 甕	18.9			石英、長石粒、褐色粘土を含む	良好	黄褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデヘラケズリ	土器溜りA	外面にスス付着
第32図5	土師器 高 杯	22.2			普通 5mm以上の白色砂粒含む	良好	明褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデハケメ	土器溜りA	
第33図1	土支 製脚				砂粒多く含む	良好	黄褐色		土器溜りA	
第33図2	土支 製脚				粗 砂粒多く含む	良好	褐色	ナデ仕上げ	土器溜りA	黒斑あり
第34図1	須恵器 甕	14.0			白色砂粒含む	不良	黄褐色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	土器溜りB	
第34図2	須恵器 高 甕	12.9	4.4		1~2mmの白色砂粒含む	良好	灰色	天井ヘラ切り後ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデ	土器溜りB	
第34図3	須恵器 高 甕	13.0	4.3		普通 5mm以下の白色砂粒含む	良好	淡青灰色	天井ヘラ切り後ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデ	土器溜りB	ヘラ記号
第34図4	須恵器 甕	11.4			白色砂粒含む	良好	灰色	内外面回転ナデ	土器溜りB	
第34図5	須恵器 甕	11.2			白色砂粒含む	良好	青灰色	内外面回転ナデ	土器溜りB	
第34図6	須恵器 高 甕	14.4			普通 白色砂粒含む	良好	青灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	土器溜りB	
第34図7	須恵器 甕				白色砂粒含む	良好	白灰色	内外面タタキ	土器溜りB	
第34図8	須恵器 甕				密 白色砂粒含む	良好	灰色	内外面タタキ	土器溜りB	
第34図9	須恵器 甕				密 砂粒含む	良好	灰色	内外面タタキ	土器溜りB	
第34図10	須恵器 甕				密 白色砂粒含む	良好	灰色	内外面タタキ	土器溜りB	
第34図11	須恵器 甕				密 白色砂粒含む	良好	灰色	内外面タタキ	土器溜りB	
第34図12	土師器 甕	30.0			粗 大粒の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデケズリ	土器溜りB	
第34図13	土支 製脚				粗 砂粒多く含む	良好	褐色		土器溜りB	
第34図14	土支 製脚				石英、長石粒など含む	良好	淡黄褐色		土器溜りB	
第35図1	須恵器 高 甕	13.2	4.5		普通 石英、長石粒多く含む	やや不良	淡灰色	天井回転ヘラケズリ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	土器溜りC	
第35図2	須恵器 高 甕	12.9	4.1		白色砂粒含む	良好	淡青灰色	天井回転ヘラケズリ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	土器溜りC	
第35図3	須恵器 高 甕	11.9	3.7		白色砂粒含む	良好	暗青灰色	天井回転ヘラケズリ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	土器溜りC	
第35図4	須恵器 甕	13.0	4.1		1~2mm以内の砂粒含む	良好	白灰色	底部回転ヘラケズリ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	土器溜りC	
第35図5	土師器 甕	20.8	10.4	24.6	石英など砂粒多く含む	良好	明褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデケズリ	土器溜りC	
第35図6	土師器 甕	27.0			石英など砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデケズリ	土器溜りC	
第36図	土師器 かまど									
第37図1	土師器 甕	15.9			1mm大の砂粒多く含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデケズリ	土器溜りC	
第37図2	土師器 甕	14.2			2~4mm程度の砂粒多く含む	やや不良	茶褐色	外面ヨコナデハケメ 内面ヨコナデケズリ	土器溜りC	

検出番号	器種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
		口径	底径	器高						
第37図3	土師器 壺	20.8			1mm程度の砂粒多く含む	良好	橙茶色	外産ヨコナダハケメ 内産ヨコナダケズリ	土器層りC	
第37図4	土師器 高 杯	10.0			石灰など白、黒色砂粒を含む	良好	黄褐色	外産ヨコナダ 内産ヨコナダハケメ	土器層りC	
第38図1	須恵器 坏 蓋	14.6		4.5	2mm以下の白色砂粒含む	良好	白灰色	天井回転ヘラケズリ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図2	須恵器 坏 蓋	11.6		4.0	緻密 砂粒含む	良好	暗灰色	天井回転ヘラケズリ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図3	須恵器 坏 蓋	13.2		4.0	緻密	良好	淡灰色	外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	ヘラ記号
第38図4	須恵器 坏 身	11.6		3.6	2mm以下の白色砂粒含む	良好	暗灰色	天井回転ヘラケズリ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図5	須恵器 坏 身	10.6		3.45	普通 白色砂粒含む	良好	青灰色	底部ヘラ切り後ナダ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図6	須恵器 坏 身	11.1		3.8	白色砂粒を多く含む	良好	白灰色	底部ヘラ切り後ナダ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図7	須恵器 坏 身	14.8		2.6	青 白色砂粒を多く含む	良好	灰色	天井回転ヘラケズリ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図8	須恵器 壺				普通 白色砂粒を含む	良好	青灰色	底部静止ナダ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図9	須恵器 坏 蓋	13.2		3.9	白色砂粒含む	良好	暗灰色	天井回転ヘラケズリ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図10	須恵器 坏 身	13.0		3.85	白、黒色砂粒を多く含む	良好	青灰色	天井回転ヘラケズリ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図11	須恵器 高 杯	12.5			密 白色砂粒含む	良好	青灰色	天井回転ヘラケズリナダ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図12	須恵器 高 杯	15.1	11.1	9.7	白色砂粒含む	良好	青灰色	天井回転ヘラケズリ 外産回転ナダ 内産回転ナダナダ	その他の包含層	
第38図13	須恵器 坏 身	13.6	8.8	5.3	緻密 砂粒を極少量含む	良好	青灰色	天井回転系切り 内外産回転ナダ	その他の包含層	
第38図14	須恵器 提 瓶				白色砂粒含む	良好	淡灰色	外産タキ後ヨコナダ 内産タキ後ナダ消し	その他の包含層	
第38図15	土師器 壺	10.2			白色砂粒含む	良好	明褐色	外産ヨコナダハケメ 内産ヨコナダケズリ	その他の包含層	
第38図16	土師器 壺				やや粗 白色砂粒含む	良好	黄褐色	外産ヨコナダハケメ 内産ヨコナダ	その他の包含層	外産層底
第38図17	土師器 壺	5.3		6.5	普通 石灰など砂粒含む	良好	明褐色	外産ヨコナダナダ指環王瓶 内産ヨコナダ指環王瓶	その他の包含層	
第38図18	土師器 高 杯	22.0			やや粗 砂粒含む	良好	明黄褐色	外産ヨコナダ後ヘラミガキ 内産ヨコナダ後ヘラミガキ	その他の包含層	
第38図19	土師器 高 杯				やや粗 白色粒多く含む	良好	褐色	内外産ヨコナダ?	その他の包含層	内外面すす付着
第38図20	土師器 高 杯				普通 砂粒、茶褐色粘土多く含む	良好	褐色	外産ハケメ後ヨコナダハケメ 内産ヨコナダ	その他の包含層	
第38図21	土師器 高 杯	12.7			3mmの白色砂粒茶褐色粘土含む	良好	明褐色	外産ヨコナダ 内産ヨコナダハケメ	その他の包含層	
第38図22	土師器 壺	19.4		29.1	5mm以上の石灰石層を含む	良好	明褐色	外産ヨコナダハケメ 内産ヨコナダケズリ	その他の包含層	
第40図1	土師器 壺	12.2			普通 白、黒、半透明の砂粒含む	良好	外明黄褐色 内黄褐色	外産ヨコナダハケメ 内産ヨコナダケズリ	その他の包含層	外面にすす付着
第40図2	土師器 壺	13.7			やや粗 3mm以下の砂粒含む	良好	黄褐色	外産ヨコナダハケメ 内産ヨコナダケズリ	その他の包含層	外面にすす付着

第4章 林廻り遺跡

第1節 調査の経過と概要

林廻り遺跡は、島根県八束郡東出雲町揖屋字林廻りに所在する。

遺跡は、現在の中海岸から約1km南へ入った低丘陵の斜面に位置する。槻ノ屋川の流れる谷の本筋から離れ、小さく入り込んだ谷に面しており、眼前には、小さな谷水田を隔ててすぐ丘陵が迫っている。発掘調査によって遺構が確認されたのは南向きのやや急な斜面で、水田部との比高差が約5mと、水田に近い場所である。調査前の表面観察では、不自然な窪みが数箇所認められたため、立地からも横穴墓が存在している可能性が考えられたが、調査の結果、この窪みは奈良時代末から平安時代の建物跡の痕跡であったことが明らかになった。

現地調査は、平成4年度に実施した試掘調査の結果を受けて、平成5年7月10日から開始し、10月9日まで実施した。この間、現地説明会を開催し、広く一般の見学者に公開する機会を持った。

調査では、奈良時代末から平安時代の掘立柱建物跡3棟と、性格不明の溝状遺構3条および土坑3を検出した。



第42図 林廻り遺跡調査区位置図 (1/2000)

A-A'ライン土層図



- A-A'ライン土層断面
- 第1層 黒色珪質土
 - 第2層 褐色土、やや軟質、粘質のある土、土器層を含む。
 - 第3層 褐色土、堅く締まる、堆山層を含む。
 - 第4層 やや赤味を帯びた黄褐色土、3と同質。
 - 第5層 4と同質。
 - 第6層 白濁黄褐色土、人頭大以上の大型の堆山層多く含む。
 - 第7層 暗褐色土、軟質。

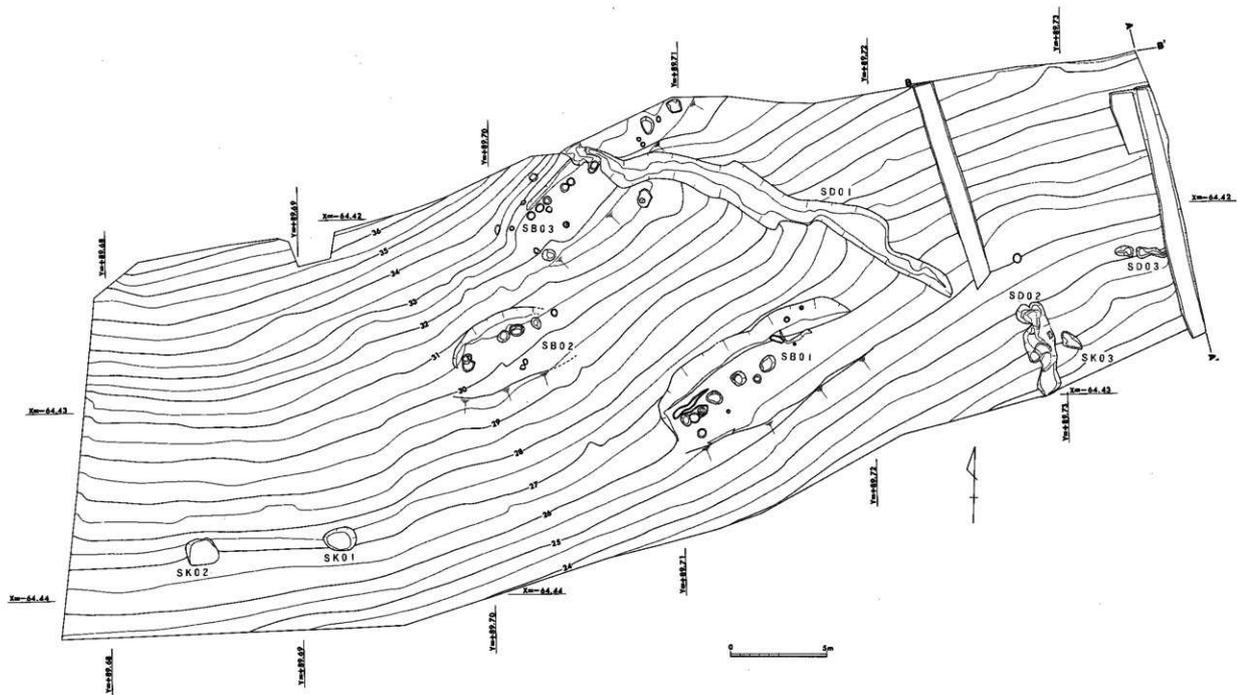
B-B'ライン土層図

- 第1層 色珪質土
- 第2層 赤褐色土、やや軟質、粘質のある土、土器層を含む。
- 第3層 黒褐色土
- 第4層 くずんだ茶褐色土
- 第5層 暗褐色土、3cm以下のジャリ石を多く含む、崩小片土層を含む。
- 第6層 明褐色土、硬土面。

B-B'ライン土層図



第43図 林廻り遺跡調査区土層図(A-A'・B-B') (1/80)



第44図 林廻り遺跡調査区全体図 (1/200)

第2節 遺構について

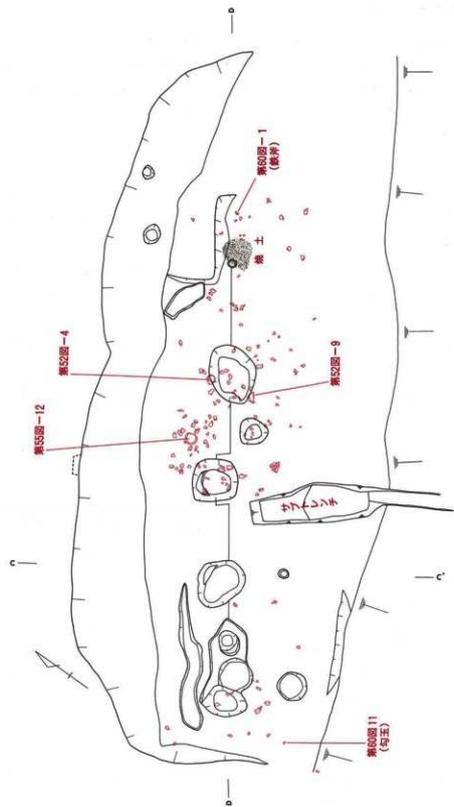
調査地は、南向きの丘陵斜面で、丘陵に囲まれているため眺望はあまり良くない。ここでは斜面を掘り込んで作った平坦面に掘立柱建物跡（SB01～04）が検出された。これらの平坦面はそれぞれ独立しており、4か所で確認できた。遺構はその他に性格不明の溝状遺構3条（SD01～03）、土坑3基（SK01～03）を検出した。以下、それぞれの遺構について詳しく述べる。

SB01（第45図、第46図）南向きのやや急な斜面を、大きくL字状に掘り込んで作った平坦面に建てられた掘立柱建物跡である。平坦面は、およそ東西方向に細長く伸びており、本来は盛土によって谷側に拡張されていたと考えられる。現状では盛土は流失しており、本来の平坦面の規模は不明である。柱穴の検出状況から、建物跡は、建て替えが行われたと見られる。遺物は、8世紀後半から9世紀の須恵器坏身、皿、壺、甕片や土師器甕片、甕片、土製支脚などの土器（第52～58図）と、斧、釘などの鉄器（第60図1, 3, 4～10）が出土している。遺物より、このころ継続的に建物が存在していたと考えられる。

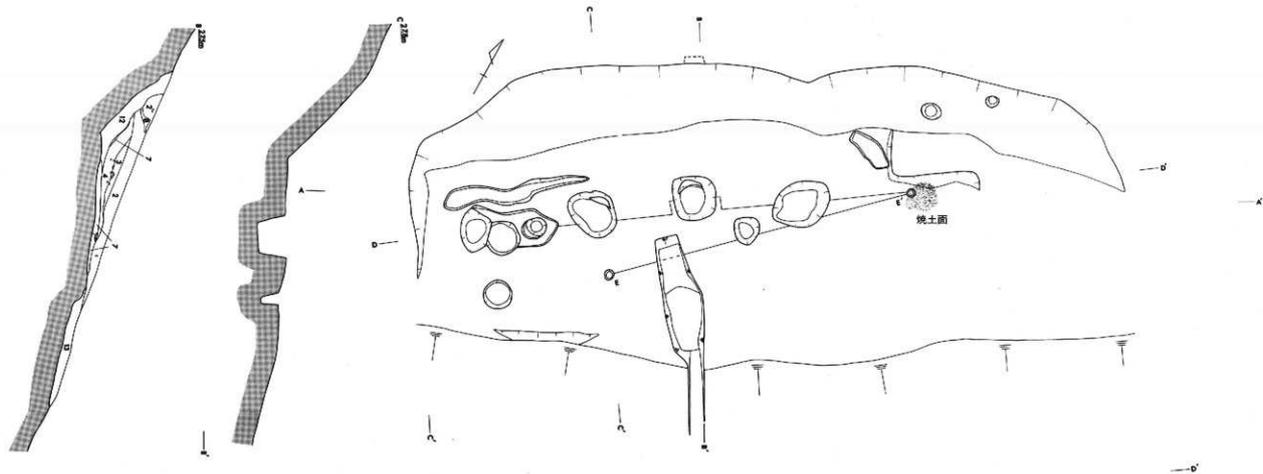
平坦面は、地山を大きく削り込んで造られ、等高線に沿う方向に細長く延びる。現存で長さ10.8m、幅2.4～3.8mを測り、柱穴、溝、焼土面1を検出している。林廻り遺跡で検出した建物跡を伴う平坦面のうちでは、最も低い場所に位置し、平坦面での標高は約26mである。平坦面の建物跡は、直径や深さの異なる柱穴列が（D-D'、E-E'）2方向に認められることから、平坦面上には大きく分けて、新旧二時期の建物跡が重なっていると考えられるが、層位によってこれらの新旧を確認することはできなかった。柱穴列D-D'は、ほぼ平坦面の長辺と同じ方向にあり、直径40～55cmの柱穴が4個並んでいる。柱穴は何れも重複しており、大きく柱の位置を替えること無く立替えが行われたものであろう。柱穴列E-E'は平坦面の長軸の方向とは異なる方向に直径20cmと小さい3個の柱穴を検出した。これらの柱穴列は、谷側に対応するものが不明であり、建物の構造を想定することは困難である。平坦面の規模から考えるとおそらくこれらが桁行に当たるものであろう。平坦面の東側には、柱穴の掘り込まれていない空地があり、緩い傾斜を持って自然傾斜面へとつながっている。溝は、地山に掘り込まれたものを壁際に2条検出したが、幅10～20cm深さ5～9cmと非常に浅いものである。焼土面は、地山面より10cm上で検出した。浅い掘り込みの内側の壁が赤褐色に焼けていたもので、内部には炭を多く含んだ軟らかい黒色土が堆積していた。これは炉跡と思われる。出土している移動式甕を用いて煮炊きを行ったものと考えられる。

焼土面を検出した面（第46図第4層上面）では、完形品を含む須恵器の坏身、皿、壺や土師器甕片等の土器と共に鎌、斧、釘等の鉄製品が出土した土器溜りが認められる。この土器溜りは、この平坦面上での建物の廃絶と共に廃棄されたものと見られ、これらより平坦面の廃絶時期が8世紀後半～9世紀初頭と考えられる。地山直上で、土器溜り以下の層位からも土器は出土したが、小片が多く、この年代を大きく遡るものは認められない。

平坦面西南の掘り込みの外側では、地山からやや浮いた位置の黒色土層中（第46図第1層）より、黄色がかつためのう製勾玉の完形品（第60図11）が1点出土した。埋土中よりめのうの割片が1点出土したが、人為による割片かどうかは不明であり、その他に玉作関係の遺物は出土していない。

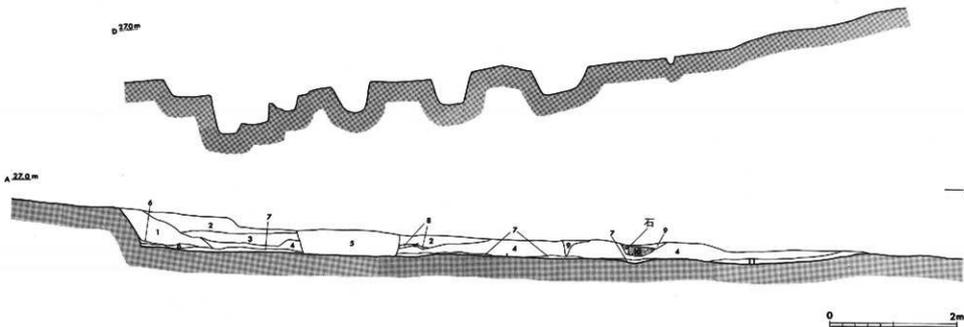


第45図 林廻り遺跡SB01遺物出土状況 (1/60)

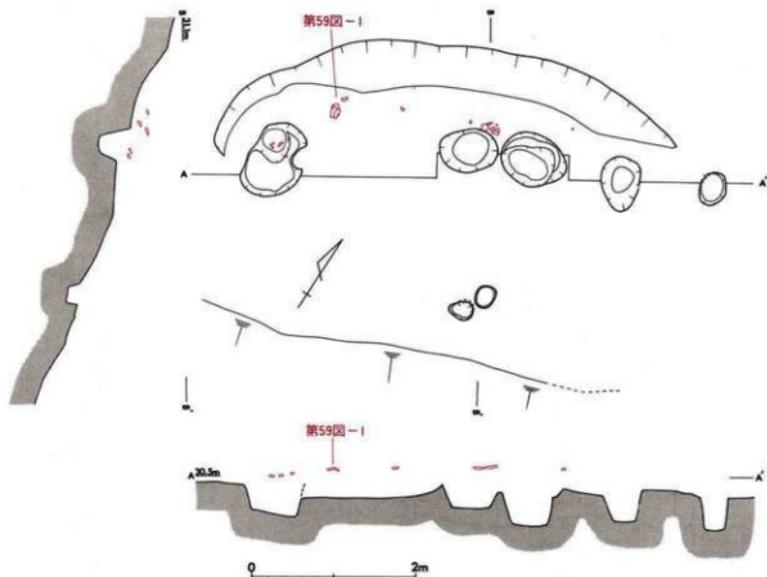


土層観察

- 第1層 やや黄濁した茶褐色土。土器、小片含む。堅く締まっており1cm以内の小礫含む。
 第2層 1よりややくすんだ黄褐色土。堅く締まっている。稀に炭小片含む。土器小片あり。
 第3層 黒褐色土。やや軟質。炭片を含む土器あり。
 第4層 やや黄濁した茶褐色土。2と似ているがやや軟質。土器なし。
 第5層 黒褐色。52年度の第2トレンチ埋めもどし土。
 第6層 黒色土。粘質強い。
 第7層 くすんだ黄褐色土。
 第8層 明るい黄褐色土。炭なし。土器なし。
 第9層 黒褐色土。
 第10層 黒褐色土。混炭土層。炭を多量に含む。下層には単大の焼石あり。土器あり。壁体は赤く焼けている。(焼土面)
 第11層 黄褐色。堅くよく締まっている。径2cm以内の小礫含む。遺物なし。
 第12層 淡褐色土。締まりなく。軟質。土器含まず。傘穴までの地山礫含む。
 第13層 くすんだ黄褐色土。粘質あり。地山礫含む。(=盛土層?)



第46図 林廻り遺跡SB01実測図 (1/60)

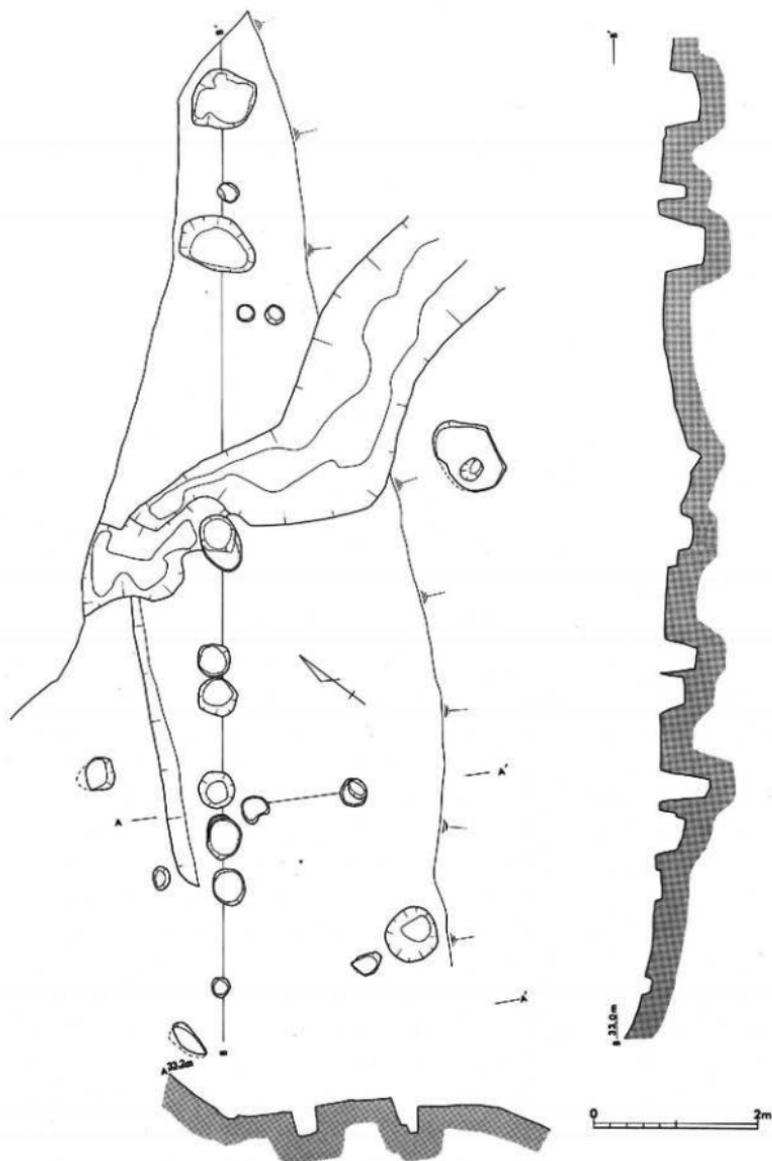


第47図 林廻り遺跡SB02実測図(1/60)

SB02(第47図) SB01より約5m上位の、標高約30.5mの位置で検出した。遺存状況は悪く、わずかに平坦面の一部と、壁際に並んだ柱穴を検出した。平坦面は現状では水平な面はほとんど遺存しておらず、本来こうした緩く傾斜する面の上に盛土され平坦面が作られていたのか、SB01と同様に地山を水平に削り出していたが後世流失したものか土層観察では確認できなかった。柱穴と見られるピットは壁際から離れた位置で直径20cm深さ10cmのものが、少なくともこの位置までは平坦面が形成されていたものと見られる。柱穴には直径30cmを越える比較的大きいものと、直径20cm以下の比較的小さいものがあり、重なりあっていることより何度か立替えが行われたものと思われる。柱穴は、複雑に重なり合い、不規則な間隔で検出されているため、建物跡の構造を想定することは難しい。ここでは焼土面は検出していない。遺物は、地山面から15cm上で、遺構を覆う炭小片を含む暗黄褐色土層中より須恵器・土師器の小片が出土(第59図)しており、これらの時期は、SB01とほぼ同時期の奈良時代後半～平安時代のものである。ここからは土器以外の遺物は出土していない。

SB03(第48図) 調査区の北端、標高32～33mに位置する。検出した掘立柱建物跡の中では最も高い位置にある。SB01と同様に、等高線に沿う方向に細長く平坦面が確認された。溝状遺構SD01により平坦面の中央付近で二分されているが、SD01はこの平坦面に関連するものではなく後世のものであり、本来は同一の平坦面であったと思われる。平坦面の北側は、調査区外へさらに続いているものと見られ、これをあわせると、SB01の平坦面とほぼ同じぐらいの規模を有するものと思われる。

平坦面上では、大小16個の柱穴を確認したが、焼土面は確認していない。遺物は、SI01とは対照的



第48図 林廻り遺跡SB03実測図 (1/60)

に、埋土中を含めほとんど出土せず、わずかに土師器・須恵器の小片が柱穴埋土中認められたのみであった。遺構や遺物から他の掘柱建物跡と同じ時期のものと考えられる。

SB04 (第44図) 調査区北壁において柱穴の断面と焼土面を検出した。柱穴には形態の違う2種類が見られる。明瞭な平坦面は検出していないが、水平の堆積が見られ、地山以上に盛土を行い床面が形成されていたと考えられる。地山面に焼土面があり床面として地山直上から須恵器、土師器が出土している。これらにも高台の付く須恵器坏や、底部糸切り底の須恵器坏などを含んでおり、他の建物跡とほぼ同じ時期のものと思われる。

SD01 (第51図) 調査区の中央に等高線に直行する方向に大きく深く地山が裂けたような痕跡が認められる。遺構名を付けたが、人為的な掘り込みであるか、地震や地すべりといった自然現象によるものかは判断し得なかった。調査前より、橙色の地山が露出しており、調査区外に続いている。

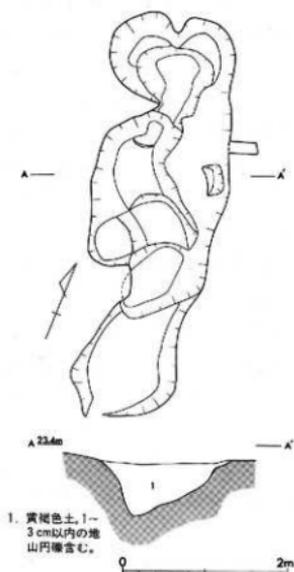
SD02 (第49図) 等高線に直行する方向に検出した溝状遺構。遺構内に堆積していた黄褐色土中からは炭化物の小片が混入し、遺物は出土していない。人為的に掘り込まれたものか自然現象によるものかは不明である。地山面から深さ0.5~1.0mのV字状を呈しているが、不整形に段を成す部分がある。

SD03 (第50図) 調査区の東端にあり、一部がトレンチによって切られている。幅0.5m深さ0.2mの小さい溝で、内部には、軟質の暗褐色土が堆積し、磨滅の著しい土師器の細片が数点出土しているが、時期や性格は不明である。

SK01 (第50図) 地山面に掘り込まれた直径1.1m深さ0.1cmの楕円形の浅い土高である。底は地山の傾斜と同じく、区内部には締まりのない黄褐色が堆積していた。遺物は出土しておらず時期・性格は不明である。

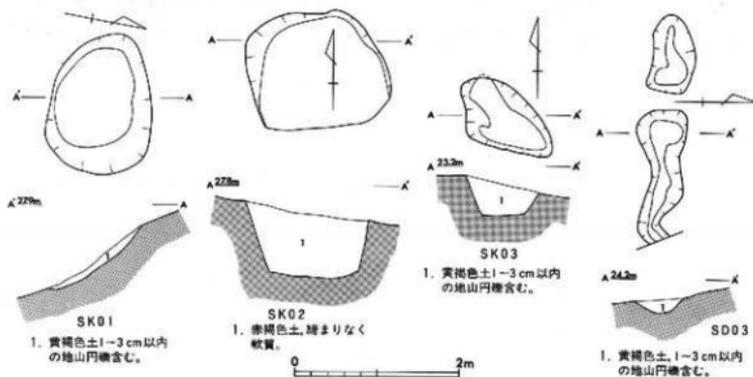
SK02 (第50図) SK01の西側にある地山を掘り込んだ土高である。規模は直径1.5m深さ1.5mで、底はほぼ水平な不正円形である。谷側は流失しており不明である。内部には黄褐色土が堆積していたが、遺物は出土しておらず、性格は不明である。

SK03 (第50図) SD02と並んで検出した土高で、不正形である。底は比較的整い平坦である。内部に堆積した土は暗褐色土で、SD02とは異なる。遺物は認められず、性格・時期ともに不明である。



1. 黄褐色土、1~3cm以内の地山円礫含む。

第49図 林廻り遺跡SD02実測図 (1/60)



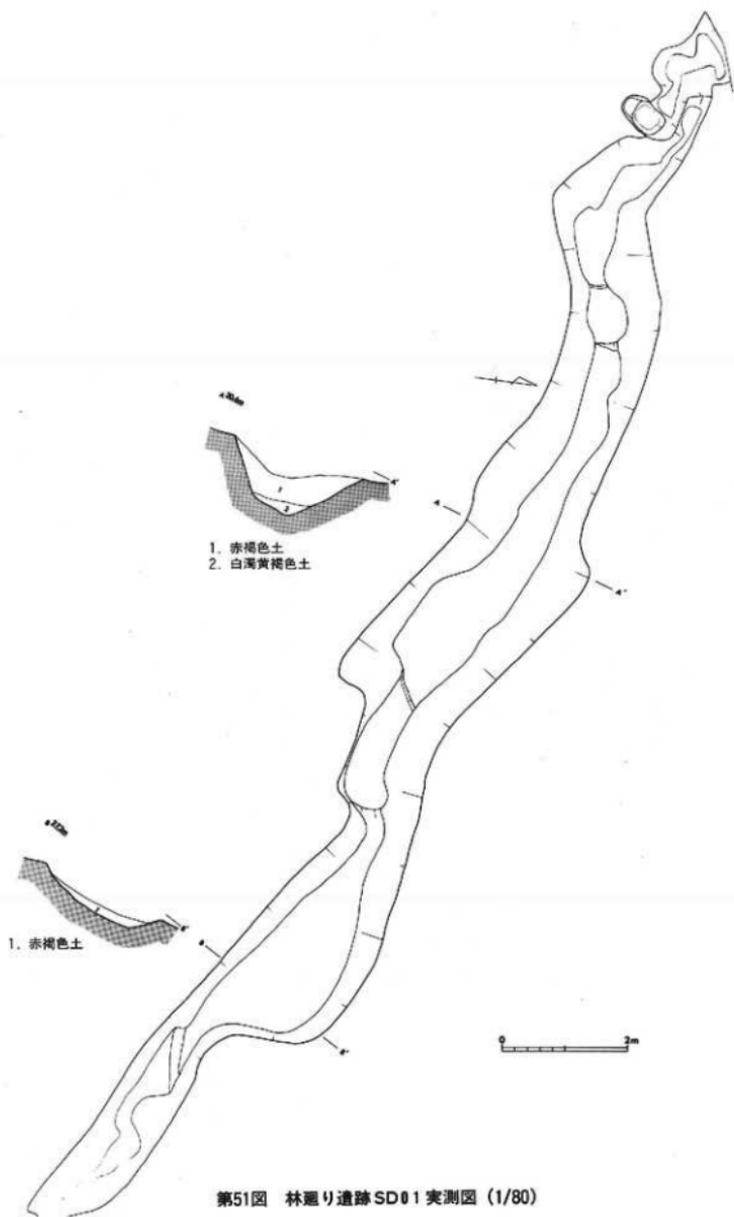
SK01
1. 黄褐色土1~3cm以内の地山円礫含む。

SK02
1. 赤褐色土、埴まりなく軟質。

SK03
1. 黄褐色土1~3cm以内の地山円礫含む。

SD03
1. 黄褐色土、1~3cm以内の地山円礫含む。

第50図 林廻り遺跡SK01, 02, 03, SD03実測図 (1/60)



第51図 林廻り遺跡SD01実測図 (1/80)

第3節 遺物について

本遺跡では、土器、鉄製品、めのう製勾玉が出土している。多くは掘立柱建物跡に伴うもので、特にSB01からは須恵器坏身、皿、壺を中心とする土器がまとめて出土している。SB03・04ではほとんど遺物が出土しておらず、図化不可能であったが、遺構の状況などから考えるとSB01と同時期のものと考えられる。遺構ごとに遺物の特徴を述べる。

SB01出土遺物（第52～58図）

地山面より約10～20cm上の黒色土層中で、まとめて出土している。特に須恵器は完形品を含むものも多数含んでいる。坏・皿は出土量も多く、形態の異なるものが出上している。また土器ほ他に斧、釘、鏃、小刀等の鉄製品や、勾玉1点が出土している。以下それぞれに述べる。

須 恵 器（第52～57図）

坏形、皿形、壺形といった供膳具が多く、少量の變形土器片が出土している。まとまった出土量のある坏は、高台の有無や大きさから大きくA・B・Cの三類に、皿は高台の有無でA・Bの二類に分類した。これらに類似する須恵器の他の遺跡での出土例は多く見られ、編年研究も試みられている。出雲地方では松江市大草町出雲国庁跡出土土器による出雲国庁編年や、柳浦氏による編年試案が提示されている。これらによると、前者では国庁編年では4～5型式、柳浦編年案では第3～4式に属し、概ね8世紀後半から9世紀前半の実年代観が与えられている。

以下分類ごとに特徴を述べる。

坏 形 土 器（第52図～第54図9）

高台の有無や、形態の特徴から大きくA・B・Cの三類に大別できる。

A 類（第52図1～10） 底部に高台の付くもので、法量により小・中・大の差がある。高台の付く位置も、底部の外側によったものとやや内側に付くものの差が認められる。小型品（第52図1～7）は、口径11.9～13.6cm器高4.8cm以下で、形態的には坏部の浅いもの（1～3）、やや深いもの（4～7）がある。高台の付く位置は、3が内側に寄っているのを除き、底部の端に寄る傾向にある。底部は回転系切り後未調整で高台が付いているものと、系切り痕がナデ消されているものの両者が見られる。中型品（第52図8）は口径14cm器高6.0cmで、底部回転系切り後未調整である。大型品（第52図9～10）は口径17cm以上器高8.0cm以上で、底部には系切り痕が残る。色調や胎土は大きく逸脱するものは無く、概ね灰色からやや黒みの強い青灰色である。

B 類（第52図11～15、第53図、第54図1～2） 底部に高台が付かず、坏部の立上りが内湾して立上るものである。底部は、回転系切り後未調整のものが大半を占めるが、静止系切りのもの1点（第52図2）、切断後ナデ調整を施しているもの1点（第52図2）も認められる。形態は、器高が2.6cmと低く皿状のもの（第52図11）を除き、器高3.5cm以上である。坏部の内湾には、大きく湾曲しているものと、内湾が緩く立ち上がるものの差が認められ、口径端部が小さく外側に飛び出す強いアクセントを持つものと、自然に内傾しているものの両者が見られる。焼成や色調は、A類に比べてや

や焼きの甘い淡灰色や黄褐色のものが多く含まれている。また、部分的に色調が橙色や褐色と大きく異なるものが見られ、焼成時の重ね方によるものと思われる。

C 類 (第54図3～8) 底部に高台が付かず、坏部が外傾し直線的に立ち上がるものである。小型のものと中型のものがあるが、形態は単純で個体差は少ない。器厚はやや厚めのもの (第54図5, 8) と非常に薄く整っているもの (第54図3, 4, 6, 7) があり、前者は暗青灰色、後者は色調が橙色～褐色のものが目立ち、両者には焼成に差があるものと思われる。底部はヘラ切り離しの後ナデ調整のものが1点 (第54図8) あるが、他はすべて回転系切り後未調整である。

D 類 (第56図5) 完形品であり、この形態のものでは1個体のみ出土した。口縁部が特徴的で、坏の立上りに対し、ほぼ水平に折り曲げられ面を作っている。器厚は厚い。底部は静止系切り痕を明瞭に残している。色調は青灰色で焼成も良好である。

E 類 (第56図6) 口縁部が大きく外傾する形態で、口唇部が玉状に膨らんでいる。器壁はむら無く薄く整えられ、底部は回転系切り後未調整である。色調は青灰色で、現存部のみではむら無く良好な焼成である。

F 類 (第56図7) 法量はE類と近似しているが、口縁端部にはアクセントが無い。やや外反気味に立上り、器壁はやや厚い。底部は回転系切りである。

皿形土器 (第54図9～15, 第55図1, 2, 10～13, 第56図1～4)

底部高台の有無によってA・B二類に大別した。

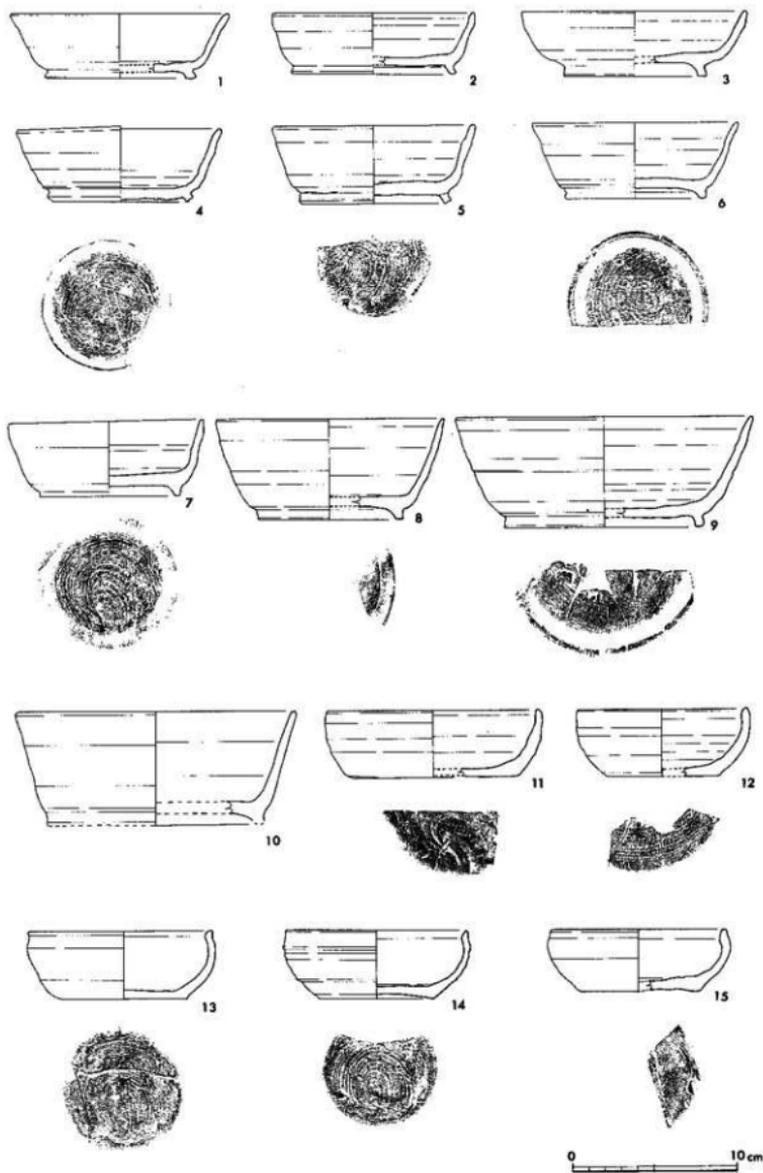
A 類 (第55図10～13, 第56図1～4) 底部に高台の付くものである。高台が底部の外側に寄ったものと、やや内側によったものがあるが、いずれも底部回転系切りの後に高台が貼り付けられている。坏部の立上りは、外傾し外反気味に立ち上がるものと、内湾気味に立ち上がるものの両者が認められる。焼成には、個体差があるが、どの個体も底部内外面と坏部内外面で色調が異なり、焼成時の重ね方によって還元状況の差が認められる。第55図12には系切り後の故意に付けられたヘラ記号が見られる。

B 類 (第54図9～15, 第55図1, 2) 底部に高台が付かないもので、坏部は直線的にまたは外反して立ち上がる。底部はいずれも回転系切り後未調整である。色調は青灰色のものと、A類に似て部分的に色調が異なるものが見られる。

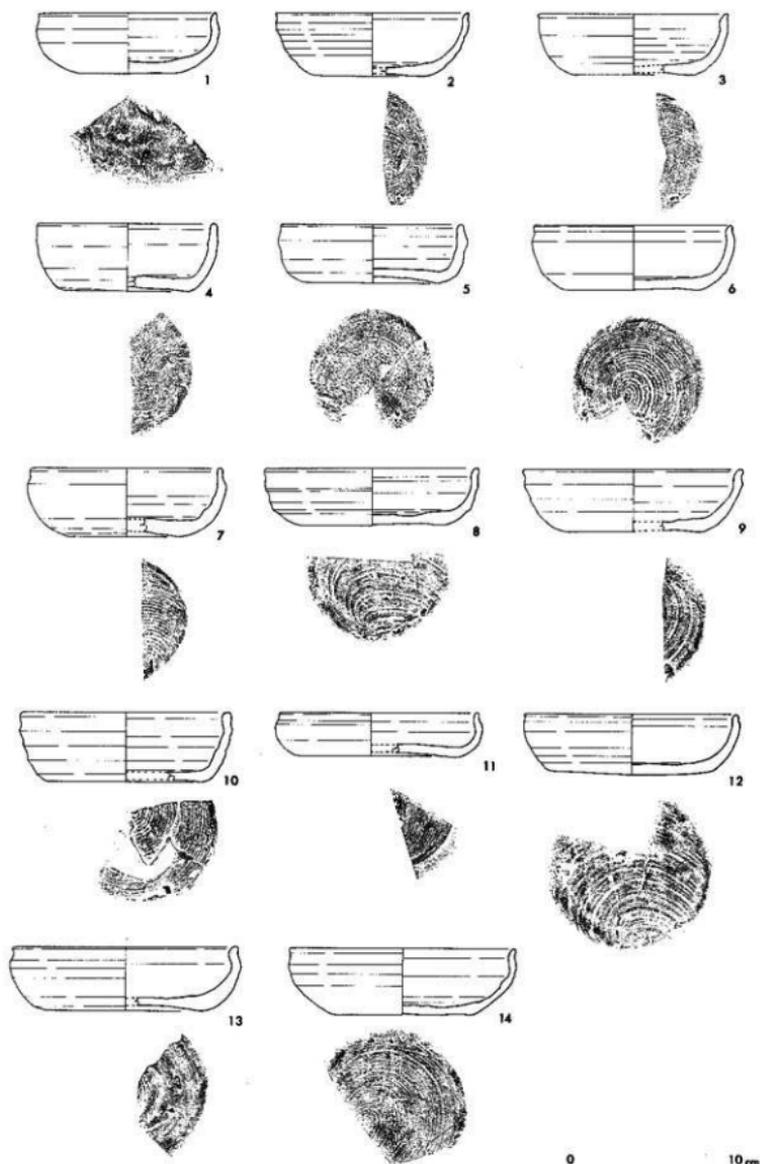
壺形土器 (第55図3～9) 坏・皿に比べて少ないながら出土している。つまみは、図示した宝じゅ状のもの (第55図3, 6) と、中央が小さく凹むボタン状のもの (第55図9) の二形態が出土している。口縁端部は小さく返りの付くもの (同図3, 5, 8) と、付かないもの (4, 7) の2形態がある。焼成や色調には個体差が大きく、灰色や褐色、橙色のものがある。

壺形土器 (第56図8～14)

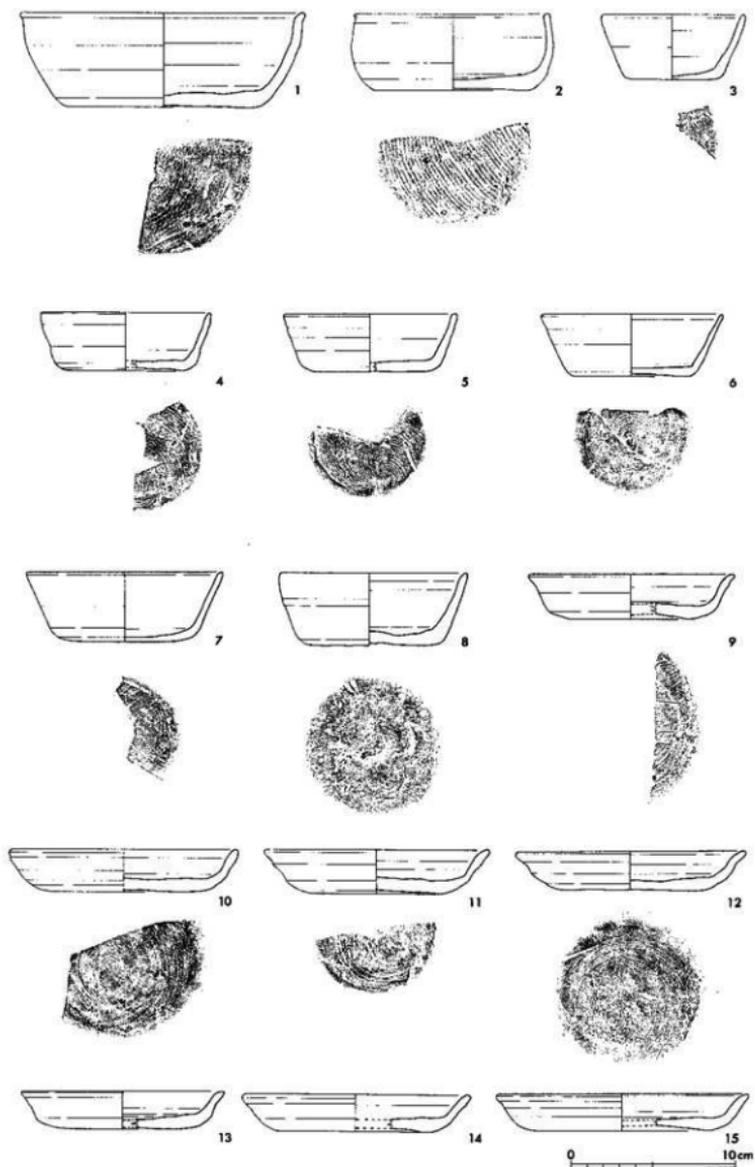
完形のものは見られないが、長頸壺の頸部以上、胴部以下、短径壺などが出土しており、小片ながら形態の異なる口縁部端部が出土している。第56図8は図示部のみ出土で、長頸壺の頸部以上である。胎土はやや白っぽく、焼成は良好である。口縁端は小さく段をもっている。12は、肩の大きく貼



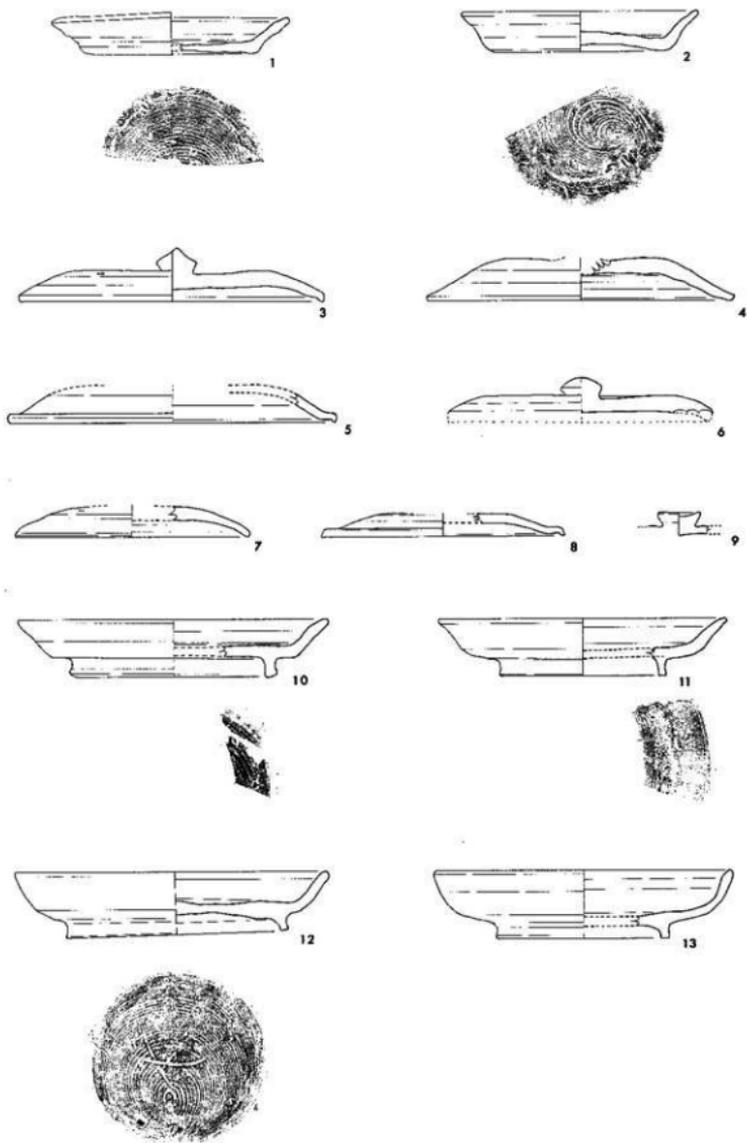
第52図 林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(1) (1/3)



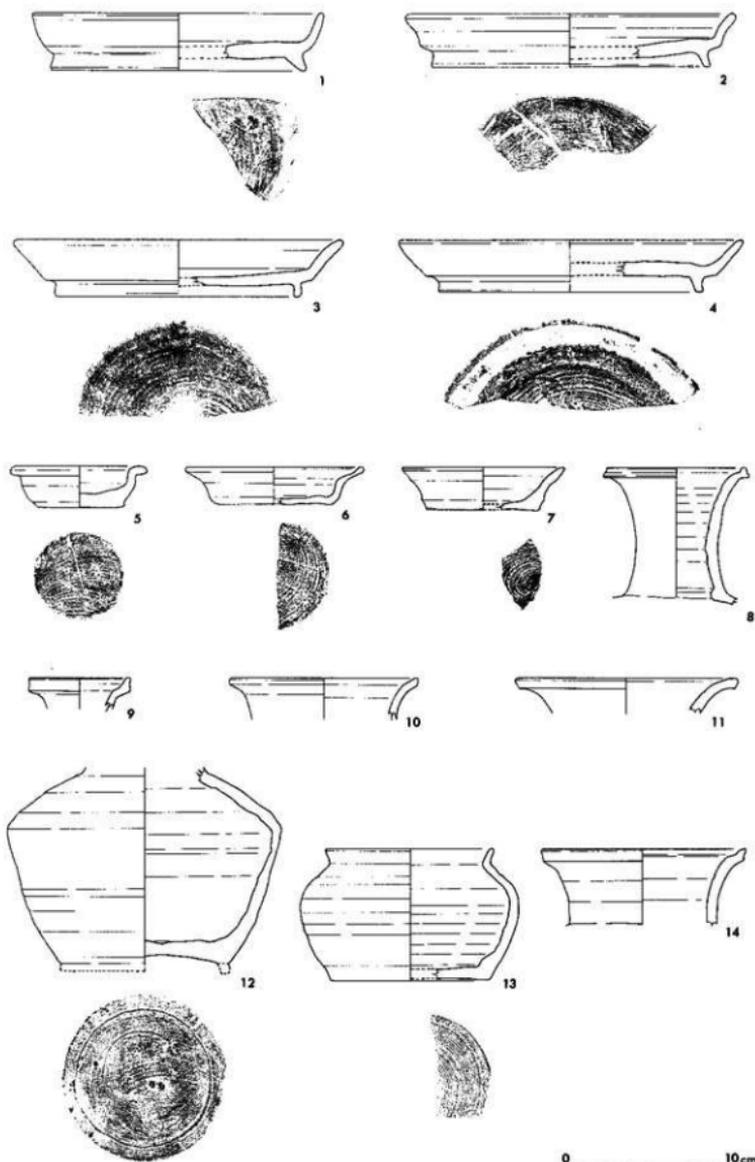
第53図 林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(2) (1/3)



第54図 林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(3) (1/3)



第55図 林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(4) (1/3)



第56図 林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(5) (1/3)

た壺で、底部は回転系切り後ナデを施したのち、高台を貼付たようだが剥落しており、痕跡のみ見られる。13は短頸壺で、やや外傾する口縁立上りである。底部には明瞭な回転系切り痕が残る。9, 10, 11, 14は壺や瓶の口縁部端と思われる。9, 14は端部が小さく立上り、段を有するものである。10, 11は無段の単純な口縁部端である。

甕形土器 (第57図1~4)

大甕の口縁部と胴部小片のみが出土している。1は口縁部で、外面に3条の沈線が見られる。一部タタキ痕が認められる。2, 3, 4は胴部片で内外面ともタタキ痕が残り、4の内面は一部タタキ痕がナデ消されている。

土師器 (第57~58図)

須恵器に比べ出土量が少なく、遺存状況も非常に悪い。甕、壺の口縁部、土製支脚、移動式甕片、甕片などが出土し、完形に復元できるものは無かったものの、不完全ながら煮炊き具としてのセットを揃えている。

甕形土器 (第57図7~9)

口縁部のみ小片で出土している。復元口径は27~29cmで、淡黄褐色を呈し、外面はハケメ、ヨコナデによる調成である。内面は頸部以下ケズリで、口縁部には外面同様ハケメ調整を施すものも見られる。図化はできなかったが体部小片も若干出土している。

壺形土器 (第57図10)

甕同様小片のみの出土であり、全体が復元できるものは無い。9は復元口径19cmで、形態・調整は甕形に似ている。10はやや小型である。

移動式甕 (第57図5~6, 第58図3, 6)

完形に復元することはできないが炊口部と口縁部が小片で出土している。復元口径は30~33cmである。

土製支脚 (第58図1, 2)

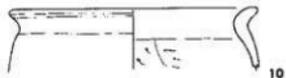
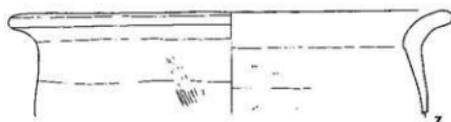
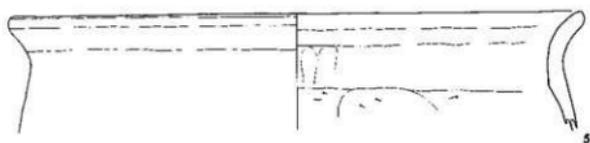
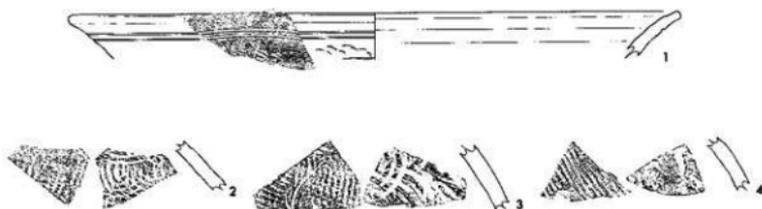
別個体で2点出土している。1は下半を欠く支持部のみで、2は支持部を欠いている。

甕形土器 (第58図5)

小片ながら出土している。第58図5は把手部である。図示は不可能であったものの他にこの小片が出土している。

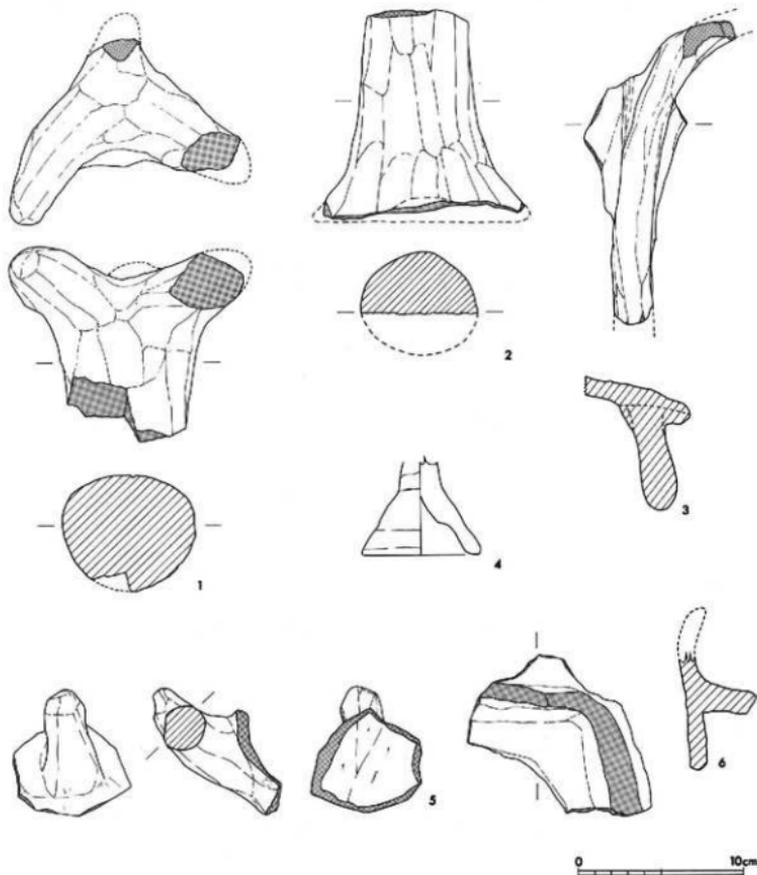
その他 (第58図4)

第58図4は高環の脚部状を呈するものであるが、器形の全体は不明。脚部と思われる内面は、雑な



0 10cm

第57図 林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(6) (1/3)

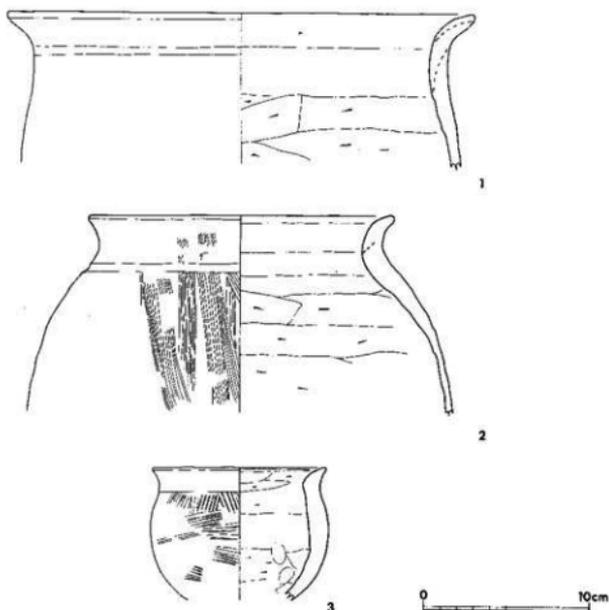


第58図 林廻り遺跡SB01出土遺物実測図(7) (1/3)

ナデ仕上げでしぼり目状の縦方向の筋が観察できる。外面ヨコナデ調整である。器壁が厚く、雑な印象を受ける。胎土・焼成は他の土器と同様である。

鉄製品 (第60図1, 3~10)

土器に混じて鉄製品が出土している。1は、袋状の斧で、長さ8cm刀幅4cmを測る。3は不明鉄製品で、断面は方形の棒状を呈する。両端が破損しており全体は不明である。4, 5は、鉄釘で、4は頭部に膨らみを持ち、断面は方形である。ほぼ完形で長さは5cmである。5は上下を欠いているが断面が方形である。6は方頭式の鎌で頸部は短頸である。鐵身長4.9cm、厚さ0.8cmを測る。7は鐵茎



第59図 林廻り遺跡SB02出土遺物実測図(1/3)

部のみである。8, 9は、片側に刃部があり、刀子か片刃鎌の一部と思われる。10は不明鉄製品の一部で、断面が扁平である。

勾玉(第60図11)

勾玉は土器や鉄製品とは出土位置が異なり、SB01の西側で出土したものである。黄色がかった半透明のめのう製で、完形品である。断面はやや扁平な円形である。身長は3cm、太さ1cmで、穿れた穴の断面は円錐状を呈する。

SB02出土遺物(第59図)

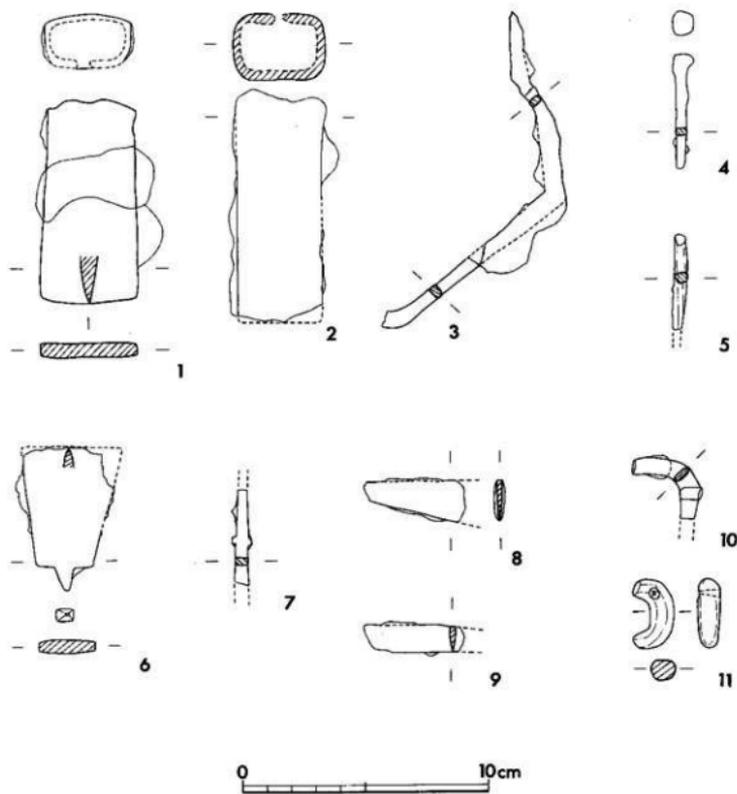
遺構の遺存状況が悪かったため、遺物も余り出土していない。1は口径28cmで、甕か移動式竈の口縁部であろう。2は下半を欠くが、甕の口縁部から胴部である。3は小形甕で、器壁が1cm以上と厚い。外面は荒いハケメ調整で、内面は横方向のケズリの後荒いナデが施されている。おおよそSB01と同時期であると思われる。

SB04出土遺物(第60図2)

この遺構は、中心が調査区外にあると見られ、ほとんど遺物は出土していない。土師器や須恵器の

小片では、SB01とほぼ同様な形態であり、時期的にもほぼ同時期であると考えられる。

第60図2は調査区境界より出土した鉄製の斧で、長さ9cmを測る。刃の先端部は破損して、不明瞭である。ソケット部は袋状である。



第60図 林廻り遺跡出土鉄製品・勾玉実測図 (1/2)

第4節 小 結

林廻り遺跡では、丘陵斜面において、8世紀末～9世紀の掘立柱建物跡が検出された。調査地が丘陵裾部の狭い範囲であったため、検出した建物跡の数は少なかったが、調査区外の同斜面には地表観察からも不自然な2～3m規模の窪地が数か所で見られ、遺跡はより広い範囲に広がり、小規模ながら集落跡を形成していたものと考えられる。建物跡は、建物ごとに斜面を削り出して造った平坦面に建っており、それぞれの建物跡をつなぐ加工段や平坦面は検出されなかった。いずれも少なくとも1度以上の建て替えが行われており、建て替えに伴って平坦面を拡張したようである。これらの建物跡からは、須恵器とともに日常生活で使用する煮沸具や甕、十製支脚が出土し、また炉跡と考えられる焼土面があることから建物は住居跡であると思われる。炉跡は建物の端にあり、土製の移動式甕を用いていたことが分かる。

島根県内における8～9世紀ごろの掘立柱建物跡は、林廻り遺跡と同様に水田部と近接する丘陵地に確認されることが多い。例えば、安来市高広遺跡⁽³⁾、同島田南遺跡⁽⁴⁾、同岩屋口遺跡⁽⁵⁾、松江山中竹久遺跡⁽⁶⁾、松江市薦沢A遺跡⁽⁷⁾、イガラビ遺跡⁽⁸⁾、オノ峠遺跡⁽⁹⁾、益田市大谷遺跡⁽¹⁰⁾、同大峠遺跡などが知られている。しかし、これらには林廻り遺跡のように、小規模な加工段に単独で建物が存在するものと、斜面に平行する方向に細長い加工段を造り、定期的に建物を配置した大規模なものがある。これは単に集落の大小を示しているものではなくその集落の公的な役割や性格とも深く関連がある可能性が指摘されている。こうしたことから林廻り遺跡は一般的な農山村の小集落の様子を表しているものと想定できる。

出土遺物では、遺存状態の良かったSB01から、須恵器・土師器に混じて鉄器が出土している。この時期の集落跡からは、オノ峠遺跡などで刀子や鉄釘の出土が知られており、鉄器の使用が普及していたことが分かる。今回出土した鉄器は、土器と同様な出土状態であり、日常的に使用・保有されていたものと考えられ、一般的な庶民の集落における当時の鉄器の普及を考える上で良好な資料であるといえよう。

また、SB01からは、完形の勾玉が出土している。これは、土坑などに埋納されたものではなく勾玉のための遺構は検出されなかったため、どのような意味をもっているか不明である。あるいはSB01が祭祀に関わる建物であった可能性もあるが、建物の構造や規模、その他の遺物で他に差異は無く、想像の域をでない。

出土した土器については、SB01で須恵器がまとまって出土しており、良好な資料であるといえる。8～9世紀前半の須恵器は、古くは松江市出雲国庁跡出土須恵器の編年⁽¹³⁾や、その後柳浦氏による編年研究がなされている。柳浦氏の編年案によると林廻り遺跡SB01の須恵器は第3～4期に渡る。国庁編年においては、林廻り遺跡で坏Bとした無高台で坏部が内傾するものと、坏Aとした高台を有し直線的に立ち上がる坏部のものとは、無高台から高台を有するものへ変化する時期差として考えられている。しかし、遺跡からの出土では、松江市黒田畦遺跡⁽¹⁴⁾のように共存する例も報告されており、今後再考する余地があると思われる。また今回の調査では、皿についても無高台のものと同高台を有するものが出土しており、同様のことが言えよう。

以上のように検出した遺構・遺物は多くはないが、この時期の一般的な集落の様相の一端を明らか

にする良好な資料であると言えよう。

註

- (1) 坪井清足・町田 章「奈良時代の遺物」『出雲国片跡発掘調査概報』松江市教育委員会 1970年
- (2) 柳浦俊・「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』松江考古学談話会 1980年
- (3) 『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会 1984年
- (4) 『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 島田南遺跡』島根県教育委員会 1992年
- (5) 『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会 1993年
- (6) 『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ 中竹矢遺跡』島根県教育委員会 1992年
- (7) 『萬沢A遺跡・萬沢B遺跡・別所遺跡』松江市教育委員会 1990年
- (8) 『新田遺跡・朝野虎神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡・池ノ奥A遺跡・池ノ奥窪跡群』松江市教育委員会 1990年
- (9) 『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ 才ノ崎遺跡』島根県教育委員会 1993年
- (10) 『石見空港建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1992年
- (11) 『上久々茂土居跡・大峠遺跡 一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1994年
- (12) 註(9)と同じ
- (13) 註(1)と同じ
- (14) 註(2)と同じ
- (15) 『松江市文化財調査報告書第65集 黒田畦遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会、00松江市教育文化振興事業団

林廻り遺跡遺物観察表

探検番号	器種	法 量			土 質	焼 成	色 調	手法の特徴	出土地点	備 考
		口径	底径	器高						
第5281	須恵器 坏 身	13.0	8.0	4.0	やや密 白色粒ま れに含む	良好	白灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5282	須恵器 坏 身	12.4	10.1	3.7	密 3mm以下の砂 粒含む	良好	灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5283	須恵器 坏 身	13.6	8.8	4.0	普通 白色粒ま れに含む	良好	青灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5284	須恵器 坏 身	12.3	8.0	4.5	普通 白色粒ま れに含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5285	須恵器 坏 身	12.1	8.6	4.8	石英、白色砂粒含 む	良好	青灰色	底面静止糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5286	須恵器 坏 身	12.8	8.0	4.7	普通 白色、黒色 砂粒含む	良好	青灰色	底面静止糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5287	須恵器 坏 身	11.9	8.6	4.6	密 3mm以下の砂 粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5288	須恵器 坏 身	14.0	8.0	6.0	普通 白色、黒色 砂粒含む	良好	青灰色	底面静止糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第5289	須恵器 坏 身	18.2	11.2	6.8	普通 白色、黒色 砂粒含む	良好	青灰色	底面静止糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52810	須恵器 坏 身	17.0			普通 白色砂粒含 む	良好	青灰色	底面糸切り 内外面回転ナデ	SB01	
第52811	須恵器 坏 身	12.7	10.4	4.1	普通 白色砂粒含 む	良好	暗灰色 灰色	底面回転糸切りコナデ 内外面回転ナデ	SB01	
第52812	須恵器 坏 身	10.6	7.6	4.15	やや密 白色砂粒 含む	良好	暗灰色 褐色	底面回転糸切り 内外面回転ナデ	SB01	
第52813	須恵器 坏 身	11.3	3.8	4.3	普通 砂粒含む	良好		底面回転糸切り 内外面回転ナデ	SB01	
第52814	須恵器 坏 身	11.0	7.0	4.2	3mm以下の砂粒含 む	良好	青灰色	底面静止糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52815	須恵器 坏 身	10.6	7.2	3.8	3mm以下の白色砂 粒含む	良好	黒灰色 褐色	底面静止糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52816	須恵器 坏 身	11.0	6.0	3.7				底面ナデ(上) 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52817	須恵器 坏 身	11.8	6.0	3.9	普通 砂粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52818	須恵器 坏 身	11.6	7.4	3.75				底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52819	須恵器 坏 身	10.9	7.5	4.2	白色砂粒含む	良好	紫灰色	底面静止糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52820	須恵器 坏 身	10.8	8.0	3.6	1mm以下の白色黒 色砂粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52821	須恵器 坏 身	12.0	8.1	4.0	普通 1mm以下の 白色砂粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52822	須恵器 坏 身	11.8	7.4	4.2	白色、黒色砂粒含 む	不良	外黄褐色 内灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52823	須恵器 坏 身	13.2	9.0	3.5	普通 砂粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52824	須恵器 坏 身	13.4	8.1	3.8	普通 白、黒色砂 粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52825	須恵器 坏 身	12.8	9.6	4.3	1mm以下の黒色砂 粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52826	須恵器 坏 身	12.2	10.3	2.6	密	良好	灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52827	須恵器 坏 身	13.0	10.0	3.8	1mm以下の白、黒 色砂粒含む	良好	青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52828	須恵器 坏 身	13.9	9.8	4.9	白色砂粒含む	良好	淡灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第52829	須恵器 坏 身	13.6	8.4	4.1	3mm以下の砂粒含 む	やや不良	外黄褐色 内青灰色	底面回転糸切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	

神田番号	種 類	法 量			筋 七	焼 成	色 調	手法の特長	出 七 地 点	備 考
		口径	底径	器高						
第54図1	須恵器 坏 身	17.5	11.9	5.8	密 小砂粒を少量 含む	良好	淡灰色 淡青灰色	底部へラ切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図2	須恵器 坏 身	11.7	9.0	4.7	普通 白色砂粒を 含む	良好	青灰色 暗青灰色	底面静止水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図3	須恵器 坏 身	8.8	5.0	4.0	精密 砂粒含む	良好	暗褐色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図4	須恵器 坏 身	12.4	7.0	3.6	3mm以下の白、黒色 砂粒含む	良好	青灰色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図5	須恵器 坏 身	10.6	7.0	3.6	精密 白色砂粒含む	良好	暗灰色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図6	須恵器 坏 身	11.0	7.2	3.65	普通 白色砂粒目 立つ	やや不良	暗茶褐色 暗色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図7	須恵器 坏 身	13.8	6.0	4.3	白色砂粒含む	良好	茶褐色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図8	須恵器 坏 身	11.6	8.5	4.5	密 3mm以下の砂 粒多く含む	良好	内青灰色 外黄灰色 灰色	底部へラ切後ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図9	須恵器 皿	12.6	7.0	3.8	普通 砂粒含む	良好	外灰色 内暗灰色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図10	須恵器 皿	13.8	10.0	2.6	白、黒色砂粒含む	良好	灰色	底部回転系切後ナデ仕上げ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図11	須恵器 皿	13.8	7.6	2.7	1～2mmの白色砂 粒含む	良好	紫青色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図12	須恵器 皿	14.1	9.0	2.4	密 小砂粒含む	良好	青灰色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデ	SB01	
第54図13	須恵器 皿	12.4	6.0	2.3	普通 砂粒含む	良好	暗青灰色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図14	須恵器 皿	14.0	8.8	2.3	2mm以下の白色砂 粒含む	やや不良	暗青灰色 淡青灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第54図15	須恵器 皿	15.4	10.6	2.25	普通 白色砂粒含む	良好	灰色	底部ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図1	須恵器 皿	14.6	10.6	2.6	1mm以下の白色黒 色砂粒含む	良好	青灰色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図2	須恵器 皿	15.0	10.4	2.4	2mm以内砂粒含む	良好	青灰色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図3	須恵器 坏 蓋	18.6		3.3	密 小砂粒含む	良好	淡灰色	天井部へラケジ後回転ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図4	須恵器 坏 蓋	18.6			密 小砂粒含む	良好	褐色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図5	須恵器 坏 蓋	20.0			密 1mm大の砂粒 含む	良好	灰色	内外面回転ナデ	SB01	
第55図6	須恵器 坏 蓋				白、黒色砂粒含む	不良	淡黄灰色	天井部へラケジ後回転ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図7	須恵器 坏 蓋	14.4			密 2mm大の砂粒 含む	良好	外灰色 内褐色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図8	須恵器 坏 蓋	14.8			密 小砂粒少量 含む	良好	青灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第55図9	須恵器 坏 蓋				1～2mmの砂粒 含む	良好	青灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデ	SB01	
第55図10	須恵器 皿	19.0	11.4	3.5	密 白色砂粒含む	良好	褐色	底部回転系切後ナデ仕上げ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	高台付の皿
第55図11	須恵器 皿	17.7	9.4	3.5	砂粒含む	良好	青灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	高台付の皿
第55図12	須恵器 皿	19.2	13.5	4.2	密 6mm大の砂粒 を少し含む	良好	暗褐色	底部回転水切 外面回転ナデ 内面回転ナデ	SB01	高台付の皿
第55図13	須恵器 皿	18.0	9.7	4.2	白色砂粒含む	やや不良	外黄灰色 内暗灰褐色	内外面回転ナデ	SB01	高台付の皿

押込番号	器種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	手法の特徴	出土地点	備 考
		口径	底径	器高						
第56図1	須恵器 罎 身	17.8	15.4	3.55	砂粒含む	やや不良	赭褐色	底部回転系切 外面回転ナデ 内面回転ナデ	SB01	高台付の皿
第56図2	須恵器 罎 身	20.2	17.0	3.3	密 小砂粒少量含む	良好	淡灰色	底部ヘラ切り後回転ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	高台付の皿
第56図3	須恵器 罎 身	20.2	14.7	3.55	普通 白色砂粒含む	やや不良	外赭灰色 内灰色	底部回転系切 外面回転ナデ 内面回転ナデ	SB01	高台付の皿
第56図4	須恵器 罎 身	21.2	15.4	3.4	1mm以下の白色砂粒含む	やや不良	明褐色 茶褐色	底部回転系切後回転ナデ 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	高台付の皿
第56図5	須恵器 罎 身	8.3	5.3	2.5	滑	良好	淡灰色	底部静止系切 外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	SB01	
第56図6	須恵器 罎 身	10.9	7.0	2.3	滑 小砂粒含む	良好	外淡黄灰色 内青灰色	底部回転系切 内外面回転ナデ	SB01	
第56図7	須恵器 罎 身	8.8	6.9	2.65	白色砂粒多く含む	良好	外青灰色 内黄白色	底部回転系切 内外面回転ナデ	SB01	
第56図8	須恵器 罎 身	8.4			白、黒色、金雲母 含む	良好	白灰色	内外面回転ナデ	SB01	外面に自然釉
第56図9	須恵器 罎 身	6.1			普通 白色砂粒含む	良好	青灰色	内外面回転ナデ	SB01	
第56図10	須恵器 罎 身	11.4			緻密	良好	黒褐色	内外面回転ナデ	SB01	外面に自然釉剥離
第56図11	須恵器 罎 身	13.3			白、黒色砂粒含む	良好	暗灰色		SB01	
第56図12	須恵器 罎 身				白色砂粒含む	良好	紫褐色	底部回転系切り 外面回転ヘラケズリ回転ナデ 内面回転ナデ静止ナデ	SB01	
第56図13	須恵器 罎 身	10.2	9.7	8.1	密 1mm程度の砂粒を少し含む	良好	灰色	底部回転系切 内外面回転ナデ	SB01	
第56図14	須恵器 罎 身	12.4			普通 白、黒色砂粒含む	良好	青灰色		SB01	
第57図1	須恵器 罎 身	37.2			白色砂粒含む	良好	暗褐色	内外面回転ナデ タタキ	SB01	
第57図2	須恵器 罎 身				白色砂粒含む	良好	灰色	タタキ	SB01	外面に白釉あり
第57図3	須恵器 罎 身				普通	良好	青灰色	タタキ	SB01	
第57図4	須恵器 罎 身				普通	良好	内青灰色 外淡黄褐色	タタキ	SB01	
第57図5	土師器 罎 身	34.8			砂粒含む	良好	黄褐色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデヘラケズリ	SB01	
第57図6	土師器 罎 身	31.8			砂粒含む	良好	黄褐色	外面ヨコナデタタキハケ 内面ヨコナデヘラケズリ	SB01	
第57図7	土師器 罎 身	26.0			やや粗 白色砂粒 多く含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデタタキハケ 内面ヨコナデヘラケズリ	SB01	
第57図8	土師器 罎 身	27.1			やや粗 白色砂粒 多く含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ	SB01	
第57図9	土師器 罎 身	19.0			普通 白色砂粒多 く含む	良好	明褐色	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリヨコナデ	SB01	
第57図10	土師器 罎 身	14.8			普通 1mm以下の 砂粒含む	良好	明褐色	外面ヨコナデ 内面ケズリヨコナデ	SB01	
第58図1	土 製 支 脚				石灰など砂粒多 く含む	良好	橙黄色	ユビナデ	SB01	
第58図2	土 製 支 脚				やや粗 白色砂粒 多く含む	良好	褐色	ユビナデ	SB01	
第58図3	かまど		7.2		やや粗 白、透明 黒色砂粒含む	良好	黄褐色	内外面ナデ	SB01	
第58図4	土師器				やや粗 白、透明 黒色砂粒含む	良好	黄褐色	外面の一部ケズリ 全体にナデ仕上げ	SB01	

挿図番号	器種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
		口径	底径	器高						
第58図5	土師器 甗				石英、長石など砂 粒多く含む	良好	明褐色	外面の一部ハケメ 全体にナデ仕上げ	SB01	
第58図6	かまど				白色、褐色砂粒含 む	良好	黄褐色		SB01	

林廻り遺跡鉄製品観察表

挿図番号	器 種	法 量 (cm)	出 土 遺 構
第 60 図 1	鉄 斧	長さ：8 幅：4 厚さ：0.7	SB01
第 60 図 2	鉄 斧	長さ：9 幅：3.5 厚さ：0.7	SB04
第 60 図 3	器種不明	厚さ0.5	SB01
第 60 図 4	鉄 釘	長さ：4.7 厚さ：0.5	SB01
第 60 図 5	鉄 釘	長さ：— 厚さ：0.5	SB01
第 60 図 6	鉄 鎌	長さ：4.9 厚さ：0.8	SB01
第 60 図 7	鉄 鎌	長さ：— 厚さ：0.5	SB01
第 60 図 8	刀 子 か	厚さ：0.4	SB01
第 60 図 9	刀 子 か	厚さ：0.4	SB01
第 60 図 10	不 明 鉄 製 品	—	SB01

第5章 受馬遺跡

第1節 調査の経過と概要

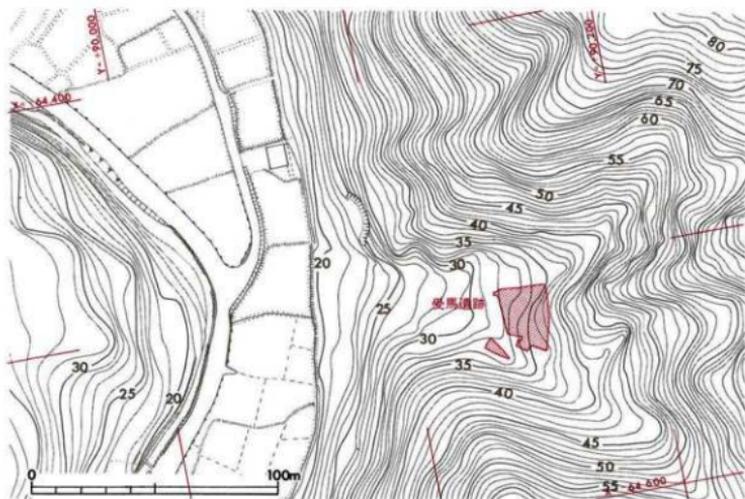
受馬遺跡は、島根県八東郡東出雲町揖屋字受馬に所在する。

遺跡は、京羅木山や星上山のある山塊に源を發し中海へと流れる榎ノ屋川的作用により形成された南北に細長い谷の中程、河口に向かって谷幅が大きく広がる場所に位置する。調査地の標高は30～35mであるが、現水田面と隣接する、谷に面した低丘陵の裾部に小さく広がった西向きの緩斜面上にあたる。調査前の地形観察では住居跡等の遺構の存在が考えられた。

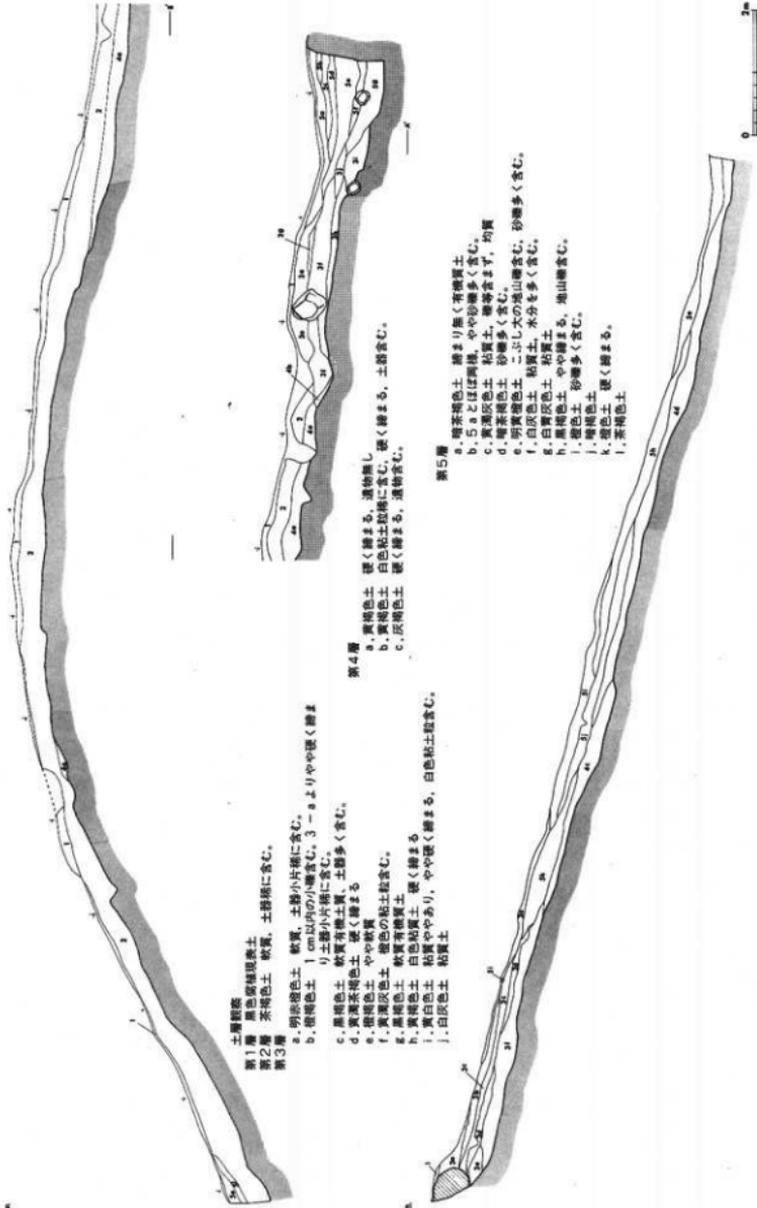
現地調査は、平成4年度に実施した試掘調査の結果を受けて、平成5年10月15日に開始し、11月20日に終了した。平成4年度の試掘調査では、遺跡の状況を把握するために表面観察から要所にトレンチを設定して範囲などの確認調査を行い、平成5年度はこの結果をもとに調査区を設定した。

調査の結果、上下2面の時期の異なる遺構面を確認した。表土に近い上層遺構面では調査区中央のやや南西にあった巨木の周囲に、破碎・廃棄されたと考えられる多量の中・近世土師器皿や古銭が出土、ピット群・柵列等が検出された。また、地山層へ掘り込まれた下層遺構面では、古墳時代の土器片を伴う溝状遺構を検出した。

以下、検出した遺構・遺物について記していきたい。



第61図 受馬遺跡調査区位置図 (1/2000)



土層観察

- 第1層 黒色腐植層表土
- 第2層 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
- 第3層
 - a. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - b. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。3-aよりやや硬く締まる。
 - c. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - d. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - e. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - f. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - g. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - h. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - i. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。
 - j. 赤褐色土 軟質、土層小片層に含む。

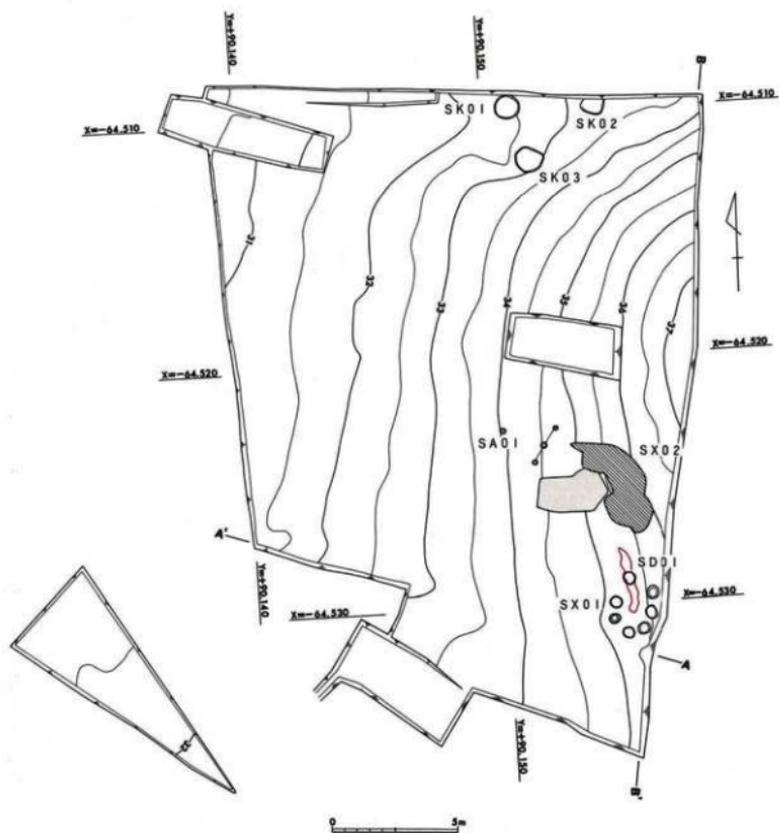
第4層

- a. 黄褐色土 硬く締まる、遺物無し
- b. 黄褐色土 白色粘土粘結に含む、硬く締まる、土層含む。
- c. 灰褐色土 硬く締まる、遺物含む。

第5層

- a. 暗茶褐色土 締まり無く有腐質土
- b. 5-aとは異なり、やや粘り多く含む。
- c. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- d. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- e. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- f. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- g. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- h. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- i. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- j. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- k. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。
- l. 黄褐色土 粘質土、水分多く含む。

第62図 受馬遺跡調査区土層図(A-A')(B-B')(1/80)



第63図 受馬遺跡調査区全体図 (1/200)

第2節 遺構について

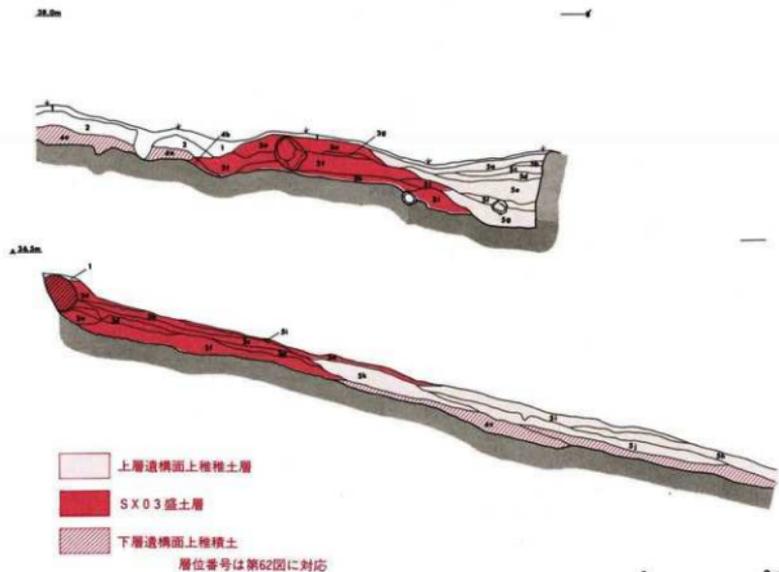
1. 土層の堆積状況について (第62図)

受馬遺跡では、時期の異なる遺構面を2面確認した。遺構について述べる前にこれらの遺構の掘り込まれている面と、遺構面上の堆積土の状況について述べる。

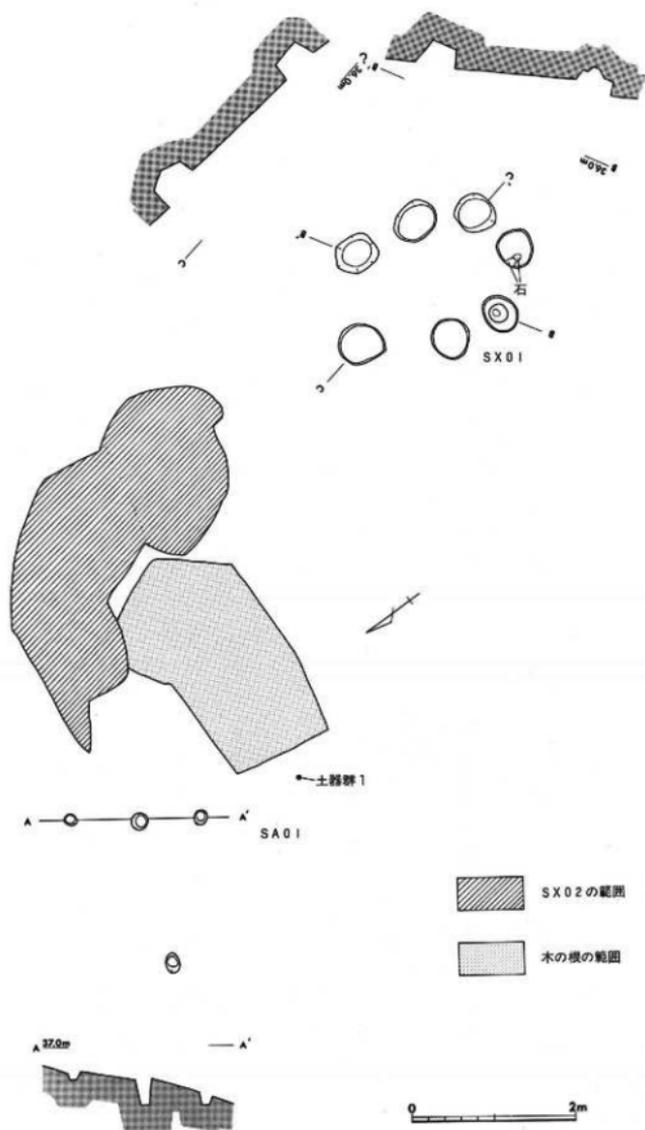
調査区内に設けた土層観察用の畦のうち、遺構と関連が深いのは、A-A'、B-B'ラインである。礫を含む橙色の地山層の上には大きく5層の堆積土層が認められる(第2図)。遺構面は、地山面(以下下層遺構面という)と、第4層上面(以下上層遺構面という)である。上層遺構面上に堆積しているのは、第1・第2・第5層で、これらからは多量の中近世遺物と数点の古墳時代以前の遺物が出土している。上層遺構面では、ピット内覆土中、盛土状遺構(SX03)の盛土中から中近世土器の小片が出土し、遺構面に接して土器群①が出土している。下層遺構面では、地山面に接して古墳時代土器器が出土している。上・下の遺構面を隔てる第4層では、中・近世遺物は認められず、古墳時代土器器片が数点出土している。

2. 上層遺構面について

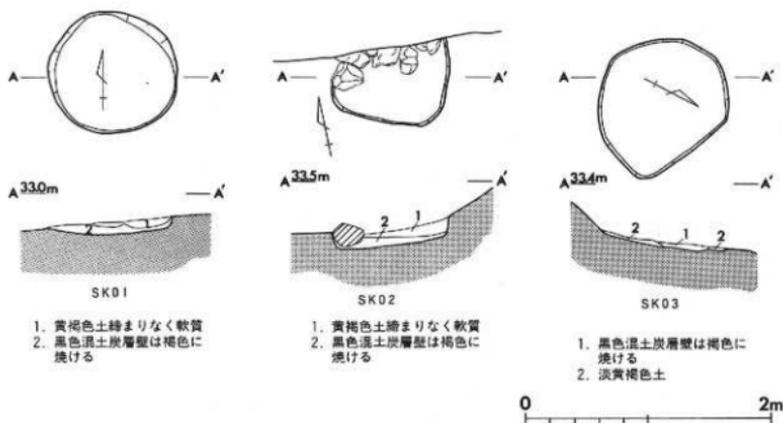
調査区の東南で、ピット群(SX01)、柵列(SA01)、地山礫の集積跡(SX02)や盛土状遺構(SX03)を確認した。これらは調査区内の巨木を取り囲むように配置されており、巨木と関連のある遺構の一部であると思われる。また、調査区北では浅い焼土坑(SK01・02・03)を検出した。



第64図 受馬遺跡上層遺構面SX03付近土層堆積状況(1/80)



第65図 受馬遺跡上層遺構面実測図 (1/60)



第66図 受馬遺跡SK01～03実測図 (1/40)

SA01 (第65図)

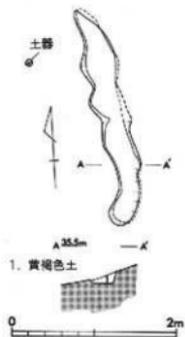
直径20cm深さ30cmのピットが3個並ぶ。ピット内には白濁褐色土が堆積し、遺物は混入していない。周囲には直線的には結べないものの同様のピットを検出しており、本来はこれらも含めて何らかの遺構を構成していた可能性が考えられる。SA01に近接する位置で、上層遺構面に接して土器群①が出土した。碗を伏せた内部に皿形土器が数枚重ねてあった。

SX01 (P 1～7) (第65図) 直径10cm深さ30cmのほぼ同一規模のピットが、2m×3mの範囲で7個検出された。ピット内には中・近世土師器の細片を含む暗褐色の軟かい有機質土が堆積。ピット群の南側には盛土状遺構SX02が土層にて確認できた。

SX02 (第65図) 地山内に認められる人頭大の礫が集積されていた。地山層との間には堆積土層を挟んでいる。礫には加工痕は認められず、検出状況からも構造物を構築していたとは考えられない。何らかの要因により集積されたものと思われる。礫の間からは中・近世土師器の細片が出土している。

SX03 (第64図) SX01の南側の小規模な盛土状遺構。平面的な広がりを確認することはできなかったが、調査区内に設けた土層確認用の畦から、約直径4m・高さ0.5mの不整形形の盛土が想定される。盛土された土は数層に細かく分層できるが、いずれの層からも細片の土師器が出土している。

SK01・02・03 (第66図) 調査区の北端で検出した。地山上に堆積した土から掘り込まれており、上層遺構面としたが、上記のSA01やSX01等との前後関係は不明である。規模は1～1.2m、深さ20～40cmの不整形の浅い土坑で、壁面が焼け、内部には炭が薄く堆積している。SK02では焼けた痕跡のある人頭大の地山礫が堆積していた。いずれの土坑からも遺物は出土しておらず時期は不明である。



第67図 受馬遺跡SD01実測図 (1/60)

3. 下層遺構面について

SD01（第67図） 上層遺構面のSX01の直下で検出した長さ2.8m幅20cmの小さい溝状遺構である。地山層に直接掘り込まれており、一部はSX01によって壊されている。内部には小片の炭を混入する黄褐色土が堆積していた。遺構内および埋土中から遺物は出土していないが、周辺から古墳時代前半期の土師器小片が出土しており、この時期のものであると思われる。

第3節 遺物について

出土した遺物には、中・近世土師器を中心とする土器類と、古銭、石器などがある。以下それぞれについて述べる。

1. 土 器

(1) 中・近世土師器 (第69図～第76図)

今回の調査で出土した全遺物の大半を占める。第1・2・3・5層中より細片で、整理用コンテナで約20箱分が出土した。完形に復元可能な資料が非常に少なく、総個体数の把握や各形態別の出土数割合等の検討は不可能であった。層位による形態や出土状況の差異は認められず、層位的に時期を決定することは困難である。形態の特徴で皿形・坏形・碗形に分類し、さらに細分して述べる。

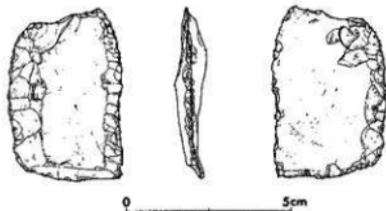
当地域における中世後半以降の土師器の様相については資料的な制限から、不明瞭である感は否めない。しかし、13世紀ごろまでと、16世紀末～17世紀代については、共存する陶磁器や、文献からの年代決定が可能な資料などが増えてきている。これらの成果から考えると、受馬遺跡の中世以降の土師器には、13世紀ごろまで遡ると考えられるもの(第73図12～17)と、16～17世紀のもの(第70図1～11)とが認められる。また古銭(寛永通宝)が出土していることをあわせると、これらの土師器の時期の下限は17～18世紀頃かと考えられる。

以下、分類ごとに土器の特徴について述べる。なお個別の上器のデータは観察表としてまとめた。

皿形土器(第69図1～4, 第70・71図, 第76図1～13) 器高が概ね2cm以下を基準に皿形としてまとめた。

成形技法の違いにより、A類とB類に大別が可能である。

A 類(第70図1～11) 手づくねによる成形で、口径7.8cm～9.6cmと大小の個体差が見られる。底部は緩いカーブの丸底か、中央部が若干上げ底である。いずれの個体も底部外面には指頭圧痕が残り、内型の使用が想定される。外面口縁部には強い横ナデが施され、端部に平坦な面を持つものがある。胎上は個体差があるが、他の器種では見られない金雲母などの微砂粒を含むものが見られ、淡黄白色を呈する緻密な胎土のものが多い。出土量は少なく、完形に復元できるものは数点である。他遺跡での類例では、16～17世紀に見られ、畿内で生産され地方でも大量に流通していた皿であるといわれており、本遺跡でも全体に対して割合は非常に少ないものの認められた。

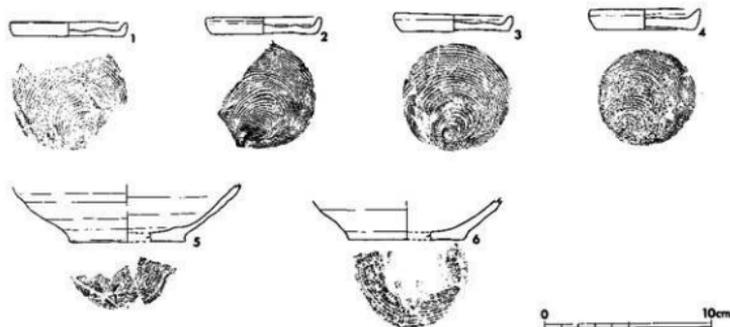


第68図 受馬遺跡出土土器実測図(1/2)

B 類 (第69図1~4, 第70図12~39, 第71図1~24, 第76図1~13) ロクロ成形によるもので、平らな明瞭な底部を持つ。大半は底部に回転糸切り痕を残す。底径が約5.5cm未満のものと、5.5cmを越えるものではやや形態が異なり、B類-1、B類-2と分けて述べる。

B類-1 (第70図12~22, 第76図1~13) 底径が5.5cm未満のもの。形態や手法上の特徴、胎土・焼成に個体差があるが、いずれも出土数が少ないため、まとめた。第70図12, 13はやや小型だが器壁が厚い。第70図15は底径が3.8cmと最小であるのに対し口径が大きく、口縁端に向かって緩く内湾して立ち上がる。器壁は薄く、風化が著しいものの底部には糸切り痕が認められる。第76図1は、丸みを帯びた平底を呈し、回転糸切りである。以上は本遺跡では他に出土していない。第70図14, 16, 17, 19, 20は形態的にはB類-2と異なり底形に比して大きい口縁のものであるが、調整ではB類-2と共通点が多い。

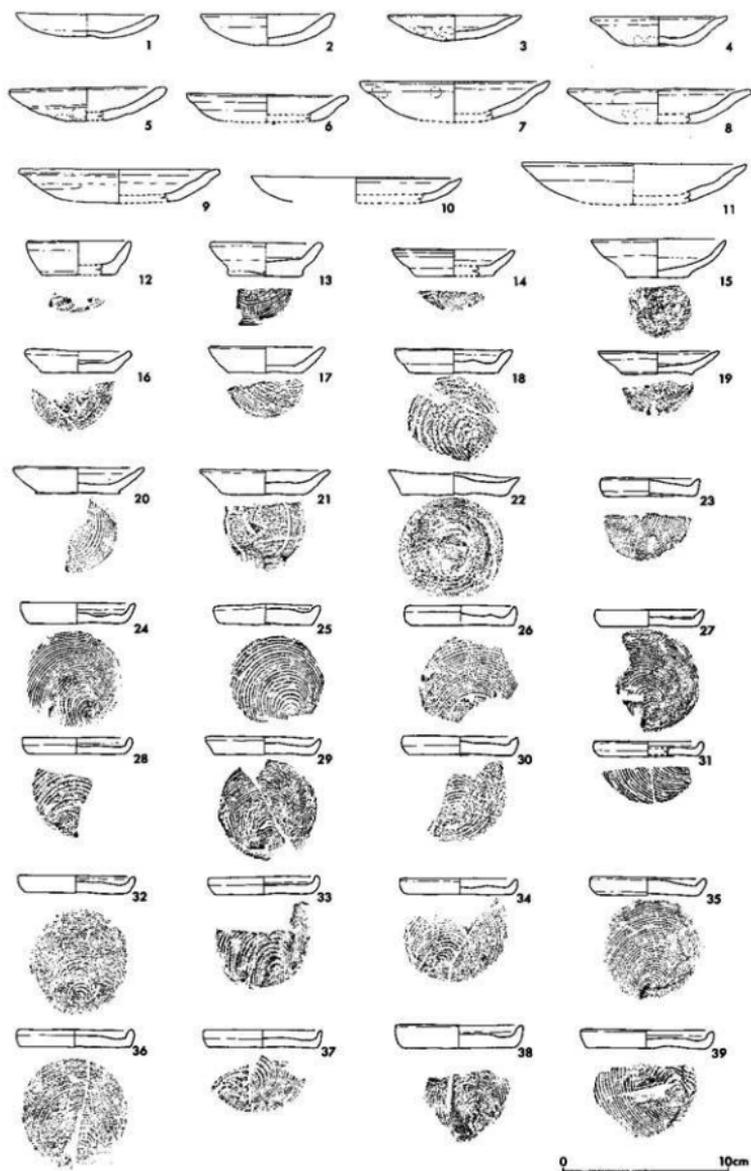
B類-2 (第69図1~4, 第70図23~39, 第71図1~24) 底径が5.5cm以上のもの。出土量は多く、本遺跡出土土器の1/2程度を占めていると思われる。個体間の形態差が少ないものである。底部は明瞭な回転糸切り痕が残り、小さく直立する口縁を持つ。内面は回転ナデで、底部と口縁部の境には凹みがあり、口縁端には平坦面を持つものが認められる。胎土は淡黄褐色呈するものが大半である。鳥根県内での類例は散見されるものの年代決定の困難なものも多く、本遺跡の例も他の遺物から13世紀~17世紀という幅の中のものと考えられる。



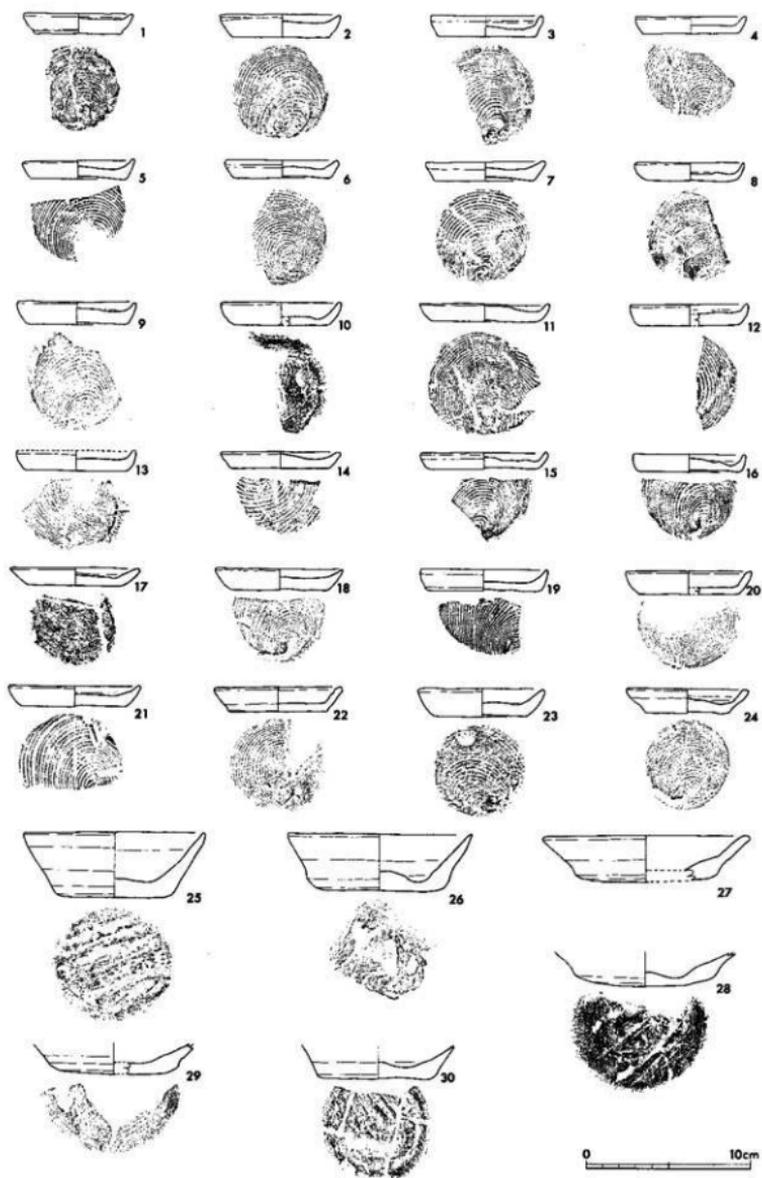
第69図 受馬遺跡上層遺構面土器群出土遺物実測図 (1/3)

坏形土器 (第71図25~30, 第72図, 第73図1~17) 成形技法・形態差により、A・B・C・D・E類に大別して述べる。

A 類 (第71図25~30, 第76図14) 底部にヘラ状工具による切り離し痕が認められ、切離し後は未調整かあるいは荒いナデ調整が施されている。一部には乾燥時の台の痕跡と見られる平行線が観察できるものがある。底部器壁は厚く、内面中央はボタン状に盛り上がっている。坏部は直線的に逆ハの字状に開き、口縁に向かって器壁が薄くなる。器高は個体差があり、第71図27のように皿状に浅いものもある。胎土・焼成は個体差が少なく、明るい橙色を呈す。出土量は少なく、完形のものはない。



第70圖 受馬遺跡黑褐色土層中出土遺物実測圖(1) (1/3)



第71圖 受馬遺跡黑褐色土層中出土遺物実測圖(2) (1/3)

B 類 (第72図1~12, 第76図15~20) ロクロ成形によるもので、底部に明瞭な糸切り痕が認められる。坏部は底部から緩く内湾して立ち上がる。胎上中に微砂粒を含み、淡黄褐色を呈す。出土量は非常に多く、ⅢB-1類とともに本遺跡の大半を占める。これらの年代も不明であるが14世紀以降のものである。

C 類 (第72図13~19, 第73図1~4) ロクロ成形によるもので、底部に糸切り痕を残す。底径に対する口径の比率が大きく、器壁が薄く、シャープな印象である。坏部は底部から直線的に延びる。色調が明褐色のものと、淡黄褐色の2種類が認められる。

D 類 (第73図5~8) 上述のA・B・C類と異なり小型で、直径3cmの小さく厚い底部を持つ。口径に比して器高が高いため、皿形土器ではなく、坏として分類した。底部外面には明瞭な糸切り痕が認められる。やや外反する坏部の薄さに対して、底部は厚く、内面がボタン状に盛り上がるものもある。

E 類 (第73図9~17) 破損が著しく全体としての器形は不明であるが、底部に脚・高台の付くものを坏E類として分類した。このため本来は皿形・碗形として分類されるべき個体を含んでいると思われる。脚・高台部を中心にE類-1~3に分けて述べる。

E類-1 (第73図9~11) 底部の厚さが2cm以上と厚いもので、高台状を呈する。底部以上は確認出来なかったものの、坏部の破断面は、非常に薄い。

E類-2 (第73図12~15, 第76図21, 22, 24) いわゆる「柱状高台」を早するもので、個体数は少ないが出土している。底部は糸切り痕を残す柱状で、柱状部が細く高いものと、太く低いものがある。坏部は不明である。同様の例に松江市石台遺跡、遺跡等があり、これらの遺跡では共伴する陶磁器から11世紀~12世紀と言われている。

E類-3 (第73図16・17, 第76図23) 坏部に中空の脚の付くもので、少数出土している。全体は不明であるが、E-2類の柱状高台と共に出土する例が知られており、同様の年代が考えられる。

椀形土器 (第69図5~6, 第73図18~25, 第75図1~3) 破損品が多く、全体を復元可能な個体は無かったが、現存部で器高が5cm以上のもの、または、これに手法の類似する個体を集めた。底部は糸切りによる切離しで、全体に器壁が薄いことが共通する特徴である。坏部は内湾しながら立上り、内外面とも強いナデ調整により、稜が多く付いている。

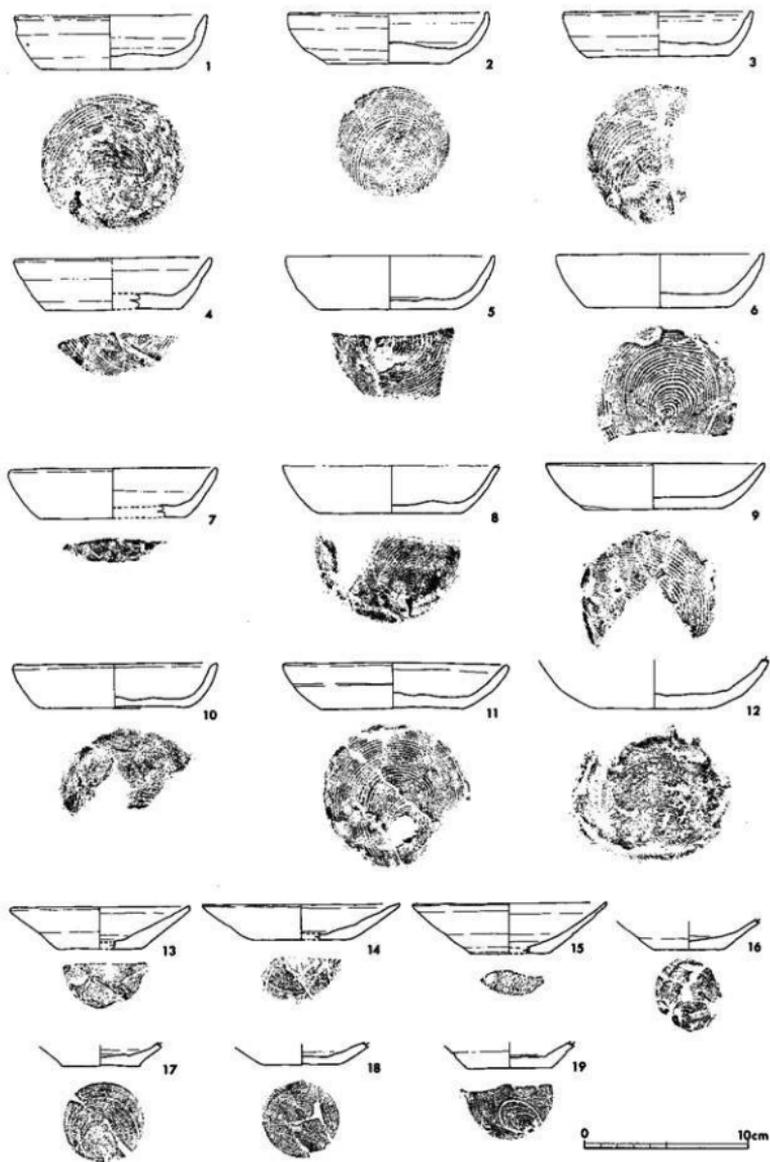
(2) 古墳時代土師器 (第74図1~8)

第2・4・5層の各層中と下層遺構間に接して、中・近世土師器と異なる時期の土師器片が数点出土している。前述の中近世土師器と区別してまとめて古墳時代土師器として述べる。

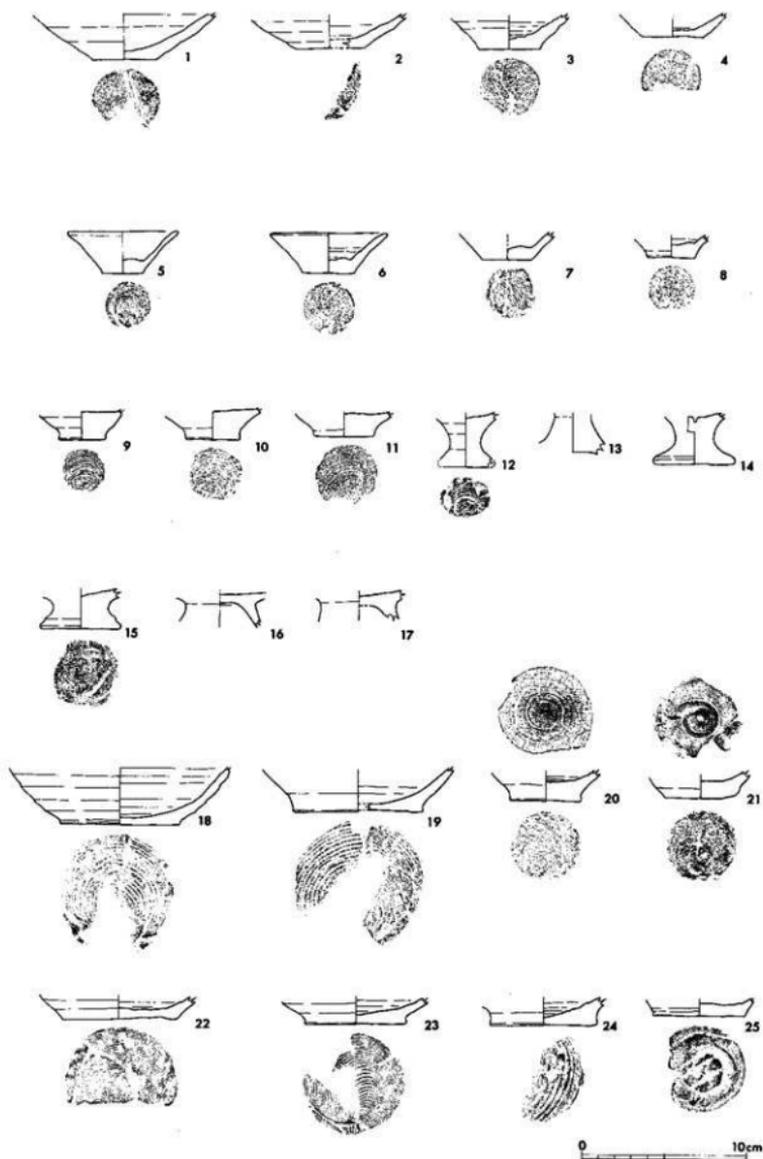
第2層中より出土した第74図1・2は古墳時代前期の低脚坏で、やや小さい脚部に深い坏部が付く。2の坏部は不明。3・4は変形土器の一部である。同図5は高坏の坏部で、脚・坏部ともに欠損しているが、古墳時代の高坏に特徴的な坏中央の円形の刺突孔が見られる。同図6~8は手づくね土器である。

第5層中より出土した第75図7は壺の上半で、かなり退化した複合口縁の口縁部を持ち、古墳時代前半期のもと思われる。

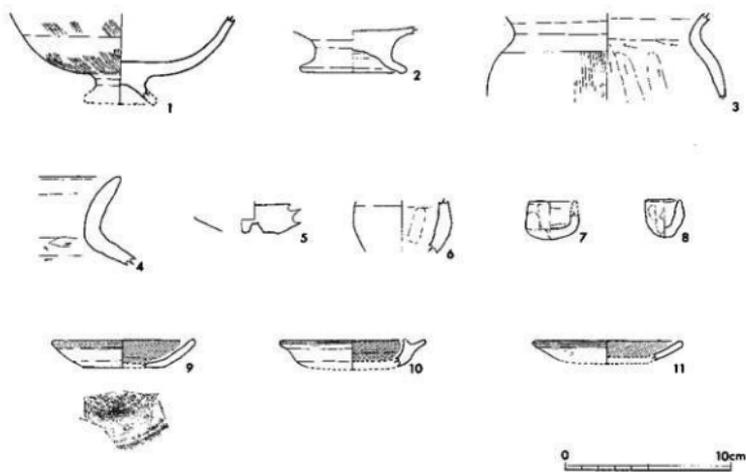
これらの土器は、小片であるが、風化や磨滅のあまり進んでいないものが多く、上述の時期の遺構が近接して存在している可能性が考えられよう。



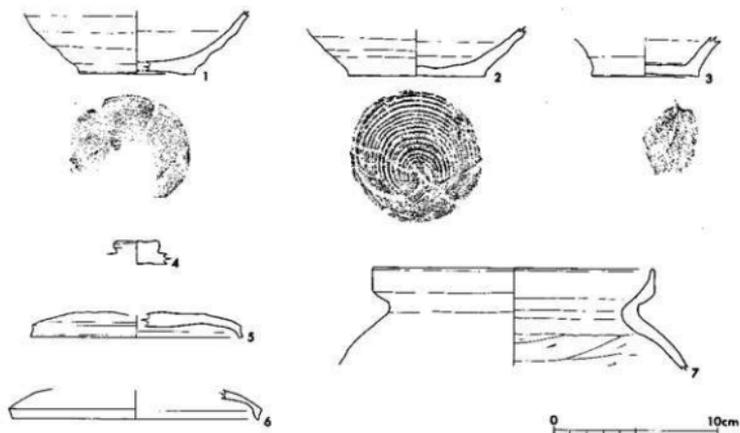
第72図 受馬遺跡黒褐色土層中出土遺物実測図(3) (1/3)



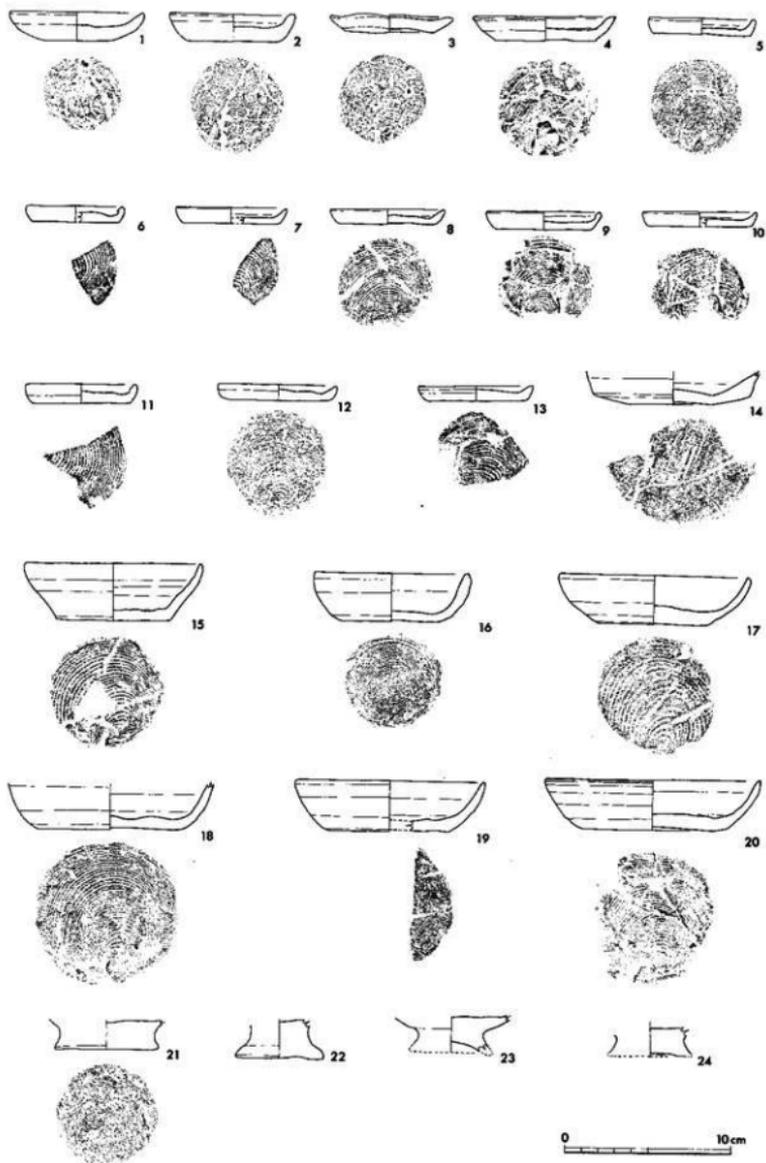
第73圖 受馬遺跡黑褐色土層中出土物實測圖(4) (1/3)



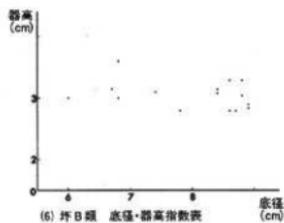
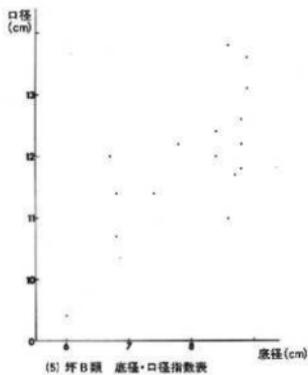
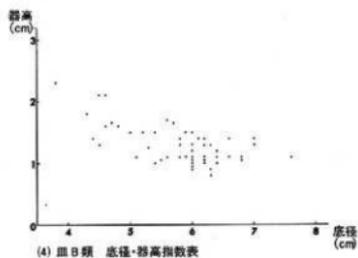
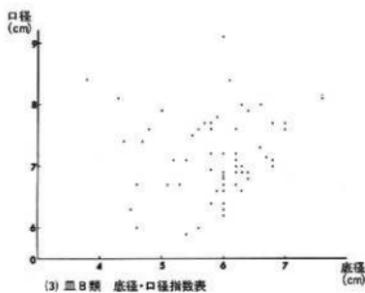
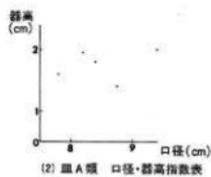
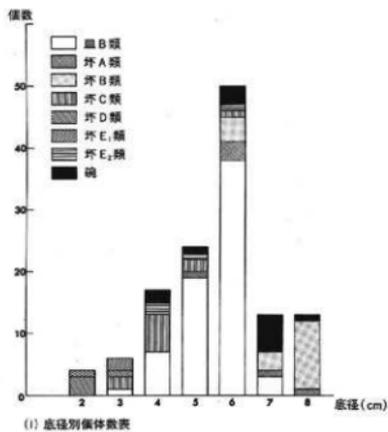
第74図 受馬遺跡黒褐色土層中出土遺物実測図(5) (1/3)



第75図 受馬遺跡その他の包含層出土遺物実測図(2) (1/3)



第76図 受馬遺跡その他の包含層出土遺物実測図(1) (1/3)



第77回 受馬遺跡出土中近世土師器法量比

(3) 須 恵 器 (第75図4～6)

第5層より小片の須恵器が少数ながら出土している(第75図4～6)。いずれも蓋の一部である。4はボタン状のつまみ部, 5・6は端部にかえりの付く蓋の一部である。これらは奈良時代以降のものと思われる。

(4) 陶 器 (第74図9～11)

現表土である第1層中より出土。小型の皿形を呈し、内面と外面の口縁部にやや紫がかった褐色の釉が施されているが、外面にはかかっていない。10はかえりがある。胎土は微砂粒を含み、褐色を呈する。産地や時代については判別し難い。

2. 古 銭 (第78, 79図)

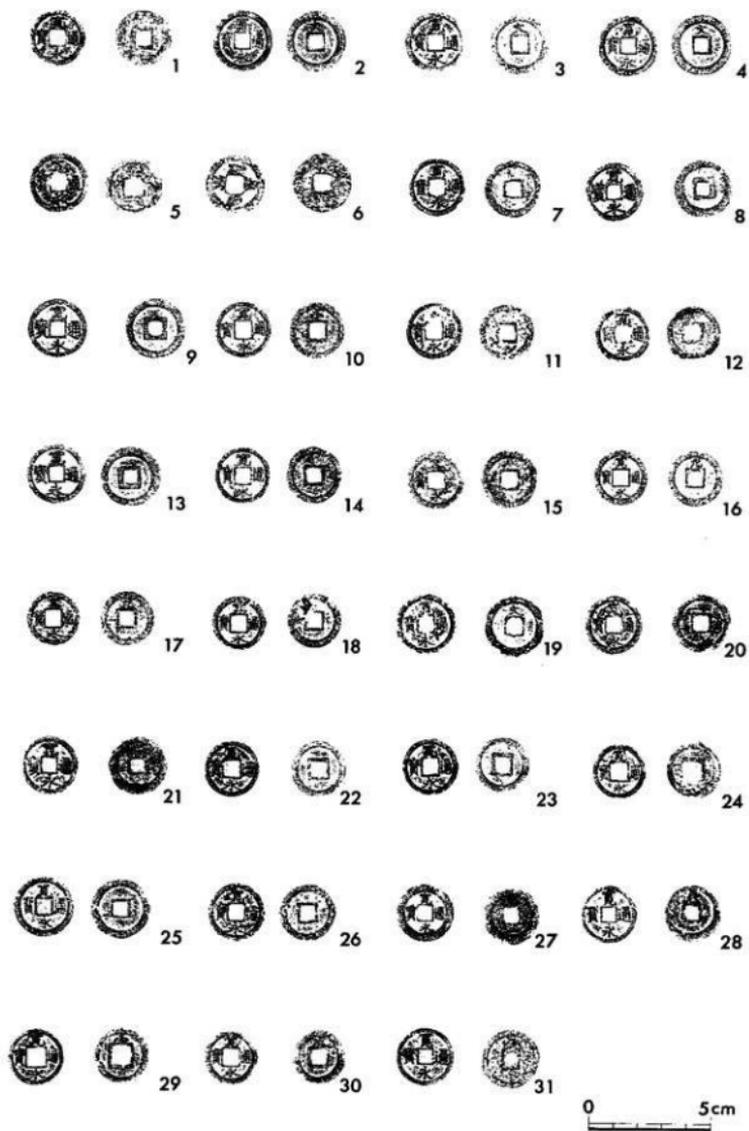
第5層中より寛永通宝50個以上と永楽通宝等の渡来銭が3個が出土した。これらは土器と同様遺構上面に堆積した遺物包含層中からの出土である。寛永通宝は径や鋳影の異なる数種のものがあり、判別可能なもので古寛永通宝9個, 文銭4個, 新寛永通宝16個が認められる。

3. 石 器 (第68図)

黒曜石製のスクレイパーで、長さ7cm, 幅4.8cm厚さ1.5cmを測る。第2層から出土している。遺跡からは他に剝片などは出土していないため、近接地からの後世の流入によるものと思われる。剝片の側面に剝離を施し刃部を作り出している。



第78図 受馬遺跡出土古銭拓影(1) (1/2)



第79圖 受馬遺跡出土古錢拓影(2) (1/2)

第4節 ま と め

以上のように、受馬遺跡では古墳時代の小規模な溝状遺構と、中世以降の土師器を用いた祭祀跡と思われる遺構を検出した。以下、後者の祭祀跡に関連して遺跡の性格についてまとめた。

今回の調査では、限定された狭い範囲内で、非常に細かく割れた多量の土師器が出土した。土器の大半は、風化や磨滅があまり進んでいないものの、非常に細かく割れており、この場所で何らかの目的で使用され、意図的に割られ、廃棄されたものと考えられる。検出遺構、土器の出土状態と、遺跡の立地等を合わせて考えると、受馬遺跡は日常的な生活の場や墓地の跡ではなく、目的は定かではないが、何らかの祭祀跡である可能性が高い。

島根県内における中世以降の土器を用いた祭祀関連遺構は、類例がいくらか知られている。埋葬と考えられる土壇や掘立柱建物跡と関連する遺構に伴って土師器の出土が知られている。斐川町西石橋遺跡⁽⁵⁾では上墳墓内・土壇より、11～13世紀の土師器が出土している。木次町妙見川遺跡⁽⁶⁾では埋葬と見られる土坑内⁽⁷⁾、山岳寺院に関連する掘立柱建物跡から11～13世紀ごろの土師器が出土している。安来市大坪遺跡⁽⁸⁾では、埋葬かどうかは不明であるが丘陵斜面を掘り込んだ穴より土師器が出土している。16世紀以降では、松江市大庭町八雲立つ風上記の丘地内にある岡田山1号墳墳裾⁽⁸⁾で、土師器皿を50個以上を納めた土壇が確認されている。また松江市竹矢町中竹矢遺跡⁽⁹⁾では墓墳を伴わない方台式の盛土遺構中から寛永通宝、揺鉢とともに「かわらけ」が出土しており、祭祀遺構に伴う可能性があることは以前より指摘されていた。受馬遺跡も、こうした祭祀遺構であると考えられる。特に前述の松江市中竹矢遺跡⁽⁹⁾では、古墳とは異なる軟弱な方形盛土遺構が古銭を伴って認められ、受馬遺跡で検出した盛土遺構との共通性が考えられる。また現代においても残る「オノ神さん」といった信仰においても盛土や集石が見られることも本遺跡を考える上で示唆的であろう。

受馬遺跡の年代については、年代決定が困難であるが、一部のみが、12～13世紀に遡るものであり、下限は寛永通宝の流通する17世紀以降の土器と考えられる。下限については出土銭貨や遺物に明治時代以降のものを全く含まないことより最も新しく考えても明治時代以前ということになる⁽¹¹⁾。しかしこのように長期に渡って継続してこの地が祭祀の場として機能していたとは考え難く、この期間に限られた「時期」のみ祭祀の場であったと考えられる。この「時期」がいつであるかは、いまのところ柱状高台のある12～13世紀ごろと畿内系の皿のある16世紀～17世紀は明らかであるがその他の大半の土器の時期が明らかでなく、遺跡の主要な年代は不明であると言わざるを得ない。

以上のように、現段階では受馬遺跡の祭祀や土師器について明らかにし得たことは少ないが、今後の類例の増加を待って検討すべき課題であろう。

註

- (1) これは回転台土師器、土師質土器などと呼ばれるもので、「かわらけ」と呼ばれる土師皿もこれに含まれる。
- (2) 広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』第8集 松江考古学談話会 1992年
- (3) 例えば松江城二ノ丸番所跡、松江市岡田山1号墳墳裾土坑、広瀬町富田河川遺跡、松江市竹屋町中竹矢遺跡などがある。

『松江市文化財調査報告書第56集 史跡松江城発掘調査 一、ノ丸番所跡一』松江市教育委員会 1993年

『岡田山古墳群』島根県教育委員会 1985年

『富田河』島根県教育委員会 1984年

三宅博士、広江耕史他「中竹矢遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
島根県教育委員会 1985年

- (4) 伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集第1集』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- (5) 川原和人・桑原真二「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会 1987年
- (6) 『妙見山遺跡』木次町文化財調査報告書第3集』木次町教育委員会 1995年
- (7) 「大坪遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1976年
- (8) 『岡田山古墳群』島根県教育委員会 1985年
- (9) 「中竹矢遺跡」『9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会 1985年
- (10) (9)と同じ
- (11) 明治時代の貨銭を伴ってかわらけが出土した松江市才の神遺跡のかわらけは胎土が非常に緻密で、受馬遺跡のものとは、様相を異にすることからも、受馬遺跡の土器は明治時代のものは含まれていないと思われる。

受馬遺跡遺物観察表

探検番号	器種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	手 法 の 特 徴	出土地点	備 考
		口径	底径	器高						
第69図1	土師器 B	7.1	6.8	0.85	緻密	良好	黄褐色	底部糸切り	D-3土器群1	
第69図2	土師器 B	7.7	5.7	1.65	緻密	良好	黄褐色	底部糸切り、 内外面回転ナデ	D-3土器群1	
第69図3	土師器 B	7.15	6.7	1.15	普通	普通	黄褐色	底部糸切り、 内外面回転ナデ	D-3土器群1	
第69図4	土師器 B	6.3	6.0	1.3	普通	普通	黄褐色	底部糸切り、外面回転ナデ 内面回転ナデ、ナデ	D-3土器群1	
第69図5	土師器 A	13.9	7.0	3.4	やや粗 1mm程度の 半透明の粒を含む	普通	明褐色	底部糸切り、 内外面回転ナデ	D-3土器群1	
第69図6	土師器 A	11.6	7.1	2.4	やや粗 1mm程度半 透明、白い粒を含む	普通	黄褐色	底部糸切り、 内外面回転ナデ	D-3土器群1	
第70図1	土師器 A	8.75		1.4	普通	普通	淡黄褐色	外面ナデ、内面ヨコナデ 口縁端部回転ナデ	D-3黒陶	
第70図2	土師器 A	8.2		1.95	やや粗い	普通	明褐色	内外面ヨコナデ 口縁部回転ナデ	D-3黒陶	
第70図3	土師器 A	7.8		1.6	1mm以下の砂粒含む	普通	淡黄褐色	底部ナデ、内面ヨコナデ 外面ヨコナデ重畳回転ナデ	D-3黒陶	非クロロ系
第70図4	土師器 A	8.4		1.8	砂粒少ない	やや不良	淡黄褐色	外面ヨコナデ面仕磨 内面ヨコナデ 底部ナデ 中央がややへそ状	D-3黒陶	底部に黒斑非クロロ系
第70図5	土師器 A	9.4		2.0	白、褐色砂粒含む	良好	淡黄褐色	底部ヨコナデ 外面回転ナデ 内面ヨコナデ	D-3黒陶	
第70図6	土師器 A	10.0			普通 1mm程度の 半透明粒を含む	普通	明褐色	底部未調整、 内外面回転ナデ	D-3黒陶	非クロロ系
第70図7	土師器 A	11.6			普通	不良	淡黄褐色	外面回転ナデヨコナデ 内面ヨコナデ	D-3黒陶	黒斑あり
第70図8	土師器 A	11.0			普通	やや不良	淡黄褐色	底部未調整 内面回転ナデ 口縁端部回転ナデ	D-3黒陶	非クロロ系内外黒斑
第70図9	土師器 A	(12.3)			砂粒少ない	やや不良	淡黄褐色	外面ヨコナデ未調整 内面ヨコナデ	D-3黒陶	非クロロ系
第70図10	土師器 A	13.0			普通	普通	黄褐色		D-3黒陶	黒斑
第70図11	土師器 A	13.6			普通	良好	黄褐色	外面未調整 内面回転ナデ	D-3黒陶	
第70図12	土師器 B-1	6.3	4.5	2.1	緻密	良好	茶褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3黒陶	
第70図13	土師器 B-1	6.0	4.6	2.1	普通	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-2黒陶	底部厚い
第70図14	土師器 B-1	7.4	4.7	1.65	緻密	良好	褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3黒陶	
第70図15	土師器 B-1	(8.4)	3.8	2.3	粗	不良	明褐色	底部回転糸切り 内外面不明	D-3黒陶	
第70図16	土師器 B-1	6.3	4.5	1.3	普通	良好	黄褐色	底部回転糸切り後ヘラによる調整 外面回転ナデ 内面ヨコナデ	D-3黒陶	
第70図17	土師器 B-1	6.7	4.6	1.6	普通	普通	茶褐色	底部糸切り、 内外面回転ナデ	D-3黒陶	黒斑
第70図18	土師器 B-1	7.1	5.4	1.5	普通	良好	外壁黄色 内壁黄色	底部回転糸切り 外面回転ナデ、内面ヨコナデ 口縁端部回転ナデ	D-3黒陶	
第70図19	土師器 B-1	7.4	4.4	1.4	普通	普通	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3黒陶	
第70図20	土師器 B-1	7.6	4.8	1.6	普通	普通	黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面ヨコナデ回転ナデ	D-3黒陶	
第70図21	土師器 B-1	7.9	5.0	1.5	普通	良好	黄褐色	底部へら切磨し後断面直 外面回転ナデ、内面ヨコナデ 口縁端部回転ナデ	D-3黒陶	

採掘番号	器種	法 量			土質	焼成	色調	手法の特徴	出土地点	備考
		口径	底径	器高						
第70822	土師器 皿B-1	8.0	6.6	1.4	砂粒含む	良好	黄褐色	底部へち切り、外面回転ナゲ 内面ナゲ	D-3 黒陶	
第70823	土師器 皿B-2	6.0	5.6	1.1	普通	普通	明褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-3 黒陶	黒斑あり
第70824	土師器 皿B-2	6.9	6.0	1.3	普通 砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-2 黒陶	
第70825	土師器 皿B-2	6.4	5.8	1.3	普通	良好	黄褐色	底部系切り、外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ 口縁端部回転ナゲ	D-3 黒褐色	
第70826	土師器 皿B-2	6.6	6.4	1.2	普通	普通	茶褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ 口縁端部回転ナゲ	D-3 黒陶	大きな黒斑
第70827	土師器 皿B-2	6.6	6.0	1.05	やや粗 1mm以上 の白色粒含む	普通	橙黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-3 黒陶	
第70828	土師器 皿B-2	6.4	6.0	1.0	普通	普通	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-2 黒陶	黒斑あり
第70829	土師器 皿B-2	6.9	6.2	1.1	砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ、内面ナゲ	D-3 黒陶	
第70830	土師器 皿B-2	6.9	6.4	1.2	普通	普通	黄褐色	底部回転系切り	D-3 黒陶	
第70831	土師器 皿B-2	6.7	6.0	0.95	普通	普通	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-2 黒陶	黒斑あり
第70832	土師器 皿B-2	7.0	6.2	1.05	普通	良好	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-2 黒陶	黒斑あり
第70833	土師器 皿B-2	6.7	6.0	1.1	普通	普通	淡黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-2 黒陶	普通黒斑あり
第70834	土師器 皿B-2	6.9	6.4	1.0	普通	良好	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-3	
第70835	土師器 皿B-2	7.0	6.3	8.0	普通	普通	黄褐色	底部回転系切り	D-3 黒陶	
第70836	土師器 皿B-2	7.0	6.8	1.1	普通 砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-2 黒陶	
第70837	土師器 皿B-2	7.3	6.6	1.1	普通	普通	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-2 黒陶	
第70838	土師器 皿B-2	7.7	7.0	1.4	普通	普通	明褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-3 黒陶	
第70839	土師器 皿B-2	8.1	7.6	1.1	普通 白色粒含む	普通	橙黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ 口縁端部回転ナゲ	D-3 黒陶	黒斑あり
第71図1	土師器 皿B-2	6.7	5.3	1.25	やや粗 石実粒あり	普通	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-3 黒陶	
第71図2	土師器 皿B-2	7.2	5.8	1.4	普通	良好	橙黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ、内面ヨコナゲ 口縁端部回転ナゲ	D-3 黒陶	
第71図3	土師器 皿B-2	6.8	6.0	1.3	緻密	普通	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-3 黒陶	黒斑あり
第71図4	土師器 皿B-2	6.7	6.0	1.05	普通 白半透明の 微小砂粒含む	普通	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-3 黒陶	
第71図5	土師器 皿B-2	6.95	5.8	1.3	緻密	良好	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-3 黒陶	黒斑あり
第71図6	土師器 皿B-2	6.6	5.9	1.1	1mm以内の砂粒を 含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナゲ 内面ヨコナゲ回転ナゲ	D-3 黒陶	
第71図7	土師器 皿B-2	6.7	6.0	1.5	普通	普通	明褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-3 黒陶	
第71図8	土師器 皿B-2	6.7	5.1	1.1	普通	普通	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナゲ	D-3 黒陶	

採石番号	部 種	法 象			胎 土	純 色	色 調	工 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
		口 径	底 径	容 積						
第71図9	土師器 甕B-2	7.2	6.2	1.3	普通	良好	橙黄色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図10	土師器 甕B-2	7.2	5.8	1.4	やや粗 白色、半 透明砂粒を含む	普通	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図11	土師器 甕B-2	7.9	6.4	1.1	砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り、底部指状 外面回転ナゲ、内面ナゲ	D-3 黒馬	
第71図12	土師器 甕B-2	7.1	6.2	1.3	普通 5mm以上の 砂粒含	普通	黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図13	土師器 甕B-2	6.7	6.0	1.05	普通 白、半透明 の粒小粒を含む	普通	黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図14	土師器 甕B-2	7.2	6.0	1.0	普通	良好	橙黄色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ、内面回転ナゲ 口縁端部回転ナゲ	D-3	
第71図15	土師器 甕B-2	7.7	6.8	1.05	緻密	良好	黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図16	土師器 甕B-2	6.8	6.4	1.1	普通	普通	黄褐色	底部回転糸切り 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	黒斑
第71図17	土師器 甕B-2	7.7	5.8	1.1	砂粒含む	やや不良	淡黄褐色	底部回転糸切りヘラナゲ 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図18	土師器 甕B-2	7.6	5.8	1.3	普通	良好	橙黄色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ、内面回転ナゲ 口縁端部回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図19	土師器 甕B-2	7.6	7.0	1.3	普通	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-2 黒馬	
第71図20	土師器 甕B-2	7.6	6.2	1.4	普通	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図21	土師器 甕B-2	8.0	6.3	1.3	普通 1mm程度の 半透明粒を含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図22	土師器 甕B-2	7.8	5.9	1.5	3mm以上の砂粒含 まず	良好	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図23	土師器 甕B-2	7.6	5.6	1.7	やや粗 砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り、底部指状 外面回転ナゲ、内面ナゲ	D-3 黒馬	暗褐色斑文
第71図24	土師器 甕B-2	7.1	5.2	1.5	緻密	良好	黄褐色	底部回転糸切り	C-3 黒馬	
第71図25	土師器 杯 A	11.0	7.0	4.0	白色粒含む	良好	明褐色	底部ヘラ切り、外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-2 黒馬	
第71図26	土師器 杯 A	10.5	6.8	3.5	普通	普通	黄褐色	底部ヘラ切り後ナゲ 内外面回転ナゲ	D-2 黒馬	
第71図27	土師器 杯 A	12.1 5			密 白、褐色粒含	良好	明褐色	底部ヘラ切り後調整 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図28	土師器 杯 A	(8.0)			普通	普通	橙褐色	底部ヘラ切り後平行線状圧痕 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図29	土師器 杯 A	6.8			普通 白、黒色粒 含む	良好	黄褐色	底部ヘラ切り後放射状圧痕 内外面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第71図30	土師器 杯 A	6.8			普通	普通	淡黄褐色	底部ヘラ切り後平行線状圧痕 外面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第72図1	土師器 杯 B	11.0	8.6	3.3	普通	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3 黒馬	
第72図2	土師器 杯 B	12.0	6.7	3.15	白、黒色粒含む	良好	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-2 黒馬	
第72図3	土師器 杯 B	11.7	8.7	2.8	普通	普通	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-2 黒馬	

探番号	器種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	手法の特徴	出土地点	備 考
		口径	底径	器高						
第72804	土師器 杯 B	12.0	8.4	3.15	砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-2 黒溝	
第72805	土師器 杯 B	12.2	8.8	3.3	普通	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第72806	土師器 杯 B	11.8	8.8	3.3	普通	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第72807	土師器 杯 B	12.6	8.8	3.05	白色粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-2 黒溝	
第72808	土師器 杯 B	13.1	8.9	2.9	普通	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り	D-3 黒溝	
第72809	土師器 杯 B	13.8	8.6	2.8	普通	普通	黄褐色	底部回転糸切り外面回転ナデ 内面ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第72810	土師器 杯 B	12.2	7.8	2.8	普通 白色、半透明 砂粒を含む	やや不良	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第72811	土師器 杯 B	13.6	8.9	2.85	普通 1mm以下の 白、黒色粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 外底回転ナデ 内面ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第72812	土師器 杯 B		7.4		普通	普通	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第72813	土師器 杯 C	(10.9)	5.2	2.6	砂粒少ない	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第72814	土師器 杯 C	12.1	6.0	2.2	滑	良好	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内底ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第72815	土師器 杯 C	11.8	4.8	3.1	緻密	良好	黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第72816	土師器 杯 C		4.3		滑	良好	外淡黄褐色 内明褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D 2 黒溝	
第72817	土師器 杯 C		4.9		普通 1~2mmの 砂粒含む	良好	淡黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第72818	土師器 杯 C		4.6		滑 白、褐色砂粒 を含む	良好	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第72819	土師器 杯 C	(5.2)			普通 1~2mmの 砂粒含む	良好	淡黄褐色 外明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第73801	土師器 杯 C		4.0		普通 砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第73802	土師器 杯 C	(4.1)			白、褐色砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り、内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第73803	土師器 杯 C		3.7		普通	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第73804	土師器 杯 C		3.8		普通 砂粒を含む	良好	暗黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面ヨコナゲ回転ナデ	D-3 黒溝	
第73805	土師器 杯 D	6.8	2.6	2.55	粗 白色半透明粒 含む	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第73806	土師器 杯 D	6.9	3.1	2.5	白色砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	
第73807	土師器 杯 D		2.95		粗 白色半透明粒 含む	普通	褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	D-3 黒溝	黒斑あり
第73808	土師器 杯 D		2.9		白色粒を含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面回転ナデ	D-3 黒溝	
第73809	土師器 杯E-1		2.9		砂粒含む	良好	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面回転ナデ未調整	D-3 黒溝	
第73810	土師器 杯E-1		3.2		白色粒を含む	良好	褐色	底部回転糸切り 外面回転ナデ 内面未調整回転ナデ	D-3 黒溝	
第73811	土師器 杯E-1		3.6		普通	普通	明褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナデ	C-3 黒溝	黒斑あり

採掘番号	器種	法 量			胎 土	焼 成	色 調	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
		口径	底径	器高						
第73図12	土師器 坏E-2				普通 砂粒含む	良好	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ、内面ナゲ	D-3黒濁	
第73図13	土師器 坏E-2				1mm以下の白色粒 を含む	良好	茶褐色	外面回転ナゲ	D-3黒濁	
第73図14	土師器 坏E-2	4.8			砂粒を多く含む	やや不良	淡黄褐色	底部糸切り、内外面ナゲ	D-3黒濁	
第73図15	土師器 坏E-2	4.4			砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-2黒濁	柱状高台
第73図16	土師器 坏E-3				金雲母、黒色粒等 を含む	やや不良	黄褐色 淡黄褐色	内面回転ナゲ	D-3黒濁	
第73図17	土師器 坏E-3				白、褐色粒多く含	良好	明褐色	ナゲ	D-2黒濁	
第73図18	土師器 碗	7.2			密 砂粒少ない	良好	橙黄色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-3黒濁	黒底あり
第73図19	土師器 碗	7.9			普通 砂粒含む	普通	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-3黒濁	
第73図20	土師器 碗	4.2			1mmの白、褐色砂 粒を含む	良好	明褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3黒濁	
第73図21	土師器 碗	4.4			粗い	普通	外褐色 内褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-3黒濁	
第73図22	土師器 碗	7.0			白、褐色粒含む	良好	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-2黒濁	
第73図23	土師器 碗	6.2			1mm以下の白、黒 色粒含む	良好	黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	D-2黒濁	
第73図24	土師器 碗	6.4			砂粒含む	良好	淡黄褐色	底部回転糸切り 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3黒濁	
第73図25	土師器 碗	5.6			普通	普通	淡黄褐色	底部ヘラ切り平行線 外面回転ナゲ 内面回転ナゲ	D-3黒濁	
第74図1	土師器 扁脚杯				石英長石粒含む	良好	淡黄褐色	外面ハケのちナゲ	D-2黒濁	古墳前期
第74図2	土師器 扁脚杯	6.0			砂粒含む	やや不良	淡黄褐色	回転ナゲ	D-3黒濁	
第74図3	土師器 壺				やや粗 3mm程の 石英長石粒含む	良好	黄褐色	外面ヨコナゲ、ハケメ 内面ヨコナゲ、ケズリ	D-2黒濁	黒底あり古墳中 後期
第74図4	土師器 壺				白色、半透明粒を 含む	良好	淡黄褐色	外面ヨコナゲ、ハケ 内面ヨコナゲ、ケズリ	D-3黒濁	古墳後期
第74図5	土師器 高 杯				やや粗 石英多い	良好	褐色		D-3黒濁	古墳時代
第74図6	土師器 手 捏				3mm程長石粒など 砂粒含む	良好	黄褐色	外面ナゲ? 内面ヨコナゲナゲ?	D-2黒濁	手づくねか
第74図7	土師器 手 捏				石英、長石など砂 粒含む	良好	黄褐色	手づくね	D-3黒濁	ミニチュア土器
第74図8	土師器 手 捏				石英、長石など砂 粒含む	良好	黒褐色	手づくね	D-3黒濁	ミニチュア土器
第74図9	陶 器 皿	8.4	4.8	1.7	密 白色粒含む	良好	明褐色	内外面回転ナゲ	D-2黒濁	濃紫褐色釉144 と同一?
第74図10	陶 器 皿	8.8			密 白色粒含む	良好	明褐色	外面回転ナゲ	D-2黒濁	濃紫褐色釉
第74図11	陶 器 皿	8.8			密 白色粒含む	良好	明褐色	内外面回転ナゲ	D-2黒濁	濃紫褐色釉
第75図1	土師器 碗	7.0			砂粒含む	やや不良	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	C-3白灰	
第75図2	土師器 碗	8.2			普通 砂粒含む	良好	淡黄褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	C-3暗青灰	
第75図3	土師器 碗	6.0			やや粗 3mm以内 の砂粒含む	普通	淡黄褐色 茶褐色	底部回転糸切り 内外面回転ナゲ	C-3白灰	
第75図4	須恵器 坏 蓋				石英、長石を含む	やや不良	褐色	外面回転ナゲ	C-3白灰	

採掘番号	器種	法 量			胎 上	焼 成	色 調	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
		口径	底径	器高						
第7685	須恵器 杯 蓋	12.9			緻密 1mm以上の 白粒あり	良好	暗青灰色	外面回転ナデ 内面回転ナデナデ	C-3 暗青灰	
第7686	須恵器 杯 蓋	15			緻密	良好	青灰色	内外面回転ナデ	C-3 黄濁灰	
第7687	土師器 釜	17.0			やや粗 白半透明 透明粒含む	良好	暗褐色	外面ヨコナデ 内面ヨコナデナズリ	C-3 白灰	古墳中期
第7688	土師器 皿B-1	8.1	4.3	1.8	やや粗	良好	明褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	D-3 黄濁灰	
第7689	土師器 皿B-2	7.7	5.7	1.65	普通 砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	拡張部状	
第7690	土師器 皿B-2	7.5	5.5	1.05	3mm以下の砂粒含む	良好	淡黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナデ 内面回転ナデヨコナデ	拡張部状	
第7691	土師器 皿B-2	8.4	6.1	1.4	緻密	良好	淡黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	D-3 白灰	
第7692	土師器 皿B-2	6.4	6.0	1.0	普通 砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	D-3 青灰	
第7693	土師器 皿B-2	5.9	5.4	1.0	緻密	普通	黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナデ 内面回転ナデヨコナデ	C-3 黄濁灰	
第7694	土師器 皿B-2	6.7	6.0	0.95	緻密	良好	白灰色	底部回転系切り	C-3 暗青灰	
第7695	土師器 皿B-2	6.85	6.0	0.9	普通 1mm以下の 白色粒	普通	淡黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナデ 内面ヨコナデ回転ナデ	D-3 黒褐	
第7696	土師器 皿B-2	6.9	6.0	1.1	普通	普通	黒灰色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	D-3 黄濁灰	全面に黒斑
第7697	土師器 皿B-2	6.9	6.3	0.9	やや粗 1mm以下 の白色粒あり	普通	赤褐色	底部回転系切り 外面回転ナデ 内面ヨコナデ回転ナデ	C-3 白灰	
第7698	土師器 皿B-2	6.7	6.0	1.2	やや粗 1mm以下 の白色粒含む	普通	淡黄褐色	底部回転系切り 外面回転ナデ 内面回転ナデヨコナデ	C-3 黄濁灰	
第7699	土師器 皿B-2	6.7	6.2	1.0	普通	普通	淡褐色	底部回転系切り	C-3 黄濁灰	
第7700	土師器 皿B-2	9.1	6.0	0.9	普通	普通	淡黄褐色	底部回転系切り	C-3 黄濁灰	
第7701	土師器 杯 A	5.1			普通 1mm以下の 白半透明粒含む	普通	橙白色	底部ヘラ切り?	C-3 黒褐	
第7702	土師器 杯 B	10.7	6.8	3.6	普通	良好	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	D-3 黒褐	
第7703	土師器 杯 B	9.4	6.0	3.0	砂粒端に含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	C-3 白灰	
第7704	土師器 杯 B	11.4	6.8	3.0	やや粗 白色長石 粒含む	良好	乳白色	底部回転系切り 外面回転ナデ 内面ヨコナデ回転ナデ	C-3 白灰	
第7705	土師器 杯 B	8.8			普通 砂粒含む	良好	黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	D-3 青灰	
第7706	土師器 杯 B	11.4	7.4	3.1	白色長石粒含む	やや不良	黄灰色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	C-3 白灰	
第7707	土師器 杯 B	12.4	8.4	3.1	普通	普通	淡黄褐色	底部回転系切り 内外面回転ナデ	D-3 白灰	
第7708	土師器 杯B-2	6.2			砂粒含む	不良	黄濁白色	底部回転系切り	D-2 白濁黄濁	
第7709	土師器 杯B-2	5.2			普通 白色、石英 粒含む	やや不良	淡黄色	外面ナデ、内面回転ナデ	C-3 白灰	
第7710	土師器 杯B-3				石英、長石を含む	やや不良	乳白色	外面ヨコナデ	C-3 白灰	
第7711	土師器 杯B-2				普通 白色、石英 粒含む	やや不良	淡黄色	外面ヨコナデ? 内面ナデ?	C-3 白灰	

受馬遺跡出土古銭計測値

挿図番号	土層	裏面	種類	直径 (cm)	中央穴径 (cm)	厚さ (cm)	その他
第78図1	黒		永楽通宝	2.5	0.5	0.14	
第78図2	黒		?元?宝				
第78図3	黒		元通?宝	2.45	0.55	0.1	
第79図1	3 - C		古	2.3	0.6	0.1	
第79図2	3 - C	文	文銭	2.5	0.55	0.1	
第79図3	3 - C	文	文銭	2.5	0.55	0.1	
第79図4	3 - C	文	文銭	2.6	0.55	0.13	
第79図5	3 - C	-	新	2.5	0.6	0.1	
第79図6		-	新?	2.5	0.65	0.07	
第79図7	黒	-	新	2.4	0.6	0.1	
第79図8	黒	-	古	2.45	0.5	0.09	
第79図9	黒	-	古	2.5	0.55	0.11	
第79図10	黒	-	新	2.4	0.7	0.1	
第79図11	黒	-	?	2.3	0.6	0.1	
第79図12	黒	-	古	2.25	0.7	0.1	
第79図13	黒	-	古	2.5	0.5	0.12	
第79図14	黒	-	新	2.3	0.55	0.1	
第79図15	黒	-	新	2.35	0.6	0.07	
第79図16	黒	尤	新(元)	2.25	0.6	0.11	
第79図17	黒	尤	?	2.3	0.6	0.11	
第79図18	黒		古	2.2	0.6	0.08	
第79図19	黒	文	文銭	2.5	0.6	0.08	
第79図20	黒	-	新	2.4	0.5	0.12	
第79図21	黒	-	古	2.4	0.55	0.12	
第79図22	黒	-	新	2.3	0.65	0.08	
第79図23	黒	-	新	2.3	0.6	0.09	
第79図24	黒	-	古?	2.3	0.6	0.11	
第79図25	黒	-	新	2.5	0.55	0.11	
第79図26	黒	-	新?	2.35	0.6	0.1	
第79図27	黒		新(九)	2.4	0.55	0.1	
第79図28	黒		新(?)	2.35	0.5	0.1	
第79図29	黒		新(小)	2.3	0.7	0.13	
第79図30	黒		新(元)	2.25	0.6	0.1	
第79図31	黒		新(長)	2.4	0.5	0.1	穴が丸い

圖 版



四ツ廻Ⅱ遺跡調査後近景（空中撮影）



四ツ廻Ⅱ遺跡調査後（空中撮影）



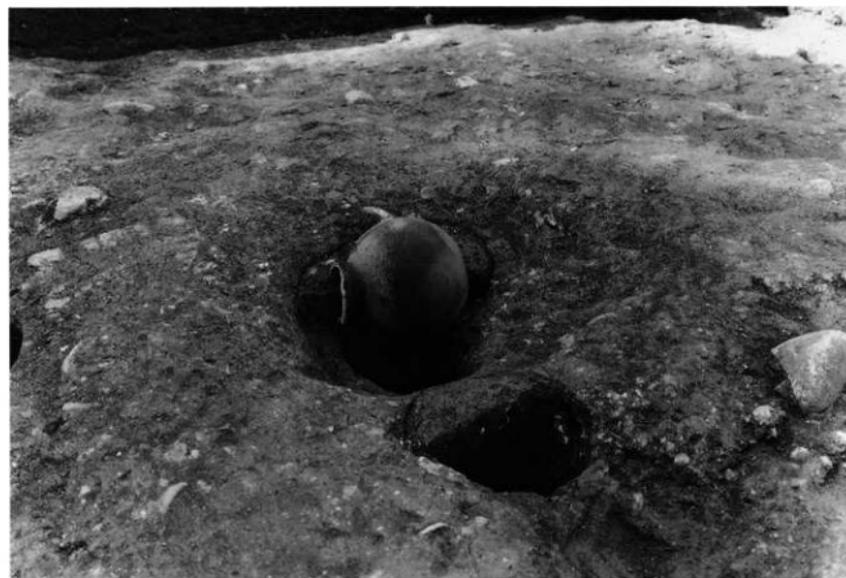
四ツ廻Ⅱ遺跡 SI01完掘状況(1)



四ツ廻Ⅱ遺跡 SI01完掘状況(2)



四ツ廻Ⅱ遺跡 S101土器出土状況(1)



四ツ廻Ⅱ遺跡 S101土器出土状況(2) (第21図1)



四ツ廻Ⅱ遺跡 SI01ピット17内土器出土状況(1) (第23図3)



四ツ廻Ⅱ遺跡 SI01ピット17内土器出土状況(2) (第23図3)

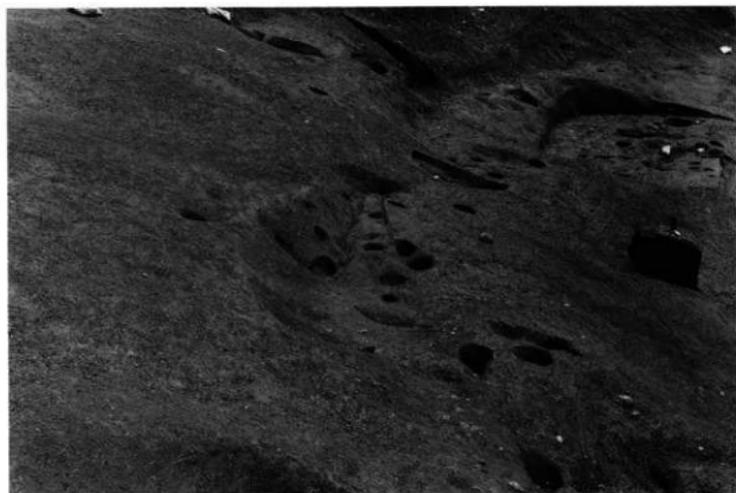
四ツ廻Ⅱ遺跡 SI01土器出土状況(3)
(第23図8)



四ツ廻Ⅱ遺跡 SI01土器出土状況(4)
(第23図9)



四ツ廻Ⅱ遺跡 SI01外側加工段土器溜り出土状況



四ツ廻Ⅱ遺跡 SB01完掘状況



四ツ廻Ⅱ遺跡SB01遺物出土状況
(第28図2)



四ツ廻Ⅱ遺跡SB02遺物出土状況



四ツ廻Ⅱ遺跡 SB03~SB10完掘状況



四ツ廻Ⅱ遺跡 SB03完掘状況